

656

161



\* 0054617000 \*

0054617-000

656-161

静岡県伝説昔話集

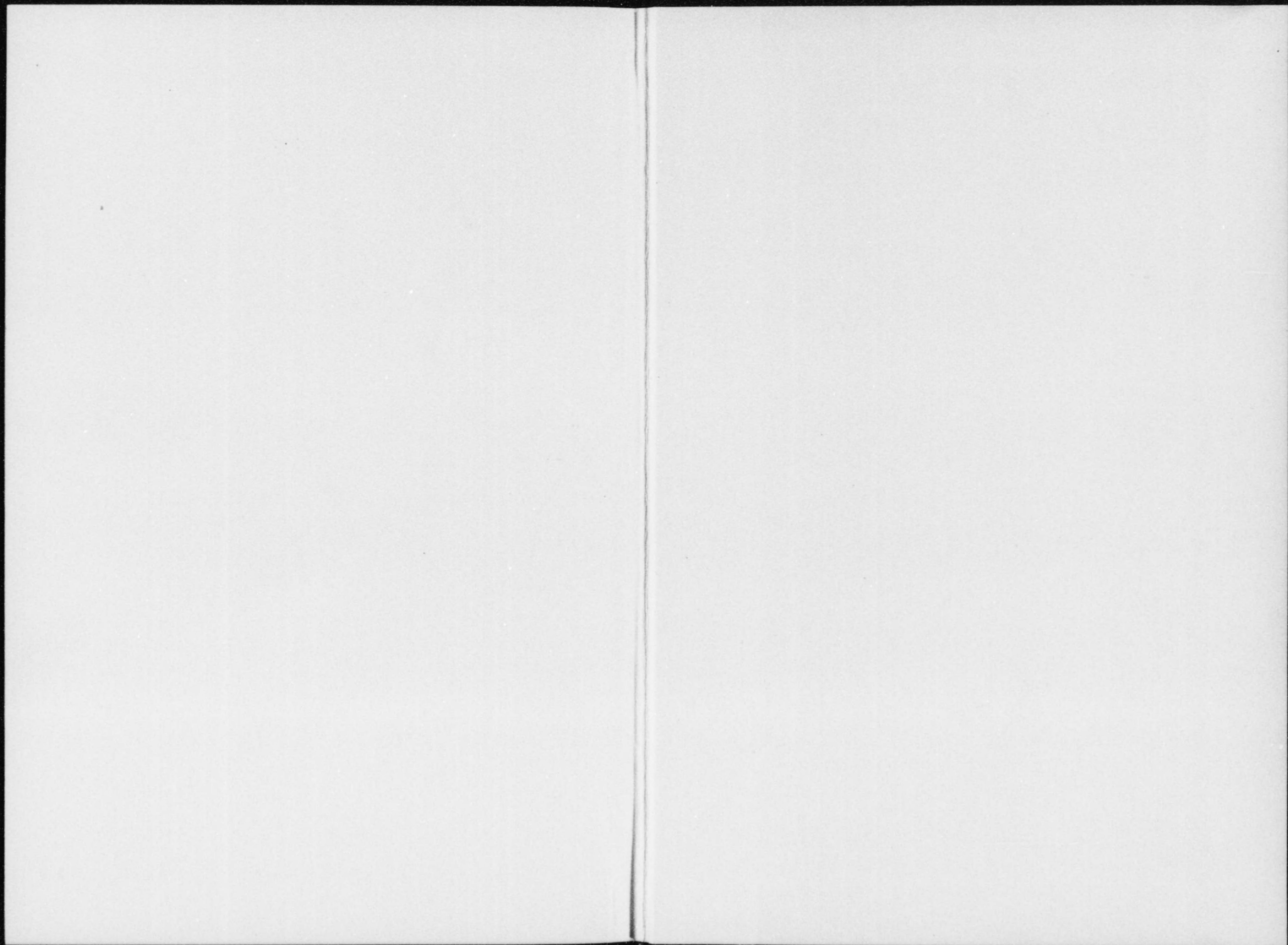
静岡県女子師範学校郷土研究会・編

静岡谷島屋書店

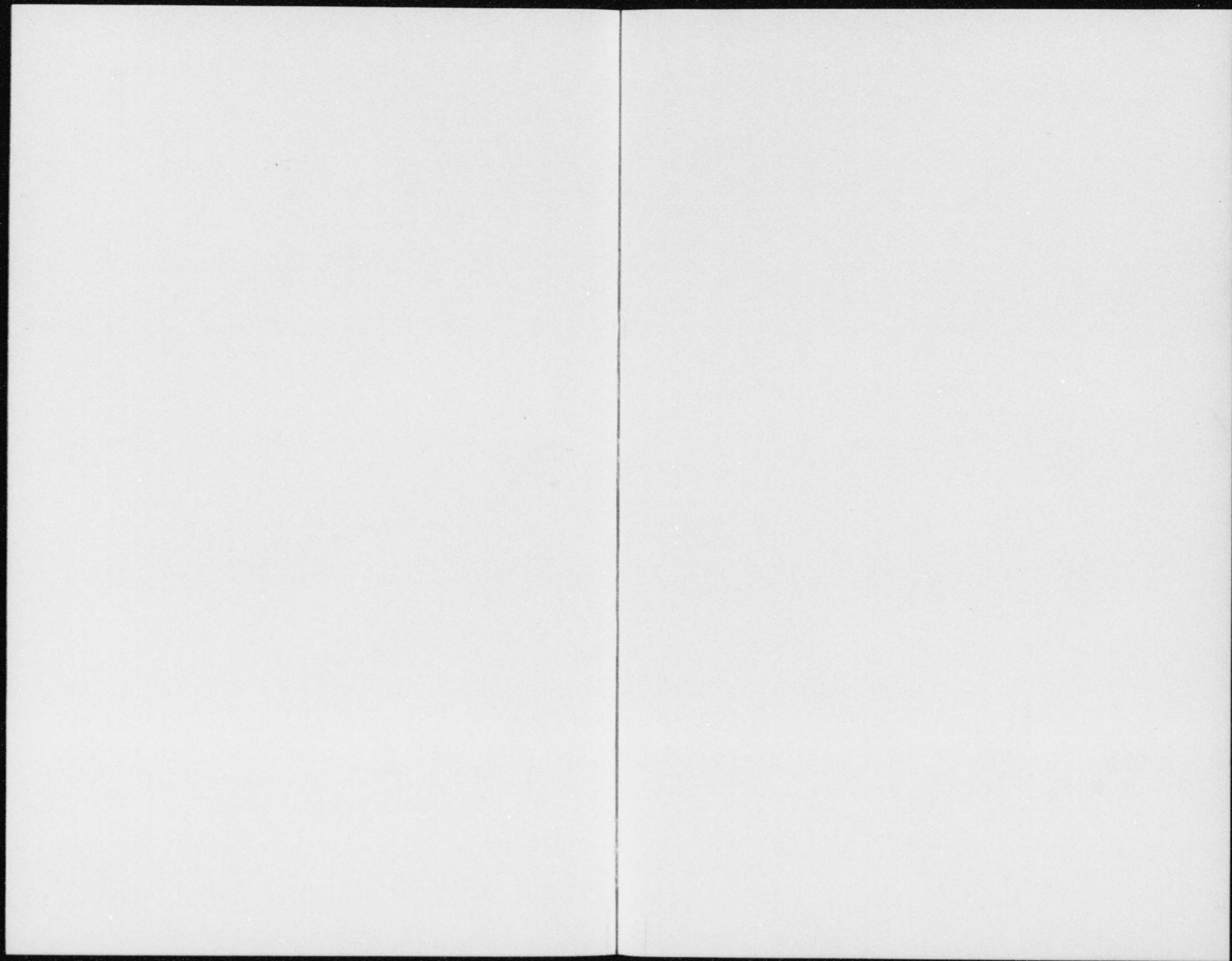
昭和9

AID











547

上 28 30

靜岡縣  
傳說昔話集

靜岡縣女子師範學校郷土研究會編



靜岡縣  
傳説昔話集

靜岡縣女子師範學校郷土研究會編



靜岡縣女子師範學校郷土研究會編



靜岡縣傳說昔話集



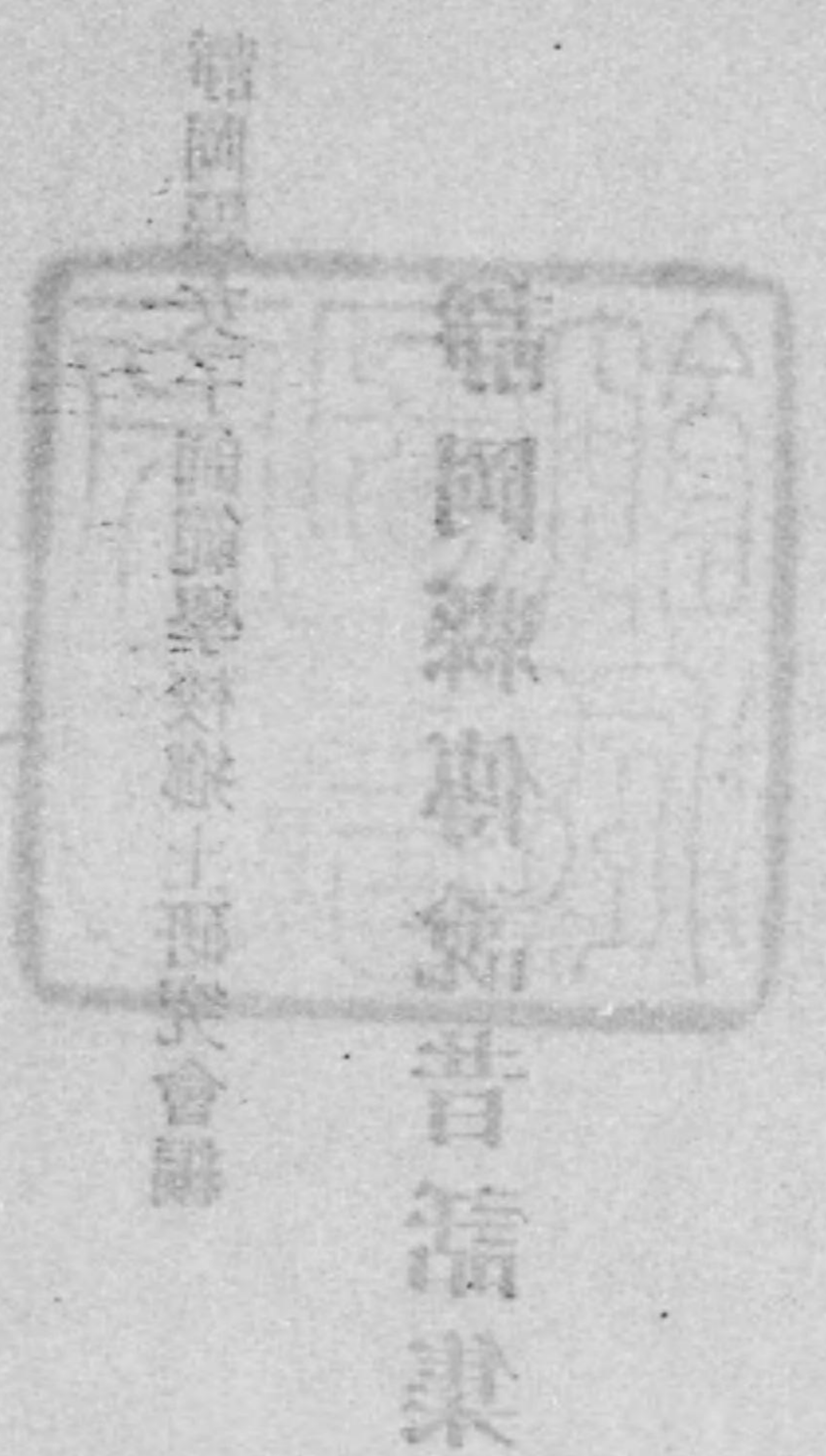


656-161

## 序

輓近、郷土研究の趨勢日に月に隆盛となり、之が諸科學の力によりて深究せらるゝことは教育の實際方面に良好なる影響を及ぼし、ひいて郷土教育の著しき勃興を呈するは、教育界の慶事と言ふべきなり。

本校は斯の思潮に棹さして静岡縣を對象となす郷土調査研究を進めつゝありし時、幸にも文部省より研究費として多額の補助金を交附せられてより尙一層其の調査研究に向ひて体系を立て、計畫的に精進するに至れり。茲に於て郷土研究會を組織し、職員生徒は各教科に立脚して分業的に調査研究を分擔し協力一致の活動によりて、資料の蒐集と整理研究とに勉めつゝあり。





本會に於ては、郷土研究に關する蒐集せる資料と、其の調査研究との成果を適宜に講演記要其他の形によりて發表し以て郷土教育の目的を達成せんとす。今回、國語科分擔事業の一なる郷土の昔話調査にありては、其の部員の不斷の努力により蒐集せるの資料多數に達せるを、例言の趣旨に基き公刊し得たるは、本會の目的を實現進展せるものにて亦郷土愛の精神を振興するものとして、悦びに堪へざるなり。

昭和九年三月十七日

静岡縣女子師範學校郷土研究會長

山東善之進

### 例言

- 一 本編は別に系統立てられた研究物ではなく、唯素材を版に附して散佚を防いだに過ぎない。
- 一 本編に收めたる説話は全部、昭和七年中の休暇歸省を利用して、本校生徒に蒐集せしめたものである。
- 一 採録の方針は次の如くである。
  - 1 生徒自身の聴取記録によるもの。
  - 2 出来るだけ従來の出版物等に掲載せられ居らざるもの。
  - 3 従來の出版物に掲載せられたるも、それと多少形を異にしたるもの
- 一 従來の出版物に収録せられをるものは、その書名を附加する豫定であつたが、頁數等の關係上、その煩を避けた。



一 傳説といひ昔話といふも、必ずしも截然たる分け方ではない。又その中に於ける小分類も絶対的のものではない。説話によつては、二つ又は三つの類に屬するものもあらう。地名傳説の如きは殊に然りである。従つて各分類は大體のところまで止めておいた。

一 各説話の初にある地名は、その説話の蒐集地である。全部字名まで記したいと思つたが、爲に却つて融通性を缺くこともあらんかと考へ、主として村名までに止めた。説話末尾の人名は蒐集者名である。

一 本編は後日の整理擴充を豫定するものである。種々の點より大方の御批正を請ふと同時に資料御分與を願つてやまない次第である。

一 本編末尾には静岡縣地圖を添附する豫定であつたが、時日の都合上果し得ざりしを遺憾に思ふ。

### 目次

#### 傳説之部

一 山男、山婆、巨人、天狗の話……………一

  1 山男……………一

  2 山婆……………二

  3 巨人……………二

  4 天狗……………一四

二 池、淵、泉等の話……………二七

  1 池……………二七

  2 淵……………三三

  2 泉と井戸など……………四三

三 社、祠、寺の話、その他……………五四

  1 社と祠……………五四



181

183  
185

四	2 寺、堂、その他……………	七
	1 塚と墓……………	八
	2 墓……………	九
五	崇と怨靈妖性……………	十
	1 崇……………	
	2 病田……………	
	3 怨靈、妖怪……………	
六	石の話……………	
七	地藏、道祖神の話……………	
	1 地藏……………	
	2 道祖神……………	
八	屋敷の話……………	
九	地名の由来……………	
十	海に関する話……………	

十一	植物の話……………	二〇八
十二	動物の話……………	二一六

1	蛇……………	二一六
2	河童……………	二一八
3	狐……………	二二四
4	狸、貉……………	二二五
5	狼、山犬……………	二〇三
6	猫……………	二二五
7	猪、熊、その他……………	二四三

昔話之部

一	虫に関する話……………	二五三
	○ 蛇と蚯蚓……………	二五三
	○ 百足……………	二五四
	○ 蟋蟀……………	二五五
	○ ヤモメ……………	二五五



二 鳥に関する話

- でんでんむし……………三六五
- まむし……………三六六
- 杜鵑……………三六六
- 頬白の鳴聲……………三六三
- 鶺鴒……………三六七
- 百舌……………三七〇
- 梟……………三七三
- 鶺鴒……………三七五
- 啄木鳥……………三七六
- 鳶……………三七七
- 雀と燕……………三七八
- 雲雀……………三八二
- 烏……………三八三
- 鶺鴒……………三八五

- 木兎……………三八六
- 四十雀……………三八六
- 櫻鳥……………三八七
- 水乞鳥……………三八七
- うまおひ鳥……………三八九
- ビイドロ鳥……………三八九
- 三 繼母と繼子の話……………三九〇
- 四 蛇との婚姻話……………四一八
- 五 其の他……………四二五







一 山男、山婆、巨人、天狗の話



(富士郡芝富村)

桶金にある瀬戸之澤家では、十代位前に酒造りをしてゐた。家の後に瀬戸之澤山其の他の山を控へてゐる。そのどの山からか知らないが山男が時々出て来て、酒を買つては姿をくらしめてゐた。面白い事に山男の來てゐる間は非常に上等な酒が出來て附近の評判であつたと云ふ。

(佐野あき)

(周智郡城西村野田)

水窪の奥、西浦の氏神様になつてゐる観音様のお祭りに、祭に倦きた男が一人で夜晩く歸りかけた。瀬戸の澤と云ふ所まで來ると向ふから誰か「田樂チヤーチ〜〜」と云つて観音様



の舞を舞ひながらやつて来る。闇をすかして見るとそれは雲つくばかりの大男であつた。その男はびつくりしてぶる／＼震出したけれ共どうする事も出来なかつた。すると、どこからともなく山犬が現はれてその人におほひかぶさり、すつかり見えなくしてしまつた。山男は「人臭いと思つたら犬だつけ」と云つて、又同じ舞を舞ひながら何處へともなく行つて了つた。その男は山犬の爲にやうやく一命を拾つた。(伊藤こと)

## 2 山

## 婆

(周智郡城西村野田)

西浦のシナゴと云ふ家にまだ年若い娘があた。そしてその娘は毎晩の様に藤をうんで(さいて)は糸にした。すると毎晩の様に何處からともなく山婆がやつて来て「わたしも手傳はず」と言つては藤をさいて手に巻き、一杯になるとはづしてそのはじを火に焼き灰を手のひらへ落しては、それをガクツと一のみにし吐き出すと、もう美しい藤の糸が出来て居た。山婆はそれを束にして「今夜も一つチャンコロリン」と云つては二階にはふり上げた。そして娘とすつかり仲良しになつて、毎晩来ては藤をうんだ。然し後で見ると、二階には糸も何もなかつた。家の

人達は、これはきつと山婆が娘を何處かへ連れて行つて食べるに違ひない、さうならない前に山婆を殺さなければ、と思つて色々考へたあげく、毎晩仕事の済んだ時出す茶玉(だんご)に茶の粉をふりかけたもの(の)の代りに、それに色も形もよく似た川石を拾つて来て、それを焼いて之を食べさせる事にきまつた。その晩も相變らず山婆はやつて来て同じ様に藤をうんだ。家の人はその間一生懸命石を焼き、さていよいよ歸ると云ふ時になつて、何時もの茶玉の様にその石を山婆の手にのせてやつた。そして、あつくはないかと聞くと、一寸もあつくはない、と云つてそれを一飲みにして仕舞つた、ところが、そんなあついてもがお腹の中へ入つていつたかたまたまらない。山婆はあつ／＼と云つて狂ひまはり何か冷たいものをくれと云つた。そこで家の人達は、大急ぎで油を飲ませたから尙更山婆は狂ひまはり、遂にお腹が大きな音を立て、破裂して死んで仕舞つた。その家は今も残り、而もその罰で働いても／＼貧乏を續けて居ると云ふ。(伊藤こと)

(磐田郡山香村)

昔和泉の倉木山に山婆が住んで居た。藤の皮で布を織る事が上手で、福澤や和泉や落井に出て来て機を借りて布を織つたと云ふ。今、落井に借宿と云ふ屋敷があるが、その家へはよく出



来て機を織つたそうだ。山婆は記念の爲に、その家へ一本の藤の木を植ゑた。それが大變大きくなつて、可成以前まではあつたと云ふが、枯れてしまつて、今のはその跡へ植ゑた二代目の藤だといふ。その宿の近くに産婆様といふ小さな祠がある。山婆はお産をさせる事が上手であつたので、後の人がお祀りしたのだといふ。

福澤には日向といふ家がある。山婆はよくその家へ行つては子守をしたり、留守居をしたりしてゐたが、或日その家の子供を守りして遂に食べてしまつた。其の家の人達はどうかして仇を討つてやらうと思つて、或日又山婆が來たので、丸い石をやいて團子と共に食はせた。腹が焼けて熱くて仕方がないので水をねだると、油を水だといつてくれたので、益々苦しくなつて遂に落井まで逃げて來て、釜川から天龍川に入つて死んでしまつた。

一説には、日向の子供を食つたので、村の人々が殺さうとすると、山婆は倉木山へ逃げた。人々が追つて行くと、不意に山が眞暗になつてしまつた。それから倉木山（暗き山）と云ふ様になつた。村人ではどうしても討取る事が出來ないので、信州の代官所へ願つて討取つて貰ふ様にした。代官所では、平賀中務といふ人と、矢部後藤左衛門といふ二人に命じて討取るやうにした。村人と力を合せて追つたので、山婆は遂に釜川から川に入つて秋葉山へ逃げて行つた。そして平賀、矢部の二人は、浦川村の川合に永住したと云ふ事である。

又一説には、山婆が時々、舟戸の某家へ行くので、其の家の主人が大變怖がつて、どうかして來ない様にしようと思ひ或日、蕎麥團子と一緒に丸い石を焼いて食はせた。山婆は腹の中が焼けて苦しがり、天龍川に入つて死んだ。山婆が崇つてはいけなさと淺間山へ小さな社を建てて産婆様といつて祀つてある。その外にも所々に産婆様といつて祀つてある。小學校の上の方に子生といふ所があるが、此處は山婆が子供を生んで育てた所ださうだ。

この山婆が機を借りに來たので借宿と云ふのだとも云ふが、又一説には源平の戦の時、負けた平氏方の武士が二三人逃げて來て泊つたので借宿といふのだとも云ふ。

山婆が富士山（龍頭山とも云ふ）を造る時、倉木山から土を運んで持つて行つた。もう一度土を運べば富士山の上が丸くなると云ふので夜中土を運んで行くと、戸口といふ所で臼を搗いでゐる家があつたので、これは夜が明けたのかと思つて土を其處に置いて倉木山に歸つてしまつた。その土が淺間山だと云ふ。又その土は休んだ時に置いたのだとも云ふ。

戸口からおいだいらといふ處へ猪が出て困つた時、山婆が來て山のでつぺんから大きな石を猪にくらはせた。この石を石佛と云つて今でもある。（本多みち）



○彌三郎婆さ

(濱名郡神久呂村神ヶ谷)

六

昔、彌三郎婆さと云つて實に物凄、婆さがあつた。額には幾條かの溝のやうな皺があり、顔は赤銅色をして口は耳の下まで裂けてゐて、銀髪は何時でも肩まで流れてゐた。そして前に垂れかゝつてゐる髪の毛の間から、鋭い目を光らして此方に向いて笑つてゐる有様は、恐ろしいといつてよいか氣味かわるいと云つてよいか、兎に角皆縮み上つたと云はれた。村に葬式があるといふ時には、墓地のある物影にかくれて人々の歸るのを待つてゐて、見送りの人々が歸り終るや實に物凄、い笑を浮べてあたりを見まはし、つかつかと新墓標に近づき、未だ線香の煙の立上つてゐる小高く積上げられた新墓を、無造作にかきのけて棺の蓋をほかし出し、中から死人をすく／＼と引き出して、手足をもぎり取り、次第に横食ひに貪り食ふ。そして血に染まつて眞赤になつた手や口のまはりを綺麗になめつくし、舌鼓をならして墓地の奥深く消えて行くさうである。又時には人家近くへ入りこんで来て、附近で遊んでゐる幼兒を墓地へ運び去つて食つたと云はれてゐる。村人は婆さの恐ろしい行爲に生きた心地もなく、互に警戒をして居つた。村としてもそのまま捨て置く事が出来ず、さうかと云つて彌三郎婆さを退治することは誰も氣味悪い事に思つてゐたので尙更出来ず、只此方で氣を付けねばならないといふ事になつて

「夕方は一切子供を外に出す事はならぬ」と云ふ布令を出した。これが出なくても互を氣付けてゐた事とて、夕日がまだ傾かない頃に、もう子供は申すに及ばず、虫の子一つ外で遊んでゐるものは無かつた。

かういふ譯で彼の婆さは近頃食に飢えて愈々當地では駄目だと悟り、場所替へをしようとして夕刻富塚村へ赴かうと丁度西來山まで行つた。神ヶ谷の某がその日用事のため濱松へ出て歸りかゝると、はからずも西來山で彼の婆さに行遇つた。某は大いに恐れ戦いて何でも此の婆さの御氣嫌を取らなければと思つて話しかけた。「お婆さ、何處へ行くでえ」「富塚まで用があつて」「こんな雨降りの晩にや止しやいいに。俺が負つて行つてやるで家へ歸りやいいぢやないか」婆さは暫く考へてゐたが餘り男が親切に云つてくれるので「それぢやなまじ家へかへらすか」さうして某はその恐ろしい婆さを背にして西來山から村の方へ向つた。婆さは男が親切にも負つて呉れたものだから嬉しくて堪らず色々話をしかけた。「お前にや嫁があるけ」「おれにや嫁なんかなくて」「それぢやわしが一つ良い嫁を世話してやらつか」男は恐ろしくなつてこんな婆さに世話せられてはどんな事になるか判らない。斷るに如かずと思つて「おら嫁なんか慥しかねいでいい」とすると婆さは「何故いやだ」と云ひながら長い爪をたて、背中でも頭でも手當り次第にかきむしるので某は益々震へ上がり逃げるに逃げられず、さうかといつて

七



其儘かうして居れば身体中傷だらけになる。進退此所に谷まつて先はどうなつても先づ急場の逃れ道とおもつて「それぢや一つ世話をしておくれ」といふと、婆さはそれを聞いて大變喜び「それぢや何日に嫁を連れて来るで待つておいで」某は愈々返事に困りどうする事も出来ず唯黙つてゐるより仕方がない。さうしてゐる中に二人は此坂にさしかかつた。(此坂は神ヶ谷のすぐ東にある坂)坂の中途に南に折れる道があつてそれは墓場に通する近道である。婆さは此所まで来ると「わしは此所で別れる方が近いで」と云つて某の背中から下りて「有難う、では何日には間違ひなく」と間道を墓場の方へ急いで行つた。某は婆さと別れてほつと肩荷が下りた氣はした。けれども何となく心配になつてならなかつた。「とんだ事になつてしまつた」とつぶやきながら大急ぎで家へ歸つて早速近所の人々に寄つてもらつて、鬼婆さとのいきさつを詳しく話して、何かそれを防ぐための名案を求めたが、仲々これといふ工夫も出なかつた。

さうかうしてゐる中にその日が来た。近所の人々は一同某の家に集つて、靈驗あらたかな心經や念佛を一心に唱へて、彌三郎婆さが不吉なものでも持つて来ない様に祈つて居た。夕刻になると、一天俄かに墨を流したやうにかき曇り、電光さへ白晝の如くひらめき渡り、雷は鳴り、うちあげるやうな大粒の雨が降る。實に物凄い空模様となつてきた。人々はどうなることかと生きた心地もなく、ひたすら百萬べんを唱へて事なかれと祈つて居つた。俄然電光と共に破れ

響音る様な大がして落雷した。一同ははつと思ふ瞬間に失心してしまつた。暫くして正氣にかへつてあたりを見ると、こは如何に、座敷の眞中には白木の棺がちゃんとおいてあるではないか。「大方あの婆さのする事はこんな事だらうと思つた」と一同は呆れ果て、棺を見守る許りであつた。それでもと思つた一人が、白木の蓋を取外して又もや驚いた。中には齡十七八の目も覺める様な、長者の姫君とも思はれる娘が、正装して、丁度眠つてでもゐる様に靜かに横はつて居た。人々は意外に、自分等の想像をすつかり裏切られた氣持にはなつたものゝ、初めて彌三郎婆さの心底がどこにあつたか、判る様になつた。すると突然今まで死んでゐるものとのみ思つてゐた娘が、ぱつちりと目を見開いて、夢から覺めた様に不思議さうにあたりを見まはした。人々は益々その奇異に驚きの目をみはり、娘の顔をうちながめた。娘は人々に向つて言つた。「此處は何所だか、又どなた様の御家だか私には一寸も見當が付きませんが、私は某地の某長者の娘でございます。昨日まで何とも無かつた此の身体が、夕方になると急に氣持悪くなつたと思ふと其儘眠つてしまひました。頓死したので御座います。そして今日の午後葬式まで濟んだ私が、只今二度生き返る事が出来ました。これも御當家があればこそ蘇生したので御座います。御當家様は私にとつては再生の恩人です。この御恩は決してお忘れ致しません。厚く御禮を申し上げます」と自分を生き返らしたのは當家の某なりと信じて深く感謝し心から



喜びに堪へない様であつた。そこで彌三郎婆さと當家の主人との話を大略話して聞かせた。その娘は始めてうなづき、「さやうでございますか。それで始めて私の頓死した理由が分りました。その彌三郎婆さと仰せられる方が私を頓死させたのでございませう。私には國元に兩親もございませう。この事を國元まで御知せ下されば誠に有難い事で御座いますか」と云ふので、人々もその眞偽を確める爲に、使をやつて、長者の家に急がせた。やがて使は歸つて来て、その通りである事を告げた。長者もその後から馳せつけた。「誠に吾が娘は昨日突然に頓死して本日葬式を済ませたのでした。それで、家内中皆泣き悲しみ、娘はこの世に無きものと諦めて居りました。今日の前に生き返つたのを見てこんな嬉しい事はありません。家内もこれがかうした顔を見ればどんなにか喜ぶ事で御座いませう。これも皆前の世で御當家と何か深い御縁でもあつたので御座いませう。私方ではこれは一旦死んだものと諦めてゐたし、又娘も無い命と思つて恩返しをしたいと云つて居りますから、若し貴方様に御氣があるならば娘を御上げしたいと思ひますが、家内とても何の異存もないと思ひます」かうして即座に話がまとまつた。そして某は長者より莫大な禮金を貰ひ受けたと云はれてゐる。世人に悪鬼の如く嫌はれ、恐れられてゐた彌三郎婆さもかうして恩に報いたのだ。今でも子供等が餘りひどい悪戯をしたり、甘へて泣いた時など「それ彌三郎婆さが来る」といふと直ぐおとなしくなると云ふ。(本多みち)

## 3 巨 人

○ (賀茂郡中川村南郷)

山城屋の老爺が夕方山から歸りに、出合と云ふ處で、自分より五六倍もある大人に遇ひ、はつとして立止つて見てゐたら、通り過ぎて消えてしまつた。現在この老爺は生在してゐる。

○ (土屋みどり)

○ (榛原郡上川根村)

千頭のある男、あまり喉がかわくので大井川の水を飲んだ。そして一里餘下の崎平まで行つた。そしたら小便がしたくなつたので、したらそれが肥料となつて、今でも崎平はいゝ牛蒡が出来る處として有名である。(和田正)

○ (榛原郡上川根村千頭)

昔、だいらぼつち(大多良坊)と云ふ非常に大きい人があつて、千頭附近に富士山の様に高い山をこしらへたいものと思ひ、もつこに小山位づゝ土をのせてかつぎ、千頭郷平<sup>ゴウゲイラ</sup>まで来ると、もう夜明けに近かつたと見え、或家の女の人が歌を歌ひながら仕事をはじめたので、だいらぼ



つち、はもう夜が明けたのかと大變に驚いて、土を戴せたもつこをそのまま投げ出して逃げて行つた。そのもつこの土と云ふのが郷平の村中に丘となつて二つ残つて居る。今ではその小山は大部分が茶園になつて居る。

このだいらぼつちが或時、大井川を一股ぎにして川の水を呑み干したといふことでその足跡が、大井川をさし挟む遠州の山と駿河の山の上とに残つて居るので、どちらも足窪と名付けられてゐる。(天尾富美子)

○ (濱名郡伊佐見村)

伊佐見村伊左地に、ぼつこ田、ぼつこ山といふ地名がある。昔、琵琶湖からぼつこ(もつこ)によつて土を運んで富士山を作つた時に、丁度伊左地の處でそのもつこから一塊の土がこぼれ落ちて出来たと云ふ。又引佐郡井伊谷村にもこれと似た傳説がある。この地に三合山といふ山がある。昔、ダイダラボツチといふ大層力のある人が富士山を作らうとして、琵琶湖の土をもつこに入れて行く途中もつこが揺れて土がこぼれ落ち、この山が出来たと云ふ。(本多みち)

○ (濱名郡神久呂村神ヶ谷)

昔、ダイダラボツチといふ大男が近江の土を大なる畚に入れて駿河まで運ぶ途中、引佐郡の伊目といふ處で肩替へをした。その時畚の揺れた拍子に畚の目から土がこぼれ落ちた。その土が根本山だといふ。神ヶ谷宇原山にその時大男が通つた足跡といふのがある。數年前まで凹所になつてゐて雨水が溜つてゐたが、今は開かれて桑畠となつてゐる。又そこから半道東の神にも足跡といふのがあつたといふ。又、濱名湖東岸の宇津山へ、腰をかけて辨當を食つた。其の時、中に小石があつたので、箸で湖中へ捨てたのが遂に島になつたと云ふ。(本多みち)

○ (引佐郡三ヶ日町)

昔だいら坊子と云ふ人があつて西方より東の方へ行く途中、濱名湖の西北海岸にてお辨當を使った。したら、米の中に石が混つて居たので、その石を投ると、忽ち濱名湖中にあるツブテ島になつたと云ふ。そしてその人は東方に下つたが、三ヶ日町只木の風越峠の麓とその横の峠のすぐ下に丁度足の形をした大變大きい池がある。それはこの人の足跡ださうである。

(山本ふみ)



VO

(賀茂郡下河津村)

昔、と言つてもつい先頃、明治末期の事、河津郷、濱と見高の連絡道路は片瀬山を越えて行かなければならぬ道だつた。

當時村長だつた鳥澤宇一氏は何時も夕方此の山を越えて家に歸るのが例であつた。或日の事役場の仕事で夜おそく此の山を何時もの様に越えた。峠に近い松の木所に來ると、ひよつこり天狗が出て來た。彼は度胸があつたので、何程の事やあらんと、どん／＼歩いて行つた。すると天狗は矢庭に宇一氏の後から抱きついたと思ふと、彼を傍の谷底深く投げてしまつた。彼は痛を負つた上に何方へ行けば家の方へ出られるやら解らず、其のまゝ一夜を明した。そして明朝畑に來る百姓共に見つけられて、やつと家に歸つたといふ。(村越ちか)

(田方郡中郷村)

村の或子供が急に見えなくなつたので、親は勿論、近所の人も騒ぎ、一所懸命探したが判ら

ない。親達は泣く泣くその靈を弔つた。四十九日に親戚一同が集つて、お婆さん達と念佛の供養をした。その時中でも非常に血縁の濃い者が、子供の小用をしてやる爲に田舎によく見る如くに、縁側で子供に小用を足さしてゐたのであつた。その時ふと裏山に目をやると、紛失した子供、が木の枝を飛歩いてゐる。それを見た親戚の者は喜びと言ふか、恐怖と言ふか、何しろあわて、座敷に居る者に直に知らせた。一同は直に例の縁側に出て來たが、不思議にも誰も再び彼の子供を見る事は出來なかつた。一同は前の人が見たのは幻であると言つて取合はなくなつて終つた。するとそれから幾日かの後に今度は家の者が見たのである。木の枝を軽々と飛歩いてゐる姿を。これが村中にはツと擴がつて了つた。皆はきつと天狗の業であると評判した。そこで毎日々々裏山へ子供を探しに村の人も加はつて出掛けたのである。が何故かどうしても見當らない。で村の人は匙を投げて終ひ、後に残るのは勞力の報られなかつた事に對する憤慨で、非難の聲が高まつて行つた。が親は決して子供を探す事を止めずに根氣よく探した。その心に天狗も心をほだされたのか、或日のこと、朝目をさますと其所に開けても暮れても探してゐた我が子が居るではないか。親の喜び方と云つたらとても大したものだつた。然し當の子供は昏々と眠り續けて居る。約三日程経て子供が眼を開くと、母親の顔の枕元にあるのを見てお母さんと許り抱きつき、母親はその子を強く抱しめて長い間二人で泣いた。



後で子供も泣き止んで語るのによると、毎日馬糞をお慢頭だと言つて食べさせられて居り、木の枝を飛び歩く術も教へて貰つた、と言つたので、まあ馬糞を食べさせたりしてと親の子に對する愛情で、母親は又泣いてしまつた。でもまあ子供が見つかつたのでと、何もかも忘れてお祝をしたといふ。これは實際にあつた、といつて聞かされた話である。天狗にさらはれると言ふ事は決して嘘ではない様だ。(多呂南海子)

○ (田方郡葦山村)

葦山村奈古谷の國清寺の住持は大變頭のい、坊さんだつた。昔、その頃は天狗がゐたそうだが、或時、一夜、鎌倉の本山が火事になつた。坊さんは、

「鎌倉の本山が火事だ、小僧はやく水をかけろ」と言ふと小僧は大庭へ水をかけた。すると鎌倉の本山の火事は消えたそうだ。

小僧とは天狗の事だつて……。

又或時住持が言つた。

「明日は茅葺きをするだから朝までに茅を運べ」と。朝起きて見ると茅がたくさん運んであつたと。天狗がたくさん茅を持つて来て寺に置いたのだ。けれど、村の誰一人も、茅がなくな

つたと言ふ者がなかつたと言ふ。

今一つ、前とは反對に、茅葺きがすんだので古い茅を全部天狗に運ばせたと言ふ話もある。

又或時、茅ぶきをして居ると、外の庭は何もゆれないのに、國清寺は大變ゆれたさうだ。而も茅ぶきをして居る家だけ。茅をふいてゐる人達は、「これは何か神様の知らせたがら今日はこれですまはう」と言つてすぐに其の日は仕事を終つたさうです。

かうした天狗の話がある。私達が二三人手をつないでやつと廻る様な松の、上の方の太い枝が何木となく折れてゐる。どうしてあんなに太いのが折れたかと思はれる位だ。その幹の折れる時の大きな音が毎晩の様に聞えたさうだ。(木内たき)

○ 天狗の米搗

(駿東郡清水村)

清水村湯川から下徳倉に行く途中、右手に聳える本城山の中腹には、天狗岩と云ふ大巖石がある。昔こゝに天狗が住み、月明の夜などにはこの岩の上に集つて米搗きをし、相互に打つ杵の音が聞えたと言ふ。(山本よしゑ)



(沼津市上香貫)

これは上香貫市場で起つたことである。市場と云へば、今は相當な町であるが、其頃は一面の廣い田圃で、暗くなつては一人で歩けない程であつたさうである。

市場に住んで居た正直なおぢいさんが、名主の使ひでこの田圃を夜通ると、天狗が出て来てしきりに相撲を取らうと云ふ。お爺さんは、名主さんの使ひで急いでゐるのだからと避けたがどうしてもきかないので、面倒だと思ひ切つて、引擔いで投げつけた。少し日が経つて、又このお爺さんが通りがゝると、又天狗が出てきて、「この間のやり返しをしようぢやないか」と言ふ。お爺さんは、今度はどんな仕返しをされるかも知れないので、再三ことはつたがきかないので、ついにことはりきれず、困却してしまつた。この時白馬に乗つた市場八幡神社の神様がとんできて「おれの氏子を何故いぢめるのだ。」と云つて、天狗を取りおさへた。これで八幡は有難い神様だとされてゐる。(野田美津江)

○ 八つ目がねの天狗

(富士郡田子浦村)

富士郡元吉原村鈴川と、田子浦村前田との境で潤川が海に流れ入らうとする處に橋がある。八つ目鏡の橋といふ。その橋の下の方が八つの目鏡の様だから、此の名稱が出たといふ。今から三四代も前のこと、その邊に、貧乏ではあつたが、大變正直な人が住んで居た。その人は貧乏なので、夜も八つ目鏡の橋の處へ來ては、蟹を釣つてゐた。其處には蟹が澤山居るのだつた。或晩矢張り釣つてゐると、松の枝をポキリ／＼と折つては、下へ投げてよこすものがある。その人は、「これは天狗さんのいたづらに違ひない。」と思ひ「私は家が貧しいので蟹を釣つて暮しを立てるのですから、願ひですからどうかそのいたづらをやめて下さい」と言ふと、不思議にもそれから決して松の枝をくぢかない様になつたと云ふ。(杉山ふで)

○ 龍願淵の天狗

(富士郡鷹岡村)

今から三代許り前の人の話。宗助さんと云ふ人があつて、或夜、龍願淵へ釣りに出掛けた。間もなく大變に太い未だ一度も見つた事もない様な大鰻が釣れた。喜んでそれを用意の器物に入



れようとする、何時の間にか鰻の姿が無くなつてゐる。おや、と思つたとたん、鼻の高い人が大きい手で、今自分の捕つた鰻をわしづかみにしながら、「今とつた鰻は此處にあるぞ」と云つた。宗助さんは恐ろしくて、やつとこのことで、家まで飛び歸つたが、四、五日の間は悪氣病みで寝込んでしまつた。(佐野なみ子)

○ 洞慶院の天狗

(安倍郡期織村羽鳥)

洞慶院は靈場であるから、昔から天狗が住むと云はれてゐる。或方丈の一間には今尙天狗が來てゐると云つて、其の居間には誰も寝るものなく、翌朝になつて其の部屋を調べると、何者か泊つた跡があると云ふ話だ。又、門前に松の太木があつて、村の人は、これを天狗松と云ひ、毎夜その頂上に火の様なものが見えたが、それは天狗の仕業であると云つて居た。しかしその松は枯れたので切つてしまつて、今はない。今一つ天狗の仕業として、風のないのに常夜燈が舞ひ上り、十餘間も離れた所に落ちる等の事もある。これは常夜燈のよこれた爲めであらうとて今は新設した。(石上美代子)

○ 八の目

(石上美代子)

○

(安倍郡長田村)

今から六十三年前の事である。それは例のお下りサガのした當時で、世は渦巻の如く、人々の心は亂れて居た。そして所々にお下りがあつた。

長田村丸子細工所に池田屋といふ酒屋があつた。その家にもお下りがしたが、その親父はふだんから愁の深い人で、一例を挙げれば、魚屋が來ればまからないと云ふのをどうでもまげよと云つて自分の言ひ價で魚を取り、後でお金をいゝ加減にやると云ふ様な、人泣かせをする人だつたと云ふ。その位であるので、魚屋等は隠れて通つた。そしてお下りがして何所の家でもお祝ひをするのだが、其家では、こんなものが下りても、なに祝ふものかと云つて居た。と或る夕方、その家から二軒目の茅屋根に「火がめら／＼してゐる」と云つてその親爺は驚き騒いで家を飛出した。勿論、それは他の人には見えない火であつた。

だが、それから親爺は見えなくなつてしまつた。村の人々は七日間程尋ねたが、遂々見つからなかつた。

ところで、或日、宗小路の小僧が酒を買ひに其家に来た。其の家の人は、この小僧が家の親爺の帯と同じ帯をしめてゐるので、不思議に思つて聞いてみると、母ハハが山から拾つて來たと



答へた。さあそれから、では山に居るのだといふので、皆で尋ねると、居た。居た。而も、宗小路山の頂上の大きな松の木に、直径一寸位の藤蔓で人間作では出来ない様に縛つてあり、又齒も一本一本抜いてあり、髪の毛も全部抜き、舌も横の方へ抜き取つてあつたさうだ。それを天狗さんの業だとして家の祖母等は信じて居る。(鶯集くり)

(榛原郡上川根村千頭)

高千山と云ふ山に、およし婆さんといふ人が住んでゐた。

或夜のこと、たつた一人で寝てゐると、布圍の上へ恐ろしく重いものが乗つてとても苦しくてたまらない。

こんびらさんを拜んだりして、やうやく軽くなつた。朝起きてみると、ゆるい(圍爐裡)の中に大きい足跡がついてゐた。それは天狗の足跡だつたと云ふことである。(天尾富美子)

(榛原郡上川根村千頭)

柳瀬の爺さんが子供の時分、家に泊つた行者を送つて行けと云はれて、裏山を越して次の山へ行くのを途中まで送つて一人で歸つて來ると、頭の上に覆ひかぶさつた檜の枝が、風もない

のにザーと音がしたので、一目散に逃げかへつた。これも天狗だつたと云ふ。(天尾富美子)

(榛原郡上川根村千頭)

高山から荷を背負つて下りて來た人が、途中で、にんぼう、(荷物につっかい棒して休むこと)して休んでゐたが、見るともなく目の前の大木を見上げると、葉の落ちた大木の高い所に、えたいの知れないものが腰かけてゐる。

何だかわからんもんだと思つて、みつめてゐると、その變なもの、頭の眞白い毛がサラサラと延びて地までとゞく程になつたので、びつくりして夢中で坂をとび下りた。

さうすると下から白い着物を着た六部のやうな人が上つて來たのでまづ安心と思つて近づいた。六部は顔を見ながら、「大へんあはてたやうだが、何かあつたかい。」ときくのでわけを話すと、六部は手を鼻の頭へあて、「それはこれが、あのもの(こう云ふもの)だ。」と云つて、鼻をながく引き伸して、忽ち天狗になつたので、男は二度びつくり、一生懸命逃げて來たつてさ。(天尾富美子)



(小笠郡三濱村)

淺羽の芝と云ふ所に二人の兄弟があつた。むつまじく遊んでゐたが弟の方が急に、「俺は舞へる」と言つて舞つて見せた。そして、やがてそのまゝどこかへ行つてしまつた。母親が大變心配してゐると、或夜その子が夢まぐらに立つた。それは、いつ／＼の日に行くから、居間を一つ、鹽の花を打つて、美しくして置け、と云ふのだつた。そこで、言はれた通にして置くと言の如く其の日に來た。そしてまづ、八疊の間一ばいに羽をひろげて見せ、それから言ふのに「わしも此のやうな姿になつたから決して會ひたいと言ふな。」と、そして歸つて行つた。それが今では小笠郡に多前様と言つて堂に祠つてある。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

淺羽の人が秋葉様の奥院に月參りをしてゐた。その人は行く度に奥院に泊る。或時のこと堂守が、今夜は客が内にあるから歸つてくれと言つた。所が日が暮れたので、どんな所でも良いから泊めてくれと頼んだ。それなら庭の見えない所に泊めてやると言つて圍ひをしてそこに泊めた。其のうちに赤や青の衣を着たお坊様がやつて來た。そして、「今夜はこちらに外の客が

あるな」と言ふ。堂守も仕方なくわけを話すと、坊様達は「その者は心掛が良いから許すによつてこゝに出せ」と言つた。で此の人が怖々出てくると、里へ出て酒を買つて來るやうに言付けられた。其の人が自分には出來ないと言ふと、坊さんは一人つけてやるから徳利を持つて外に立つて居れと言つた。命ぜられた通りにしてゐると、天狗様が來て、其の人をつれて、忽ちにふじみ屋と言ふ酒屋の前へ來た。そして酒をくれと起した所が、夜中ではあり邪魔なので酒はないと言つて賣らなかつた。すると天狗様は、此の家は焼き拂ふぞ、と言つて、それから他の家に行つて買つた。

「此の夜も過ぎて朝、此の人は家に歸つたが、途中ふじみ屋の前を通ると、すでに焼けて燃え残りがくすぶつてゐたといふ。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

夜道を怖がる職人があつた。その人が仕事に行つて、歸りがおそいので妻が炬火をともし迎へに行つた。すると、職人は、それを天狗様と見違へて、はき物を抜いで頭にかぶり「虫けら同様の者でござんすから、どうか、かにんしておくれなさい。」と盛んにあやまつた。妻は「わしだものえれ」と言つたが、職人は矢張り天狗様だと思ひ込んで、「どうか許しておくれ



なさい」と言つて謝つてゐたさうである。(松下きん)

○ (周智郡三倉村)

昔十一月十六日の祭の日には、秋葉山の法印<sup>ホウエイ</sup>様が山の四方へ天狗様をお迎ひに行く。そしてお目にかゝつた處で松明をすて、御山へ歸つてくる。ところでお迎へに行つてお自にかゝつた處は、或人はお山から一町、或人は一里、又或人は五町、といふ様に各ちがふが、それが山へ歸りつく時は同時に入る。それが不思議がられて居た。(鈴木さし)

池、淵、泉等の話

1 池

(田方郡戸田村)

○ (新聞澄枝)

今のさなぎ山の池の平と言ふ所に、大きな、形だけで水のない池がある。然し昔は満々と水をたへ底知れぬ恐ろしさであつたと言ふ。

昔、或る日デシ<sup>デシ</sup>どんと言ふ人が其處を通つたら池の側に赤い牛がねてゐた。デシどんは「はて不思議だこんな牛がゐるとは？これはきつとたゞ事ではない、後のたゞりはおそろしいけれど殺してしまふに限る」と考へ其の牛を殺した。するとその牛は大蛇の化けたのであつた。それから池の水が自然と干てしまつたといふ。(新聞澄枝)

○ 機池

(庵原郡松野村)

北松野臺山にある。昔此の附近の或家にて主人が嫁を大いに虐待して、或時大變長い機を短



時間の間に織り盡す様に言付けた。嫁はどうしても織り上げる事が出来なくて遂に機と共に此池に投身して死んでしまった。昔は、夜半に此池の附近を過ぎると、水中で織を織る音が聞えた云ふ。(稻葉りん)

## ○ 沼のだん

(安倍郡服織村)

昔、中蘆科村水見色と、服織村新聞と、美和村足久保との間の、山の高い處に、沼のだんといふ沼があつた。その沼には主が住んでゐた。ある大名が馬に乗つてその沼の所まで行くと、主が馬をとつてしまった。その大名は口惜しがつて、駿河から轡を買つて来てその沼の水を湯にしてしまった。沼の主は苦しみの余り、妙見さんの處の「下村の沼」に移つてしまった。それからこの沼の魚は目が片方細くなつたと云ふ。(増田きぬ江)

## ○ 乳母ヶ池

(静岡市)

今の追分にある。

昔、此の地に居た金谷長著の家の乳母が、子供をつれてこの池に遊びに来て居たが、あやまつて其の子を池の中へ落してしまつた。

乳母は申分けなく思ひ、書遣きをし、自分も池に投じてあへなくなつてしまつた。徳川時代の武士等が、祭の八月比所を通りがけに「ウバヨ〜」と言つて賽錢をまくとブク〜と泡が出た。今は池も小くなつた。

其の池の水は咳によいとこの事にくみくる人が多い。昔はよごれてゐたが今は少しはきれいださうな。そばのお堂に乳母が琴を弾いてゐる木像がある。(前島かれ)

## ○ 鏡池

(志太郡青島町)

志太郡青島町大字瀬戸新屋坂下に鏡ヶ池といつて水神社と東海道との間にはさまれた小池がある。周廻いくらといふ程の池ではなく、其の形は鏡に似てゐるといふ事でこの名も當然これによつて生れたのであらう。其の周圍がだん〜と田になつてしまつた、が、昔は二町歩余もあつたといふ。現在僅かに其の池の形をとめてゐる所は昔の池の中央であるといふ事である。池の中には葦の根が張り中央に一本の小松が立つてゐて土地の人は「鏡ヶ池の浮蓋」といつてゐるさうである。

北にはこんもりとした晝なほ暗き水神社の社、南には東海道の國道の松並木亭々として聳へ、遙か東方には富士の秀峰を望み得る眺望の良い所である。



昔この池の畔りに老夫婦が住んでゐた。年とつて二人の間には子供がなく、其の上財産とてもなかつたのであるが、睦しく其の日其の日は平和のうちにあけ、そして又暮れて行つたのである。

二人の談話は年寄らしい而も長閑だつたのである。いつもままつて「おぢいさんやわしが死んだら地獄か天國かわからないが大方悪い事もしてないわしらの事だから天國とやらで待つてゐるにのう、もしお前が先にいくやうな事ならわしを待つて、おくれよ」これがおばあさんの言葉であつた。これにあはせておぢいさんも同じやうな言葉で答へるのであつた。「待つてゐるとも、お前もわしを待つておいでよ」二人は子供の無い事も又年とつてゐる事も別に氣にかけてゐるやうな様子もなくすごしてゐたのである。

ところが、おぢいさんはふとした病がもとでとう／＼先に行かねばならなかつた。おばあさんの悲しみは勿論であつたが、然しいつまでも其のまゝにしておく事も出来ず野邊の送りも村人の情ですましたのであつた。

淋しい日をすごしてゐたおばあさんたつた一人の所へ、ある夜鏡とぎが行き暮れて宿を頼んだ。おばあさんは始のうちはあまり好まなかつたのであるが、旅の人しかも事情を聞けば行き暮れて困つてゐるとの事、其の上自分の淋しさをいくらかでもまぎらはすことが出来ようかと

も思ひ宿を貸すことにした。其の夜おばあさんは客のもてなしの爲にどうしても外へ出なければならぬのであつたがしかしそのまゝ出る事が出来ない事情があつた。その爲に自分の留守中の事を鏡磨きによく云ひ含めて出て行つたのである。

それはかうである。もし自分の留守中に奥の戸の方で聲がするかもしれないが「バーバーキイサイヨ」といふ聲だつたら「アイアイ」と答へて置くやうに、けれども必ず奥の戸はどんな事があつても開けないやうにと、くどく頼んでおばあさんは外へ出て行つたのである。

うす氣味悪く思つたが鏡とぎは今更どうする事も出来なくて、おばあさんの歸りまで何事もなかれかしと心の中で念じつゝ待つことになつた。

心の中は不安でならなかつたので風の雨戸をたゞく音にもブル／＼震へて固くなつてゐた鏡磨きの耳に、かすかに物音がきこえた。田の中の一軒屋、別に訪ふ人もないのにもしかしておばあさんの歸りかと内心喜んでゐた彼であつたが、しかし物音はだん／＼人聲になつてくる。恐れ乍らも耳をすまして聞いてゐたがそれは確におばあさんの云つた通り「バーバーキイサイヨ」の聲であつた。これに對して彼はおばあさんの云つたり通「アイアイ」と返事はしたつもりだが、あまりのおそろしさに心の中だけの返事であつたらしく家の奥の方からはまた「バーバーキイサイヨ」と聲が高くなつてきたのである。恐しい、しかし不思議に思つてゐた彼は固



くおばあさんに禁じられてあつた事はつひに忘れて、奥の聲のする方へおそる／＼歩みよりながら様子を伺ひ、とう／＼戸に手をかけて開けてしまつたのだつた。すると、……中の眞暗な所には、年寄の死体が棺桶から抜け出してゐた。勿論鏡とぎは恐怖の餘り、何物をも覺えず家の外へととび出してしまつた。その時まで肌身離さず所持してゐた、大切な鏡さへもはふり出して。その時放り出された鏡が今も池となつてその形を残してゐるのである。

(失名)

## ○ 御馬ヶ池

(濱名郡赤佐村)

徳川家康が武田勢に追ひつめられて次第に濱松へと退却をはじめた。そして濱名郡赤佐村まで退くと此處に大きな池がある。軍馬が疲れ汚れたのでこの池で馬を洗つた。それで御馬ヶ池と云ふ。(本多みち)

## ○ 鎌とぎ池。

(濱松市)

豊臣秀吉がまだ下僕として濱松在の松下嘉平次の家に居た頃、彼は毎日、草刈ばかりさせられた。余り毎日なので面白くないのにたへかねて、近所の草刈の子供を呼び集め、刈つた草を

出し合つて賭け、池の目高を松の葉でつゝいて、つけたものがそれを皆もらふ事にきめた。他の子供は容易にはつけなかつたが、日言丸だけはとてもよくつけて、いつも草をもらつて來たといふ事である。

彼は又、その池でいつも鎌を研いだそうだ。で今、村人は鎌とぎ池と呼んで居るといふ。村人の話によると、そこには片側だけに葉があつて他方にはない薄がある。それは日言丸が鎌をといで、そのために薄をスツとやつて見たので、片方の葉がみんなとれた薄ばかりになり後の世にもそんな薄ばかり生へるのだと教へてくれた。が行つて見ると、そんなものは一本もなかつた。なんとかいふ小さいお宮の西側に、今にも埋れてなくなりそうな池がそうだといふが、水は緑色によどんでいかにも物淋しそうであつた。

松下嘉平次といふ人の屋も、今は田となつて面影を残して居ない。濱名那芳川村頭陀寺といふところにある。(金原せつ)

## ○ うばヶ池

(濱松市)

濱松市板屋町の停車場のある近所に、昔、大名が住んでゐて、其處には大きな池があつた。そして其大名の家には一人娘があつて、乳母がついて居つた。或時、ふとしたことでその娘が



病氣になつて亡くなつてしまつた。すると大名は乳母が悪いから娘が亡くなつたんだと、乳母を大變に責めた。乳母は主人に申譯けがないと云つて、その池に身を投じて死んでしまつた。すると娘は生きかへつて來た。そして乳母が自分の爲めに亡くなつた事を聞くと非常に氣の毒に思つて、其池に行つて「乳母や、私はもう生きてゐるから出て來ておくれ」と云つたら、乳母は「はい」と云つて出て來た、といふことである。現今はその池は残つてゐない。

(金原せつ)

○ 三ヶ日池

(引佐郡三ヶ日町)

中の郷(三ヶ日の古名)の長者は非常に漁る業を好み、池と云ふ池は全部漁りつくし、川崎(郷社神明宮)のお手洗池までもかへると云ふ位であつた。今度は川崎の西の大池をかへようといふので人夫數多を雇つて三日三夜かへた。けれども池の水は少しも減らず、却つて反對にいよゝ／＼澄み渡るので、流石の長者も倦みはて、遂に思ひ止つた。それ以後人々はその長者に仇名して、中の郷の三日池の長者と云ひ、近郷の者までが、三日の長者といふに至つた。そして次第に地名を三ヶ日と云ふに至つたといふ。(山本ふみ)

○ 念佛池

(引佐郡三ヶ日町只木)

只木の山の麓に小さな池がある。土地の人はこれを念佛池といつて、誰も知らぬ人が無い程の有名な池である。

昔此の裏山に効顯の高い仙人が住んで居られたさうである。此の行者がいつも使用して居たのが此の池である。その爲この池を土地の人は神の住む池と云ふやうになつた。其後行者は何處かへ姿をかくしてしまつたが、此池の不思議は今でも噂となつてゐる。何人でも池の邊に立つて、南無阿彌陀佛の六字の妙號を唱へると池の下から不思議にも澤山の泡が吹出して來る。

(山本ふみ)

2 淵

○ 牛ヶ淵

(駿東郡長泉村黄瀬川)

昔、牛が茅を一ぱいつんだまゝ落ちて、そのまゝ沈んで後跡もなく見えなくなつたと言ふ。

(加藤わい子)



○ 鎧ヶ淵

(駿東郡長泉村瀬川)

昔、このあたりに戦のあつたとき、一人の武者がにげて来てこのふちのあたりに休んだ。間もなく敵が追つてくるのに気がついた。が氣轉を利して、自分の鎧や小刀や著てゐるもの一切をぬいで淵になげ入れた。そしてすばやく林の蔭をつたつて逃げた。

敵の追手は彼が身をなげたと早合點して、その武者はたすかつたと言ふ。(加藤わい子)

○

(榛原郡上川根村千頭)

山澤又は川の淵には、淵の主と云ふものが居ると傳へられて居る。その主は多くは魚の年をとつたものを云ふ様で、時には正体の知れない怪物をさして云ふこともある。

○

(榛原郡上川根村千頭)

或人が谷合ひの草木の生ひ茂つた薄暗い淵で、縁に腰を下して糸を垂れて居ると、向ふの岸から一匹の小さい蜘蛛が糸を引張つて来て、釣をして居る人の足の親指に引つけて、又向ふ側へと糸を引いて行つてしまつた。その人は「こんな所に糸をかけなくてもよささうなもん

だ」と云ひながら指にかゝつてゐる糸を切つて、側の木の切株へかけて置いた。するとその木はめり／＼と音をたて、淵の方へたほれて行つたと云ふ。もしもその人が指にかけてそのまま置いたら淵の中へ引きづり込まれる所であつたとのことである。

○

(榛原郡上川根村千頭)

或人がやまめを釣りに山奥の澤へ入つて行くと、途中で一人子供に出會つた。そしてその子供は「この奥の淵には主が居るから釣に行くのはおよしなさい」としきりに止めるのであつた。そこで暫くそこに休んで、その子供と話などし、持つてゐた辨當をやつたりなどしたが、今更歸る氣にもなれず、その子と別れて奥深く進んでその淵に釣糸を垂れると、まもなく大きなやまめが釣れたので、魚釣りの常として、直に腹を裂いて腸を出さうとすると、中から先程子供にやつた辨當が出て來たので非常に驚いて戦慄したと云ふ。その子供はこの淵の主であつたと云ふのである。

○ (榛原郡上川根村千頭)

或人が山奥の淵で、とても大きいやまめを釣つて、魚びくにも入らず、手にも下げられな



いので、着てゐた蓑を脱いでそれに包み背負つて歸ることにした。暫く來ると、後の方から、大きい聲で「おーいどこへ行く」と呼ぶものがある。不思議に思つて、ふり向くとたんに、背中の蓑の中で「千頭へ背中あぶり！」（背中をあぶりに行くと言ふ意）と答へたので、大いに驚いて、背中からその魚をふるひ落して、逃げて行つたと云ふ。

○  
（榛原郡上川根村千頭）

崎平の對岸、青部の上、大井川に、おけさ淵と云ふ淵がある。この主はおけさと云ふ女であつたのらしい。或時、度胸のよい一人の男がおけさ淵へ夜釣に行つたが、一匹も釣れない。よく見ると淵の中程の手に寄つた方に、腐つた大木のやうなものが、沈んだやうでもあり、又浮いてる様でもあつて何となく氣に掛るので、その男は山手へ廻つて、釣竿をもち直して竿の本の方でその變なものを突いた。すると俄かに水煙をあげて、その不思議なものが水上高く「ばしやん」とばかり立ち上つた。男は取るものもとりあへず、走り歸つたと云ふ。

○ 鰻 淵

○  
（小笠郡東山口村）

東山口村逆川流域にある。昔佐登姫と云ふ女が一人の老翁と此の地に住んでゐた。姫はこの

淵の鰻をとつては翁に供した。その味は大變よかつた。食膳に上すこと餘りにしばしばであつたので、殺生を忌む翁が和歌を詠んで之を諷戒した。すると姫は悔いて此の淵に身を投げて死んでしまつた。これから此の淵の鰻は皆口端に紅脂の色を帯びてゐるといふ事である。

○  
（萩原みな）

○  
（周智郡城西村）

明治三十二年頃、島中の長さといふ人が鮎つりに行つた。出崎といふ所に、かぶち（淵）があつてそこに大きな栗の木があつた。長さは夕立のためにその木の下に逃げ込んだ。するとその人の前に、七八歳位の子供が來てにこ／＼笑つて立つてゐる。その人がどこへ行くのかと聞くと、にはかにそばへ近付きその人の足にとつつきずると引張りはじめた。その子供は年に似合はず大力であつた。さてやらすよゝがなくて（仕様がなく）鮎の腹かき出刃で突かうとした所が、その子供はたちまち水の中に入り、それつきり、皆目わからなかつた。それでその人は鮎釣はせぬと神にちかつた。その長さは今なほ生きてゐる。（荒山つる）



○

四〇

(周智郡三倉村)

三倉村の、よく釣りに出る人が、大久保のトイ淵で天ノ魚を釣つてゐた。さうすると白い雲の断片が何處からともなく湧き出で、足の指の邊をぐるぐると巻いた。變に思つて見つめて居たが、しばらくすると消えてしまつた。すると池の中へ引込まれ相な氣がした。恐しくなつた彼は逃げようとしたが、先の指の所の引込む力は益々強く、段々引込まれさうになつた。そこで持つて居た双物で、さくつと切る様にしたら、もうそれでよかつたと云ふ。(鈴木とし)

○ 赤子淵

(周智郡城西村相月)

水窪川(切開の地)に赤子淵といふ淵がある。昔亂世の頃、一族皆滅された城主の奥方が、敵の手をのがれて、その淵の邊まで来た時、淵にさへぎられて渡れず遂に敵に捕はれた。が、その奥方は抱いてゐた子供だけでも敵手にわたすまいと、やにはにそれをその淵になげこみ、自分は遂に斬られたといふ。(荒山つる)

○ 瀬戸淵

(磐田郡上阿多古村)

上阿多古村字阿寺といふ所に、阿多古川の流れがよとんで一つの瀬戸淵といふ淵をなした所がある。今でも水が青黒くよとんで非常に氣味悪い處である。昔此所に大蛇が住んで居た。或時蛇取りが来てそれを取らうとしたが、それが黒い蛇であつたので取らずに歸つたと云ふ。それで今尚瀬戸淵には大蛇が居ると云ふ。

又この瀬戸淵はどんな日でも、大念佛をしてこゝへ雨乞に行けば必ず雨が降つたと云ふ。(鈴木とし)

○ 龍宮に行つた神主様

(磐田郡二俣町)

或日の事、椎ヶ脇神社の神主様は神社の裏へ大蛇を持つて柴刈りに行きました。ふとしたことで大蛇を大蛇の住んでゐると云ふ、椎ヶ脇の淵へ落しました。淵をのぞいて見ますと、幾千丈とも知れない淵に落ちた大蛇が直ぐ手が届きそうに水の上に浮いて見えます。神主様は崖から下りて行つて、その蛇を拾はうとしたはずみに神主様の体は深い淵に引き込まれてしまいました。ふと目が覺めて見ますと、そこは美しい龍宮でありました。乙姫は「私はね、餓が嫌ひですから、蛇を持つて早くお歸りなさい。これからは決して、この椎ヶ脇の淵に餓などを入れない様にして下さい。又かうして龍宮が椎ヶ脇にあるなどは、決して誰にも言つてはな



りません。この事を守つて下されば、お前の欲しいと思ふものは入用の時、何でも貸して上げますから、此の淵際に来てお言ひなさい。」と言ひました。そこで神主様は喜んで歸りました。二三日経つと、神主様の家には、その國の殿様が、四十人の家來を連れてお泊りにおいでになりました。珍客の事ですから、神主様は澤山の御馳走をして上げ様と思ひましたが、大切なお膳やお椀がないので困りました。神主様は早速淵へ行つて「龍宮の乙姫様、なるべく上等のお膳とお椀を四十人分貸して下さい。」と頼みました。暫く経つて行つて見ますと、目のさめる様なきれいなお膳とお椀が、四十人前並べてありました。それで御馳走をして戴いた殿様は、非常に御満足になつて、お歸りの時には、お賞めのお言葉や澤山のお褒美を下さいました。

その後も、絹の美しい夜具や、或る時は臼と杵、又はお重箱等も借りたことがありました。かうした喜ばしいことを人には知らせたいが残念の事には口止めされてありました。色々考へた末に、「言ふなと言ふ事は、口に出して云ふなといふことであるから、文字で知らせることは差支へなからう」と、遂に友達を家に呼んで此のことを知らせました。友達は此不思議なことを聞いて非常によろこびました。而して約束を破つた神主様はその後何にも借りる事が出来ず、其上に筆を使つて人に知らせたため、其後は文字を書くことが誰よりも下手になつたと言

ひます。今でも此の淵をお椀かせの淵といつてゐる。(鈴木さし子)

### ○ 神 明 淵

(磐田郡山香村)

和泉の下の川に明神淵といふ處がある。昔は食器等で澤山入用な時、この明神様に願へば貸してくれたさうであるが、ある時、誰か茶碗を一つ割つて返さずに置いた者があつたので、これから貸さない様になつたといふ。(本多みち)

### 3 泉と井戸など

#### ○ 硯

水

(田方郡土肥村)

字平野から少し登つた山の林の中にすゞり水とよぶ處がある。

昔頼朝が筆の先で此處を掘つた時、泉が湧出しそれを硯の水とした。後百姓が肥柄杓を之に突込んでから水が出なくなつたと云ふ。(鈴木康子)

#### ○ 鬢 洗 水

(庵原郡西奈村)



梶原山頂より約一町許り西方へ下つた所、即ち、西奈村瀬名暮ヶ谷の権現澤といふ處にあつて、いつも清水が少しづつ湧き出てゐる所を云ふ。この水で梶原景時が討死の時に鬢の亂れをなで、体を清めた處だと云ひ傳へられてゐる。(大木あき)

○ 水 神 様

(安倍郡千代田村川合)

昔日本武尊が御東征の際、此の邊を御通りになられた時、大變咽喉の渴きを覺えられた。水を探しても、どうしても見當らぬので、持つて居られた劍で地面を御突きになると、忽ち清水か湧出した。これが今日の水神様の起りであると云ふ。現在此水神様から流れ出る水は、どんなに日照りが續いても水量に變化をきたす事はない。然し時折水の色が變化する事がある。それは、夏日照りが續いた時など、朝早くより朝日の出る一寸前まで、水の色が濃い茶色に變つて底が見えなくなる。それが五日から七日又は九日位續くと、其の年には必ず天災地變が起ると謂はれて居る。村の人は、地面の中に深く龍が潜んで居て、變事を知らせるのだと謂つてゐる。大正三年の静岡市大出水にも、皆近の伊豆地震にもこれが現れたと云ふ。

(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

○ 霧 噴 井 戸

(小笠郡掛川町)

掛川城本丸天主臺にあつて、後世不覗の井戸と云はれた。言傳へによると、昔敵が攻めて來た時、この井戸から霧が立ち、あたりにこめて、敵が近づく事が出来なかつたと云ふ。

この井戸を掘つたのは、朝比奈備中守春熙で、山を見たて、城を築いた時、本城に井戸を掘つた。これが霧噴井戸である。

掘つた時には土がかたかつたので、鶴はし、鋤、鍬などは勿論、いろ／＼の道具を用ひて、二、三百日も掘つた、が水は出てこなかつた。もうやめてしまはうとした時、蛙や蛇が出て來たので、これは水に近いなと思つてすん／＼掘り、やう／＼水を掘り出したといふ。その深さは麓の川底と同じであるともいふ。その汲み上げる繩は千尺もあるだらうと云はれてゐる。

(土屋 櫻)

○ 難 切 不 動

(小笠郡掛川町)

掛川公園にある。掛川城主天守臺に敵をふせぐ爲めに不動尊をおまつりになつた。後敵軍が



突然押し寄せて来た時、不思議にも、その前にある霧噴井戸から霧が噴き出して、難なく敵の難をのがれたので、不動様の愛の心であると言はれ、遠い人生の行路に必ず遭遇する難を切り抜けると言ふので、難切不動といふ。(土屋櫻)

## ○ 辻井戸

(榛原郡相良町)

この井戸はどんなに照りが烈しくても水がきれる様な事はない。昔、或る年取つた一人ぼつちの哀れなお婆さんが井戸の近くに住んで居た。毎日毎日淋しい日を送つて居たが、何時しか一匹の狐と大變仲よくなり、淋しかつた日も楽しく過す事が出来るやうになつた。所が年寄りの事とて老婆は不意に病氣に罹つてしまつた。流石仲よしの狐もどうしたらよいか全く面くらつて仕舞つた。すると老婆は「濟まないが辻井戸の水を汲んで来ておくれ。」と狐に頼んだ。狐は早速井戸へ行つて水を汲んで来てやると、老婆はそれはお前の小便だらうと云つて飲まなかつた。そこで、狐は、いえ決してそんな事はありませんと、何度も何度も答へたので老婆もやつと安心して、其の水を飲んだ。すると不思議にも老婆の病は直つて仕舞つたと云ふ。

(天井敏恵)

## ○ 弘法井戸

(榛原郡萩間村水呑)

弘法大師が諸國巡鐸の砌、勝間田村三栗へ來られて、非常に喉が渴いたので其處の農家へ立寄つて水を所望した處、其の人は意地悪の人と見えて、大師の身なりが餘りにお粗末で如何にも乞食坊主らしかつたので、水をくれようとしなかつた。

大師は止むを得ず、てく／＼坂を上られて水呑まで来て、復とある農家で水を所望された。今度は大變親切なお婆さんだつたので、態々谷間までくみに行つて来ておいしい水を大師の前に出した。

大師は非常に喜ばれて、さて此處は大變水に不便な土地の様だ。私が一ツよい井戸を作つてやらう、とおつしやつて一所を掘らせた處、非常にきれいな清水が滾々として湧出たといふことである。

此井戸はどんな旱魃でも涸れたことがないので、これは全く弘法様のお陰だ、弘法井戸だといふ様になつたといふ事である。(原木すづ)

## ○

(周智郡三倉村)



ある夏の暑い日に、一人の旅僧が水を求めて、三倉村大河内の或農家に立よつた所が、井戸がなくて水は不自由して居て上げられぬと斷つた。それから其の家の周囲は何處を掘つても水が出ないと云ふことである。その旅僧は弘法大師であつたと云ふ。(鈴木とし)

(小笠郡大坂村)

大坂村大田に、昔一人の旅僧が来て「水をくれ」と言つたが、どこの家でも水が無いと云つてやらなかつた。旅僧は仕方なく立去つた。これより後、此の村は水が出なくなつたと云ふ。今でも水が足りなくて困つてゐる。(松下きん)

### ○ 山婆の井戸

(磐田郡佐久間村佐久間)

私の家の飲料水にする井戸の傍に周圍六尺位の椿の大木がある。この木の下から泉が湧出してゐる。それで此處を椿澤と云ふ。又此の井戸の邊に一千年程昔に山婆が住んで居たと云ふ。故に山婆の井戸と名付けられる。(尾關すゞ子)

### ○ 下賀茂温泉

(賀茂郡竹麻村)

今の下賀茂に昔、兄弟のお湯の神様が住んで居た。二人は随分働きもので、毎日一生懸命お湯をためて仲よく暮して居た。が、或日、ふとした事から争ひを起し、そしてお互に相手を下賀茂から追拂つてしまはうとした。が、兄はやつぱり兄だけに力も強く、たう／＼弟の神さんは一つかみにつかまれて、いやと云ふ程、投げとばされてしまつた。そして弟の神様が落ちた所が湊の海中で、黒根と云ふ小さい島であつた。弟の神様は仕方がないので、そこで暮す事にしたといふ話。

今でも潮が干て黒根が出る様になると暖い湯が出るといふ。そしてそれは下賀茂の湯と同じ性質だと。(大野しげ)

### ○ お園水道

(富士郡島田村)

島田村依田原新橋の東はづれ、和田川の西側の土手を南へ一町ばかり行つた所に幅一間ばかりの川がある。それに土橋がかけてある。こゝをお園水道と呼ぶ。

昔、此處で、お園と云ふ藝者が、この河に入つて死んだといふ。この河は非常に深かつたが今はうまつてしまつて浅い。そして此處に住むものは決して成功しないといふ。或人は御稻荷さんまで祭つて御祈をしたけれども、やはりおもはしくなく、他へ移つてしまつた。今もその



御稻荷さんは古びたまま残つてゐる。(町田つや)

五〇

○ 須々木川の流れ

(榛原郡相良町)

須々木川の流れる路と、米價變動と不思議な關係がある。米價が下る時には東側を流れ、これに反して西側を流れると米價が上る。(失名)

○ 片葉の芦

(引佐郡三ヶ日町)

承和年間に板築驛にて客死した逸勢朝臣の墳墓を守つて、朝夕の勤行怠りなく、行つて居た所の、妙沖尼と言ふ尼があつた。

濱名湖畔入野の或若者が、或時、用事があつて、三河口に行つた途中板築驛を過ぎ、妙沖尼の在す庵に尼の唱ふる讀經の聲を聞いてどんな人が居られるであらうかと、籬間より見、未だうら若き尼の殊勝なる姿に、恍惚として、暫くたゞすんでゐたが、やがて讀經の聲の止むのを待つて、庵の中を訪ひ、「尼君は何人でおはすか、申すのも憚り乍ら、唯今より、御身の爲に薪をとり、水を汲み、勤行のお助けを致しませう。又私の住む里も遠くではない故、糧をも運び、供養して差上げませう。願くは、此の邊りに移り住み朝夕の法の筵に參する事を、お許し

下され」と言うた。餘り切なので、尼もその志に愛で、願を許した。男は大變喜び、明朝より甲斐々々しく働いてゐた。そして折あらば心の中をと思ふが、道心堅固なる尼の心を動かすべきすべもなく、むなしく、三歳餘りを過した。折しも、都より使の者が来て、父朝臣への勅勘御赦免の吉報を傳へた。尼は大いに喜び、父の遺器を負ふて、都へと歸つてしまつた。男は大變別れを惜んだけれども甲斐なく、せあてももの想出にと、尼の住んでゐた庵に、その佛を慕つて暫く任んでゐたが、遂に思ひなやんで、濱名の湖に身を投じてしまつた。幾日かの後に入野の湖岸に、骸が流れ寄つて來たので、里の人々は哀れに思つて都の方に向けて、葬つてやつた。そして不思議にも、此の邊に生える芦は皆片葉であると今にも傳はつてゐる。

(堀川てゐ子)

○ 土肥の湯

(田方郡戸田村)

戸田村、小土肥村、土肥村と三つの村が海岸に並んでゐる。中の小土肥村が一番小さい村である。今戸田村には温泉が何にもない。小土肥村ではいくら掘つてもぬるい湯しか出ない。が土肥村丈には堂々たる温泉が出る。

昔戸田村に大變よい温泉が出た。それを土肥の氏神様が盗んで土肥へ持つて來て了つた。途



中小土肥村で休んだ時に、知らずに少しこぼしてしまつた。だから、今戸田は清水、小土肥はぬるい湯、土肥は温泉が出るのだと。(新聞澄枝)

○ 梅ヶ島

(静岡市)

大昔、八宮と云ふ人が甲州の方から梅ヶ島の方へ行つた。山中の或る道にさしかゝると、見たこともない赤い蛇が其處に居た。彼はこせか何かの悪い病氣をして居たので、其蛇に「自分は病氣で苦しんで居るが、何かよい薬は無いか」と聞くと、其蛇は近くに湧き出て居る湯を指さして此の中に入れと教へてくれた。で、その通りにすると、不思議なことに彼の病氣は忽ちよくなつたと云ふ。

湯風呂の少し下の方に二軒の百姓家があつた。八宮様は此の家の人々に其話をした。そして此湯は二軒の所有物となつた。然し村の人々はそれを面白く思はず、村の所有物とするやうになつたと云ふ。今は十年いくらと云ふ貸金をつけて人に貸し、其利益を村のものにしてゐる。

(牧田あや子)

○ 大城家にまつはる湯の話

(磐田郡上阿多古村)

上阿多古村と下阿多古村との境にそびえる観音山の中腹に、湯が噴出し、癩病、その他の疾

病に患つた者は、此湯に入れば全治すると云ふ。これは昔から、舊家、上阿多古村長澤の大城家の持山で、大城家が衰へかゝつた時、此湯を立てゝ人々を治療すれば再び大城家は榮えるといふ。近來大城家が衰へたので三度目の湯を立てゝ人々が浴して居る。現在は設備を備へ、温泉の如き觀がある。(鈴木とき)



## 三、社、祠、寺の話其の他

## 1 社 と 祠

## ○ 白山神社の奇異

(賀茂郡田子村)

大田子、圓城寺の境内に白山神社がある。老樹鬱蒼として、日光をもらさず、誠に山緒あるらしき古社である。往昔、役の行者が神符を納めた社であると傳へられる。

亥の満水の時大洪水が溢れ山が崩れ、谷が埋れ、田園荒廢して大田子村落は昔日の面影をとどめなかつた。

そのとき社内の老樹十數本が暴風のために倒されてしまつた。棄てるには惜しい老樹であつたが里民は神威を怖れて斧をあてなかつた。

ある夜不思議な物音が聞えた。數百人の人聲である。えいやくといふ掛聲が白山神社の境内から響いてくるのである。村民は驚き怖れて終夜眠らなかつた。

夜があけて見ると、これは不思議、昨日まで倒れてゐた十數本の神木は天を仰いで直立してゐる。枯れかゝつた葉はよみがへつて生き生きとしてゐた。村人は神威のあらたかなることに驚き斧を加へなかつたことを喜んだ。(藤井たまふ、森千枝子)

## ○ 酒精進、鳥精進

(賀茂郡下河津村)

昔、來宮神社の神様杉牟別命様が伊豆の國を平定なされ此の河津に於てお酒をめしあがり、良い心持になつて其のまゝぐつすりお休みになつた。是を見た賊は早速四方より火を放つた。が、命は少しも此を御氣附きなくて、火は段々身近くなつて來た。命の御身も氣づかはれた時、何處からか鳥の大群が押寄せ、各々河津の川の水を羽にふくませて、命の身邊にその水をばら／＼と撒いたのである。幾萬の鳥の事故火も命の身邊まで來ず、そして命もお氣附きになつて難を避けられた。これは命が常に慈悲の心が深く、生物に情をかけた報が來たのだ。今日でもこれを語り傳へ、神のみむねとして、酒を飲むな、鳥を苦しめるな、可愛がれ、と言ふ日が十二月の終りに一週間程續く。これを犯した者は、その人の所有する所の着物が知らぬ中に焼けて居るといふ。(村越ちか)



## ○ 龍宮神社

(田方郡伊東町)

横磯の近く吾妻の森にある。町の人は龍宮と云つて居る。幅の狭い急道を登りつめた所に漸く十坪許りの狭地があり、其處にさゝやかな祠がある。昔日本武尊の妃弟橘姫が海神の怒を慰めんとして相模灘に沈み給ひし時、その御調度が横磯に漂着したのを里人が拾ひ上げて、山腹の森に祀つたのだと云ひ傳へられてゐる。吾妻の森とは尊が弟橘姫の死を傷まれて「あがつまはや」と悲痛の御言葉を漏らされたのをとつて地名としたのであらう。(三枝菊江)

## ○ 間眠神社

(田方郡三島町)

頼朝が三島明神に丑の刻まゐりをして居た頃、或時余り朝早くてねむくてたまらないので、三島町のはづれの方の田の道の處で石に腰かけて休んで居ると、一層ねむ氣がさして来てとう／＼居眠りを始めてしまつた。その間に夜は明けお日様が昇つて來た。此時一人の百姓が田甫へと鎌をかついでやつて來たが、頼朝の姿を見つけて「お侍さん／＼もう夜が明けましたよ」と云つて起した。すると頼朝はやつと目を覺して「あゝさうか、よく起してくれました。お前はこれから朝日と云ふ名前にしなさい」と言つた。そこで百姓は頼朝を起してやつた功によつて姓

を朝日となし、又頼朝の間眠んだ跡へは神社を建て、祀つた。(五味松子)

## ○ 西山の森山

(富士郡芝富村)

森山は大きな丸い築山の様な形をしてゐて、山の周圍に基礎石の如く石が積まれてゐる等から、昔の人が盛り上げたものだと言はれてゐるが其の眞は疑はしい。此の頂上に松のむら立があり、其の中に天照大神が祀られてゐる。

日清戦争の直前此處から三すぢの白煙が空高く立ち上り村民の恐怖心をつのらせたが、間もなく戦端の開かれたことによつてその前兆と領かれた。日露戦争の直前には此の社の上を暗夜にほろつき星が無數に飛び、非常を豫知した村人は大層怖れた。是の如く種々大事變をしらせるが如き不思議が前々より傳へられてゐる。

關東大震災の頃にも「線香の様な煙が立ち上るんだつて」と西山方面から來る者にきかされた事がある。(佐野あき)

## ○ オヤスミサン

(富士郡富岡村)

富岡村淀師金之宮カンノミヤ スヂカイノミヤと筋違橋スヂワイハシとに、オヤスミサンと言つて木花咲耶姫のお休みになつた處と言



はれる處がある。このオヤスミサンの地を汚したり、觸れたり、又屋敷の一部にして、どうづいたり（色々に變化さす事）すると其家の者が病氣になつたりして、死ぬ様な場合が多い。それでオヤスミサンがある處は除けて、屋敷を拵へると言ふ。金之宮にある方は凡二坪の廣さで、すつこ（荒地）になつて人の屋敷の一隅に續いてゐる。筋違橋にある方は廣さ約一坪許りで、周り一尺位の榊が生え、祀られてゐる。（川島綾子）

## ○ いぼ神様

（富士郡富士町）

富士町本市場下町のかさもり、稻荷神社の境内に疣神様と言ふ宮がある。奥行三間、間口三間半位のトタン屋根の建物でその中に疊が敷きつめてあり、左側には爐がきつてあつて、祭の際にあけて使ふ。何時もは閉めてある。この建物の後方に小さな建物があつて普通は其處にお参りする。この宮には綺麗な白石が澤山あつて、疣の出来てゐる人が其の石をお借り申して、それで疣を摩るとれると言ふ。そして取れたら、その様な白い石をも一つ濱で拾ひ求めて、二つにしてお宮に返すと言ふ。

祭日は二月初午の日に行ふ。赤や黄の幟を持つて行くと赤飯のお結びを呉れる。又籤引があり、多くの景品がつくので大變賑はふ。（西尾茂治）

## ○ せきの婆さん

（富士郡富士町）

富士町下横割の某寺の一隅にせきの婆さんを祀つてある。昔咳の爲に死んだお婆さんがあつた。そして死ぬ時、自分は咳の爲命をとられるが私を祀つてくれるなら咳の出る人はなほしてやると言つた。それで現在でも咳の出る人はお茶等を紙に包んで持つて行くと癒ると言ふ。そして癒つたら、箒をもつてその神様の前を掃除しに行くと云ふ。又名、お茶の婆さんとも云ふ。（西尾茂治）

## ○ 楠金の八幡様

（富士郡芝富村）

瀬戸之澤家の先祖に僧があつた。其の人が京都に上つて居た時、時の天子様のお召し出しにあづかつた。それは次の様な事情からであつた。

加島村に住んで乞食の様に落ぶれた人が、死に臨んで腕に住所氏名を書いて葬られた。生れ變つたのが畏れ多くも禁裡の親王様、後醍醐天子様となられたが、腕に文字がありどうしても消えない。斯様な字は其の死人の墓土でこすれば跡方なくなると云ふことを聞かれたので暗々裡に人を求められた所が、幸ひ富士郡より上つて居た件の僧の事をきこしめされて「土を持ち來



れ」と仰せ出だされたのである。

僧は役目を果し、その功により、望みのものを與へられることになった。彼は、「僧侶の身の上として最も望ましきは大菩薩の位、それが叶へらるれば無上のよろこびでございます」と申しあげたので、直に許されて八幡大菩薩と、生きながらにしてなつたといふ。お日待に毎年此の社のお開張をするのであるが、社の鈎取りである瀬戸之澤家の代々の家主ならされば僧侶といへども御開張が出来ぬとの事である。(佐野あき)

### ○ 景 時 堂

(庵原郡高部村)

梶原平三景時は、相州一の宮の人であつた。鎌倉権五郎景政の子孫である。右大將頼朝卿の侍所の別當として用ひられた。其の性質は非常に奸智にたけて、又辯舌巧みであつた。常に自分が高官にあり、頼朝卿が、かあいがつてくれるのをいゝ事にして忠臣を讒言する事が度重なるので、他の諸公等が非常に怒り、景時を悪む事が甚しかつた。

それにもかゝはらず正治元年十月廿七日に結城七郎朝光を讒した。再三の事に諸公の堪忍袋も、遂に破裂して、千葉常胤、和田左衛門尉義盛を始め、六十六人が連署の狀を捧げて、景時の非義を訴へた。頼朝卿もこれを見て大いに怒り、早速に、和田義盛、三浦兵衛尉義村に命

令して、景時を鎌倉より追出した。

追出された景時は、同二年正月に相州一の宮を發して、西國に逃げ行く途中、同二十日亥の刻の頃に、庵原郡高橋村を過ぎて行つた。景時は名馬摺墨に乗つて居たので一氣に馳抜けて狐ヶ崎まで來た。こゝで景時は後方で戰の始つた事を聞いて引返す所に、國侍多數瀬名川の「矢射たむ橋」に景時を待まうけて居て、散々に射かける。景時やう／＼にしてこゝを切抜け、東をさして馳來る途中、國侍が又も、手ヶ谷山の麓の矢崎と云ふ所に待設けて居て鐵を揃へて射立てたので、景時もはや疲れて進む事が出來ず、子息の景季景高に禦矢射させておいて、自分は後の嶺に登つて自害してしまつた。今も景時一族をまつり、梶原堂を建て、年々祭典を行つてゐる。(大木あき)

### ○ 吉 光 稻 荷

(庵原郡興津町)

天正十年天目山の戰に於て武田氏が不利に陥つてしまつたので、勝頼の娘の吉光姫は亡命して興津へ來て、舊本陣市川新右衛門を頼つて、倉庫の中に隠れて居たがとう／＼果て、しまつた。市川家では姫の像を彫らせて、吉光正一位稻荷として祀つたのである。

今夏心堂の西隣の山の裾に荒れ果てた姿となつて居る。(平野ゆき)



## ○ 大杉 稻荷

(安倍郡千代田村南沼上字奥ノ谷)

南沼上毘沙門天内にある。年代は不明であるが、昔、大安寺住職某が、甲斐の萬澤附近で、ある社の大杉を切つた時、其中から木乃伊となつた狐が出てきたのを、それを持ち歸つてこゝに大杉稻荷として祀つたのださうである。村に於て盜難又は紛失物のあつた時には此所に祈ると分ると云はれてゐる、其狐は高さ六七寸長さ一尺位で全体驅存してゐる。

(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

## ○ 神 明 社

(安倍郡千代田村川合)

徳川家齊將軍の時、江戸城内紅葉山に化物が現れて城内を荒した。しかしなかなか退治しよと云ふ人が出なかつた。すると其時に、小島の一萬石の大名松平丹後守は未だ若くて武勇をもつて聞えてゐたが、之を聞いて進んで化物退治の役を買つて出た。夜共處に行つて見ると果して化物が出た。双方争つて居る中に、化物の方が強くて、丹波守の方が危なくなつてきた。その時、白髪の老人が現れて加勢してくれたので化物を倒す事が出来た。その化物は狸であつた。

そして其白髪の老人は自分の領地、川合の神様であつた。其功によつて録高を加増された丹波守は、歸つてきて、その神の社を再建した。構造は小さいけれ共、其時代としては巧妙をきはめたものである。(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

## ○ ショーレンボーさん

(安倍郡有度村)

彼は別當だつた。足が大へん痛んで苦勞したので「おれが死んだら祀つてくれ。足の悪い人をなほしてやる」と言つた。後の人が今馬走から行く山道(有度小學校の向ひ位)の所に祀つた。効顯あらたかださうである。(前島かれ)

附

又此の道の一部の坂の所を通る時、もし轉ぶと片袖切つて投げて行かねばならぬ。これは古い戦からの話だと言ふがよく分らぬ。(同 右)

## ○ 狐 の 面

(安倍郡長田村)

長田村下河原の私の家の隣家に左甚五郎の彫つた面といふのが祀つてある。その家の、今から五代前の某の所へ、長田村小坂から嫁が來た。その時嫁が一對の狐面を土



産に持つて来た。この嫁は四十二三歳で亡くなつたさうな。

この面は、聞く所によると、昔、大阪落城の時、ある旗本が、小坂の日本坂を越す時に熱病になり、やうやうの事で小坂の清兵衛さん、即其の當時の庄屋の家にとどりついて、其の家で病を治した。その御禮に何も置いて行くものが無いと云つて其の家を娘（即嫁に来た人）に一対の面を呉れて行つた。それが此の面である。その面は夜泣き面、一名庄八面と云ひ、赤兒が夜泣きをして困る時、その面を部屋に飾つておくと一日か二日できつと泣きやむといつて、長田村は到る處、東京へまでも借りられて行つた。その結果雌の狐面の方は貸し失つてしまつて今は雄面だけ残つてゐる。それも以前、或る夜、村の人で庄さんといふ人の親爺さんが、その面を被つて跳りををどり、はづみで落して、割つた。すると其の人ば罰が當つて熱病で死んでしまつたと云ふ。

その面には、大井川七曲と云ふ處にある周賀神社の祭神、周賀龍神の意が彫込まれて居ると云ふ。其家では今迄祀りたい／＼と云つてゐたが、去年信心者に見て貰ふと、左甚五郎の彫つた面であると云はれたので、お社を造り、新しく龍を彫り、それと一緒に祀つてある。一昨年の十月六日に式典を擧げた。それから毎月その日を祭典日として居る。最初の時に、村の老婆方が皆で旗を作つてくれたので、祭の度にその旗をかざる。

衆強ノ神と名を付けてある。今では、それにおは、ないねを持つて詣りにくると夜泣きが止むと云つてゐる。（驚栗くり）

### ○沼の婆さん

（安倍郡千代田村南沼上）

昔、庵原郡瀧戸村に長者があつた。此家では先頃家主が亡くなつた許りなのに、其妻小菊までも、悲歎の餘り嬰兒を残して遂に亡くなつて仕舞つた。後に残されたのは小菊の母親と其孫の小霞だけであつた。老婆は一人の孫を養育してその成長を楽しみにして居たが、小霞が十七歳になつた年に、ふとした事から病氣に患ひ、遂に床に臥す様になつた。小霞は手厚い看護をする傍、其平癒を祈る爲に靜岡の淺間神社にお百度を踏んだ。其効あつてか、老婆の病は段々快くなつて行つた。處が或日の事、何時もの様に出掛けやうとして川合の渡の處へ來ると、急に沼の主が現れて、忽ち小霞を水底に引込んでしまつた。

それを聞いた老婆は深く悲しみ、慰めてくれる村人の爲にも、自分が此沼入につて憎き沼の主を退治して、村の守り神にならうと決心して遂に沼に身を投じて仕舞つた。

すると不思議や、其翌年から麻機沼一面に蓮の花が咲き揃つた。村人達は是はきつと婆さんの靈の現れであらうと云つて大變喜んだ。其御蔭で此村は飢饉時にもこの蓮の實や根によつて



大いに助かつたと云ふ。今でも蓮根は此村の名産物の一つになつてゐる。それで村人は婆さんの靈を祀つて諏訪神社となし、七年目毎に、盛大なお祭が催されてゐる。そしてこの神を沼の婆さんと呼びならはしてゐる。(井上トキ、村井千鶴子)

(補)

後醍醐天皇の御代、新田義貞の弟、脇屋義助が東方を平げる爲に、庵原郡の瀬戸に来て其所の庄屋は久しく滞在して居た。其時瀬戸村の長の娘で小菊と云ふのを側女としてゐて、非常に寵愛してゐた。然し間もなく義助は東國へ戦に出立せねばならなくて、二人は別れてしまつた。後に残つた小菊は無事に女兒を産んだが、色々な苦勞の爲、遂に亡くなつてしまつた。小菊の母親は悲んだが、氣を取り直して、其兒に小霞と名付けて、心を入れて養育してゐた。小霞は毎朝川合の渡しを渡つて淺間神社にお参りするのが例になつてゐたが、或日の事、舟に乗つてゐる時、沼に渦巻が起つてはつと思つてゐる中に、小霞の姿が見えなくなつてしまつた。驚いた老婆はこの偉い方の嵐をなくした責任感と、愛情の念の爲めに自分も沼に飛込んでしまつた。そして今でも蛇体になつて、小霞を探してゐると云ふ。それを村人が祀つて、諏訪神社としたのだと云ふ。(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

○先宮の起り

(安倍郡千代田村)

昔非常な旱魃があつて人民が大いに難儀をして、神様に雨乞ひの祈りをしてゐた。すると美しい女の人が小池の傍に現れて、丁度其處に佇んで居た一農夫に「自分は明神である、諸國を巡行して萬民を助けてゐるものである。今後三日をいですして雨が降るであらう」と云つて神の杖を下さつた。農夫は喜んで信じてゐると、忽ち雨が降つて田畑をうるはした。それで人々は其神徳を仰ぎ直ちに上足洗の濯澤と云ふ處に小社を造つて祀つたと云ふ。これが先宮であつて、行脚の途中立寄られた行基菩薩の作られた、十一面觀音が祀られてゐると聞いてゐる。

(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

○久能山

(清水市)

餘程の以前の事だと云ふ。久能山の近くの濱に大津波があつた。大變な荒れで、村人はどうする事も出来ず、只騒ぐ許りであつた。其時突如として久能山のお社の扉が一文字にさつと開いて、中から金色の鳩が一羽南の海の沖を目がけて飛んで行つた。すると、それと同時に、人家や田畑を一呑みにしようとして押寄せたさしもの大波もすつと退いて仕舞ひ、一里位沖の方



まで、水がすつかり干ってしまった。そして其處には波に置きざりにされた、大小數多の魚がビチ／＼はねてゐたので、村人は總出でそれを拾つて、お蔭で大もうけをした。それから後は益々久能山を崇め奉る様になつたと云ふ。

又久能山の麓に大火事があつた時、久能山の白い神馬が、扉を路破つて一足飛びに三保神社迄逃げて行つた。今三保神社に祀つてある白馬がそれだと云はれてゐる。(關 光子)

### ○ 岩成社の傳説

(靜岡市)

北安東の一本松のある近くの田甫の中に、ぼつんと一軒家がある。猶其の家の脇には、よく／＼注意しないとわからない位の、小さな社がある。一坪たらずの場所に建てられてあるのだが、之を岩成社と呼んで居る。

昔徳川時代に、ある女官があつた。戦争があつたので、その戦ひに行かうと思つたが、その女官は非常に重い婦人病の爲に行かれなかつた。非常に残念がつたが、女官は間もなく死んでしまつた。

その後女官はある人の夢枕に立つて「若しも私を祀つてくれたなら、瀬戸川の川邊にある家の人には、決して婦人病をさせない」と言つて、それが三晩も續いた。瀬戸川とは、岩成社

を二三間離れたところに流れて居る、極く小さな川である。

そこで塚を立て、墓石を立てて、さゝやか乍ら祀つてやつた。

ところが、こゝにお参りに来る人が非常に多く、お賽銭が多くなつて、たくさん溜つたので信仰する人達が、十年程前に新に祠を建てたのだと云ふ。

現今は、非常に有名になつて、遠くからたづねて来るそうである。そのお祭りは、九月十五日であるが、相當盛大なものである。(永倉歌子)

### ○ 吳服町の天神さん

(靜岡市吳服町)

昔は吳服町通りは川原であつた。その真中に天神さんの形をした岩があつて川中の天神さんと云つて居た。今では頭だけで、その頭の大きさが二間四方あると云ふ。これを今では盛んにお祭りしてゐる。

嗣は吳服町一丁目の山名屋あたりから、同じく三十五銀行の本店、四つ橋を岩市あたりまで延びてゐて、それを天神さんの地所といつてゐる。天神さんの地所は誰でも賣買する事を許されず、其處に住んで居る人は地所代を天神さんに納める習になつてゐる。それが今では三萬圓位蓄つてゐるだらうといふことである。(川口富美子)



## ○ 垂乳根明神

(静岡市)

或所に、藤二郎といふ人と厚吉といふ人がゐた。厚吉が或る時山で牛を見つけてそれを連れて行かうと思つて木にしばつておいた。

牛が泣いてゐるのを見つけて藤二郎が救けてやつた。厚吉は怒つたが仕方がない。すると或日、藤二郎の家へ若いきれいな娘が尋ねて来て、家事を助けてくれた。そして二人は、結婚した。それから可愛い子供が生れた。その妻は或る時「夫と子供と自分の三人の着物を織るから三日間だけ自分が織る所を見ないでくれ」と約束して、機屋へ入つて一生懸命仕事した。

一方夫は、山へ行きながら、とう／＼三日目にその機屋をのぞいてしまった。

するとその明日からその妻はゐなくなつてしまつた。子供が泣いて仕方がないので、山へ子供を連れて行くと、牛が居て、子供に乳をのませて又連れかへるやうにしてゐた。その妻は、前に藤二郎が救けてやつた牛だつたのである。(金子千代子)

## ○

(静岡市)

静岡市の東南、大谷と云ふ處に、不動様を祀つた小堂がある。昔大暴風があつた時、濱に打

ち上げられて漁夫の網にかゝり、金色の光を放つた。漁夫は不思議に思つて見ると金のお不動様だつた。その漁夫はこれに恐れて病になつて仕舞つた。すると或日、不動明王が枕元に現はれて、堂を建立して祀つてくれ、と云つたのでこの祠を立てたと云ふ。(彦根あい)

## ○ 鳥井のないわけ

(志太郡焼津町八楠)

氏神は加茂神社と稱して武御雷命、安閑天皇を祭神とする。天智天皇の開化二年京都の加茂から移された。

この神が或時、馬に乗り御散歩にいらつした時、鳥井で眼をお突きになつたと云ふ傳説がある。故に其後鳥井を取り拂つたと云ふ。氏子の八楠の人間は、だから片目が小さいと云はれる。(岸本勝代)

## ○ 稻荷神社

(志太郡大富村)

中根新田にある。當社神は、總て建物を密に張り塞ぐ事を嫌ひ給ふた。故に雨覆ひ其他、多くは格子にしてある。又小兒の涎掛けと紺屋を嫌ひ給ふたと云ふ。(鈴木美代)



○ 首塚稻荷神社

(志太郡大富村道原)

北道原にある。武田、今川兩氏の戦闘の後、死歿者の妖怪出で、人をおびやかした爲、其土地の人は社を建て、その靈を祀つたと云ふ。(鈴木美代)

○ 大井八幡宮

(志太郡大富村道原)

昔から此處の氏子は出産に過ちなしと云ひ、他の氏子も此神を信心すれば必ず安産すると云ふ。(鈴木美代)

○ 駒形様

(榛原郡御前崎村)

御前崎村の氏神、駒形神社には彦火火出見命、豊玉媛命、玉依媛命の三柱の神様がお祀りしてある。

この駒形様(彦火火出見尊)が遙々海を渡つて此村へお着きになり、海邊より陸の方へ上つて來られる時、途中の綿島の綿の木で眼をお突きになられた。それから御前崎の人々はその御怒りにふれて皆片目が小さいと云ふことである。

又この神社は、海上で生活する人々にとつて大變靈驗あらたかな神様である。暴風雨の時など、夜になつて闇のために家に歸へるにも方向が分らなくなつた時、駒形様を念じて「何處へ」に火を下さいませ」と云ふと、きつと云つた所に火が見える。そしてその火を目めてに行けば必ず目的地に着くと云ふ。この御火によつて助かつた人は數知れずあるさうだ。

(川口操)

○ 水川神社

(榛原郡中川根村水川)

水川神社は村より六百米の高さの山頂(明利山)にあつたが、宮參りが大變なのもつと村へ近い方へ移さうと云ふ事を相談し、何處に定めるか相談の結果がまともになかつたが、或人が大太鼓を山頂よりコロコロ轉がすと、凡そ村より二百米位の高さの處で止まつた。そこで太鼓の止まつた所へ宮を建てようといふ事になつて、建築にとりかゝつたと云ふ。現在も其時のまゝの場所にある。

此の社を祀つたわけはといふと、此の村は昔から非常に火事の多い村で、火事を見たければ水川を見よと云はれた程だつた。で村人が思案のあげく、此の神を祀ると、それから一度も火事が無いと云ふ。



現在は四月三日に此の神様の祭を行つて居る。(中村千代)

○ お孝姫様

(周智郡犬居町)

犬居町の小奈良安にお孝と呼ぶ一婦人があつた。婦人の病で苦勞し十七歳を一期として世を去つた。しばらくしての後である。矢張り同じ病で苦勞してゐる婦人の夢枕にお孝さんがあらはれて「自分の墓を信仰してくれたら病氣は癒してやる」と言つて消えた。

翌朝醒めた婦人は夢中の事を考へながら起きようとした。すると自分一人では動かす事の出來ぬ體が其の日に限つて不思議に氣持よく起られた。そこで婦人はこれも夢の中の神様のお助けに違ひないと、家の者にも賛成を受けて墓へ出掛けた。そしてお花をあげたり水をあげたりして歸つて來た。その日から體は日増に氣持よくなつていつた。さうして何度も參詣してゐる中に完全になほつてしまつた。その事が段々と人々に傳はり大勢の參詣者を出す様になつた。

その頃お孝の家の人々は不思議さうに話をした。「お孝のお墓へお花や水をあげにくる人があるお參詣する人があるが何故だらう」と。會々ある人から其の話を聞いて驚き且つ喜び他へ祠をたて、祀る事にした。それより人々の信仰はふえ、今ではかなり遠く迄聞えて居る。その祀つてある所は林中のさゝやかな建物ではあるが、お孝姫様在世當時の、人を救はうとお思ひ

になつた美しい心掛がしのばれる。(鈴木とし)

○ 鎌田

(磐田郡御厨村)

御厨村に鎌田神明宮といふ社がある。昔その御神体が御舟にて上陸される時に、鎌を投じて去つた所であるから鎌田と云ふ様になつた。この鎌田神明宮に願をかけて、叶ふと、鎌を一つ宛奉納する。それで社殿には鎌が澤山ある。(本多みち)

2 寺、堂その他

○ 乗安寺

(賀茂郡下河津村)

當寺に女乗物がある。これは當寺の開山日蓮上人駿府にありて法の正邪を論議せんとして、家康の怒を買ひ、特に安倍河原にて斬首されんとした。其時家康の愛妾河萬の方は、平素上人に歸依する所が深かつたので、上人の爲に命乞ひをして赦されたので、密かに自分の籠に乗せ當地に落延びさせた。其折上人が乗用せし籠であるといふ。尙同寺の後方にある堂の天井にある繪は狩野法眼周信の筆であるといふ。(伊原あき)



○ 普 門 院

(賀茂郡下河津村)

當所には寶物として、中將姫蓮華曼陀羅一軸と後水尾帝御筆の龍の軸とを藏してゐる。此龍について傳説がある。

水戸の龍谷院は普門院の末寺で此寺にも龍の一軸がある。此の二つの龍は雌雄であつて、或時普門院の龍が水戸に行かうとして、そつと逃げ出して裏門まで行つたのを、開山の模庵和尚が見付けて追ひかけ杖で打つたら、龍は其のまゝ引返して元の所へをさまつた。が杖で打たれたゝめ首の邊の鱗が三枚取れて無いのであると。杖も今に藏してあるといふ。

日照りつゞきの時は雨乞ひの爲、此龍と中將姫の曼陀羅とを出すといふ。

普門院の庫裡は洞峰千山和尚の建てたものであると云はれ、その用材は一切逆川明神の森を切つて造つた。明神は此家を焼き拂ふか和尚の命を捧げるか何れかだと云つた。和尚は命は一代名は末代であるから命を捧げませうと云ふと、忽ち熱病となつてもだへ苦しみ、「大はんぎりに水を持つて来て我身体を其の水の中につけてくれ」といつたが、間もなく死んだ、全身は黒くなつてゐたといふことである。(伊原あき)

八十二歳の老女に聞く——(田方郡戸田村字上野)

今の本ほら、寺尾ヶ平に昔大きな寺があり、其處に非常によいつき鐘があつた。ところが或時、大變な大水出がして、其の鐘が水におし出されて海の中を「ロン」と流れ流れて興津迄行つて其處に上つた。そして清見寺に上げられた。今、清見寺では其の鐘を矢來でかこつて見せないさうだ。

其の後の寺尾ヶ平は、朝日さす夕日さす所に黄金が四千ばいあるといはれてゐるとの事で、さがした人もあると言ふがなか／＼見つからない。(新聞澄江)

○ お 穴

(駿東郡浮島村)

昔、日蓮上人が、甲州波木井何某の進めによつて、身延山に寺を建て、其第一弟子日向上人に住職をゆづつた。けれ共、常に富士靈峰の麓へ寺院を建てたいと思つて居た。たま／＼日向上人は波木井等と意見が合はなかつたので、身延山の大切な書類、曼陀羅等を澤山駄馬で運んで来て、井出の里の郷士井出志摩守の邸内に數個の大穴を掘り、此所に保管して置き、後に富士山麓へ今の大石寺を建てると同時に此寺へ移したとの事である。(原井美智子)



## ○ 妙海寺のおこり

(沼津市)

昔、日蓮上人鎌倉を立ち、駿河の岩本實相寺に當時一切經を有してゐたのを見る爲に、西に進んで行つた。所が途中海邊で日がとつぶり暮れてしまつたので、附近にあつた茅葺の家に宿を頼んだ。所が當日丁度七草の佳い日であつたので、經を読み香をたいてゐると、海原の方から非常に恐しい音がして來た。何事と思つて見ると、龍燈といふものが非常に輝いて晝の様であつた。上人は「之は龍王權現の供養である。」と仰せられ、そこで家中の者が集つて受戒をしたといふ話がある。此の茅葺の家は山本重安といふ人の家で、後これを寺とした。これが龍王山妙海寺の起りだといふ。

今でも八日堂の行事がある。お會式がある。(岡村よしゑ)

(沼津市上香貫)

岩本のじつさい寺(實相寺)に詣らうとした日蓮上人が、沼津あたりまで來ると、とつぶり日がくれてしまつた。見渡すとたつた一つのあたりが見えたので、これをたどつて行くと妙戒寺にたどりついた。

## ○ 長谷観音の由來

(沼津市上香貫)

このあたりは大瀬明神が度々荒れまはつて、その被害が甚しかつた。日蓮のこゝに來たのを幸に一週間の祈禱をさしげ海を沈めることとした。さて一週間の祈禱が終るのは十二月三十一日の大晦日であつた。まさにこの祈りの終らうとする時、千本松原の梢に太陽の如く明るいものが現はれ、續いて大瀬明神があらはれた。

日蓮は一心に祈禱をすると海上はたちまち静まつたさうである。今でも港町の妙戒寺では大晦日より正月八日まで、八日禱と云つて祈禱をし、行がつむと、大瀬明神よりあたりがさして松の梢に不思議にもあたりがともると云ふ。(野田美津江)

## ○ 長谷観音の由來

(沼津市上香貫)

今より一千餘年前、千本濱沖の海中に、光りかがやくものがあつた。これは誰云ふとなく、観音の御神體だと云ふやうになつた。附近の漁師は、この側を通ることが出来なかつた。そこで時の地頭に頼つて網を引き、かゝつてきたのがこの御神體である。

今では千本濱通に大きなお宮に祀られてある。(野田美津江)

(沼津市)



今から千百年餘り前のこと、海中に何か御姿様のものが浮いてゐる。所が誰云ふとなく、それを観音様の御体だと騒ぎ出して、其所の一人の漁師が地頭に頼んで、網をひかせて貰ひ、お祖りしてあるのが長谷観音だと云ふ。(岡林よしゑ)

○ 毘沙門天の靈驗

(富士郡元吉原村今井)

昔、濃尾地震の際、鈴川(今の今井)の毘沙門天の中では、大勢の兒童が、習字に餘念がなかつた。毘沙門天像は、此の地震を豫知して「子供出ろ」と云つて、自分が先に外に獨り出てしまつたといふ。これは聖徳太子の作になる毘沙門天ださうである。(杉山ふで)

○ 先山観音

(富士郡大宮町)

大宮町安居山分の西の山に、一寸八分の金作りの観音像が祀つてあつたが、何時しかその観音像が唯一人で小田の山に引越して來て「先づ先づ」と歩を留められた。故に此の山を先山と呼び、觀音を先山觀音とも古田觀音とも云ふ。村人がこれを見つけて現在の地に堂を作り、毎年八月十一日にお祭りしてゐる。(佐野あき)

○ 毘沙門天

(安倍郡千代田村南沼上字奥谷)

この毘沙門天は傳教大師の作であると云ふ。此堂は初めは東向きであつた。所が、北街道又は東海道を馬に乗つた儘通りかゝると、きつと落馬して負傷して仕舞ふ。それで靈驗の顯著な事が分つて堂を北向きに建て直した。すると、其後は落馬する者はなかつたと云ふ。

又この南沼上には古來悪疫の流行した事のないのは此毘沙門天のある爲だと云ふ。今日でも一人も傳染病になつた者がないと云ふ。(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

○ 馬頭觀世音

(榛原郡白羽村)

村の中央、觀音山と呼ばれて居る小高い岡の上に馬頭觀世音の祠がある。昔、この祠は南を向いて遠州灘を眼下に見下してゐたが、その當時には、この遠州灘を航海する、馬皮を積んだ運搬船はきつとこの觀音の沖合で難船したさうだ。それで村人の衆議一決で觀音堂を東に向けかへたが、それから、馬皮を積んだ船も無事に航海をつゞけることが出來たといふ。

この祠は今も尙東向となつて居り、靈驗極めてあらたかとのことで、村人の尊崇のまゝなつてゐる。(松井せい)



## ○道白平

(静岡市)

今から四百年許り以前に道白禪師といふ名僧があつた。此人は野州に生れて今の東京府下青梅村の最乗寺の僧となり、諸國を巡り歩いて、駿河の國にも来て、焼津の八楠にも住んでみたが思はしくなく、尋ね尋ねた末、今の安倍郡千代田村北沼上の奥、龍爪山の裏山に住むことにした。それから弟子も一人出来て共に修業中、その時府中の城主今川義元に聞えて、招かれて府中へ佛の道を説きに弟子を連れて出掛ける様になつた。するとその弟子が、奥女中小萩と云ふ者と愛し合ふ様になつたので、禪師は弟子に暇を出してしまつた。其後その弟子は病を得、鯨ヶ池に投身した。奥女中も城中より暇を出されて野田村へ歸つて居た。

或日禪の處へ一匹の牛がやつて来た。何か言ひたさうに見えたので、禪師は神通眼でみると元の御弟子の化身と云ふ事が解つた。そこで禪師は、其牛を其日から側に置き毎日々々入用の品を府中まで買ひに遣らせてゐた。そして夜分になると牛は野田村の小萩のもとに行き、夜を明して又禪師の處へ戻つて来た。小萩もよく其牛をいたはり、食物を充分與へた。小萩が牛の妻として一生を送つたので、野田村を「牛妻村」と呼ぶ様になつたと云ふ。

禪師はかうして佛の道を説き聞かせて居る中に、清水の奉行土屋といふ人の願ひにより、今

の庵原郡有度村馬走に△嚴院を開いた。そのうちに牛も死んでしまつたので村の人々は、これを禪師の處へ運んで来て、途中まで来て一休みすると牛は化石になつてしまつた。それで仕方なく、その儘に置く事にした。これが、今の庵原郡高部村桃林寺にある牛石様だといふ。故にその字を高部村大内字牛ヶ淵と云ふ。

禪師の住んでゐた所を道白平といつて、小さい五重塔や、岩穴等があると云ふ。

(高野マサ子)

## ○小夜の中山久延寺の縁起

東海道を往き來する旅人の辛苦を慰め、酒の名所として歌にまで讚美された遠州菊川の里に昔熊鷹平内と云ふ男が住んでゐた。妻との間に姉を月小夜といひ弟を八太郎といふ同胞があつて、月小夜は名前の通り美人であつた。

平内は生れつき殺生がすきで、子供の時から蛙の皮をむく事が手際よく鮮かだつた。大きくなると愈々増長して毎日狩をして狐や鹿を追ひ廻して一つ玉の強藥詰を引金引いたその刹那ドンと來るその反動と煙硝の間にうける手ごたへの味を忘れる事が出来なかつた。

「父さん殺生だけは止めて呉れ、極樂へ行かれないと和尚さが言つたよ。」と八太郎は子供心



に何遍か諫めた。「フ、ン、笑はせらあ、地獄が何だい、單調な無意味の月が何億萬年も讀く極樂よりは變化の多い地獄の方がどれ程面白いか知れぬ、針の山結構、血の池悪くないな、それよりはお前こそ男らしく狩をしろよ。」と父はてんで相手にしなかつた。

天平年間の事だつた。或る大雪の朝平内は今日こそ獲物があるぞと勢こんで獵に出掛けた。折しも向ふの岩の間に見ゆる黒影、熊か鹿かと、平練の銃先、頭をはかつて切つて放てば確に手應へがあつた。いそ／＼と近づいた彼は獲物を見て、アツと叫んだ。

平内は久し振りの大きな手ごたへに息をはづませて、近寄つて見ればあたり一面雪を染めて唐紅の血汐の中に可愛い一子八太郎が虚空をつかんで淺間しい銃殺の最期にもだへて居る。

「我が子か悪かつた許して呉れ、日頃からお前に殺生を諫められてゐたが、今となつて始めて目が覺めた」彼は其の後全く殺生を斷つた。

八太郎が殺されたその日から妻はいとし子の名を呼び続け、身も心もうつろとなつて氣も狂ほしくなつた。

そして「八太郎！／＼」と我が子の名を呼び乍ら、菊川にとびこんだのはそれから間もない事である。それ以來夜な夜な附近に頭は鳥で体が蛇の形をして兩翼を持つた怪鳥が現はれて里人を惱ました。奇々と鳴いて闇に出没した。蛇身鳥だ／＼と皆恐しがつてその姿さへ見きはめ

得なかつた。蛇身鳥はその銃い國はしと足の爪で幾多の里人に傷をつけた。夕闇迫る頃になると東海道の一旅宿驛は全く犬の子も通らぬさびしい日が續いた。

「菊川の里は怪鳥現れ里人を惱ますと聞く、汝直に行きて退治せよ」との命を奉じた三位良政は、家臣橋主計助と呼ぶ屈強の者を連れてはる／＼遠州路をさして出發した。

三位良政は主計助と共に草深き遠州中山の里に訪ねて來たが、一步菊川の里に足を踏み入れるや怪鳥とは縁の遠い、妙なる音楽を聞いた。

夕月に垣間見れば一人の美女が無心に箏を奏でてゐる。

白魚の様な手のさばき、夕顔の様なほの白い顔、良政は怪鳥の事も忘れてうつとりとした。

「殿何を御覽になりましたか」

「オウ主計助か、てもしほらしい花ぢやのう」

「お氣に召しましたか」

良政は處女の様子に耳の根迄赤くした。

その後「月小夜さんの所には鄙には見られぬ美しい殿御が居られる、ほんに月小夜さんは幸せやなあ」と里の乙女等は羨しがつた。

良政は一方に月小夜を思ひ一方にすごい怪鳥退治を考へて慌しい日を送つた。毎日々々月小



夜と觀世音を祈りつゝ數遍づゝの讀經を怠らなかつた。或る深夜の事だつた。果して化鳥は腹をえぐる様な氣味悪い叫びを擧げて家の周圍にとび廻つた。

それツと主計助は早速毒矢を取つて良政にあてがつた。彼は口に觀世音を祈りながら、天の一角をねらつて化鳥にあたりをつけたが、墨を流した様な眞の闇、まるきり見當さへつかなくなつた。おのれツと良政の氣はあせつた。怪鳥は下界の小さな人間をあざける様にキツ／＼と叫んで時々つかみかゝつた。

觀世音の御利益か、此の時、眞暗なとぼりをさいて一道の靈光がさつと投げられた。見るとそこには世にも恐るべき怪鳥がさかんとび廻り、姿がクツキリと描き出されてゐるではないか今だツ！満月と引きしぼられた強弓の毒矢はつるを離れてビューとまつしぐらにとんだ。たしかに手應へ。

主従二人は松明の火をかざし乍らバサリと落ちた獲物怪鳥を取り圍んだ。噂に聞いた以上の怪異な姿は今更に兩人をふるひ上らせた。

首尾よく怪鳥を退治した良政は、當然京都に上る筈であつたが、鄙には稀な月小夜に心引かれて、天氣が悪いとか今日は申の日だとかごま化して、する／＼と日を延ばし草深き月を賞めたりした。

「月小夜これは形身ぢや」時の流れは遠慮なく過ぎて、ある日、良政は彼女に肌守りの觀世音を渡して遂に出發した。彼女は良政の後影を何時までも／＼と見送つたが良政の姿が見えなくなる／＼と泣き出した。

良政を送り出してからの彼女は全く淋しい日が續いた。その翌年月小夜は良政戀しさの余り父の寝物語に聞いた都に上つた。

「當分我が館に住うて居れ」久方振りに會つた良政の言葉。それ以來彼女は良政の正妻である萬壽前に氣兼ねし乍らそれでも嬉しい日を送つた。

かくて、寝苦しい或夜、良政がフト眼を覺すと萬壽前の黒髪と、月小夜の丈なす黒髪とは蛇の如くにからまり合つて生ける者の如く争鬭を續けてゐた。彼は脊筋に三斗の冷水をあびせかけられた。

それから間もなく彼は中山の里に一字の堂を建て月小夜にあたへた。

觀世音の像を本尊として祀り、その傍に彼女を住まはせたのであつた。折しも教化の爲此の地に錫を止めた行基菩薩、此の聖僧を開基とし、かくして中山の古利久延寺は建てられたのであつた。(中村歌智子)



## ○ 乃の雉子

(静岡市)

八八

小夜の中山の村に男の子を一人持った夫婦の獵夫が住んで居た。此子供は生來大層あはれみ深く、毎日父が狩に行くのを止めたのであつたが、父はなかく止めなかつた。此子供が十歳位になつた時であつた。今日も父をいさめたけれど子供の言ふことなど聞きもせず、又裏山に狩に出かけた。するとその子は父が出たあとで、家にあつた熊の皮をかぶり、裏山の笹の間に寝て居た。父は子供が寝て居るとは知らず、大きな熊を背負つて家に歸つて來た。母はよくくく熊を見ると南無三、それは自分の子供だ。大變驚き悲しんでとうく狂氣の如くなつた母は遂に其の子供を食べて仕舞つた。すると母は大きな恐ろしい雉子になつてその村の街道の大きな松の本にとんで行つた、その鳥は松の木の上に居て羽をばたくと云はせる。すると道を通つて居る人達が死んでしまつた。かくしてその後、旅人や村の人達がその下を通ると羽をばたくさせて殺した。が、其の時分の弓の名人が其處を通つた時に射止めたと云ふ。

(大石とき)

## ○ ショイ山の傳説

(榛原郡中川根村上長尾)

私の菩提寺千葉山智満寺境内観音堂の奥深く鎮座在しまして、六九年の御開帳にしか拜む事の出来ない、あらたかな、七尺ばかりの十二面千手観世音菩薩がある。この観音様は志太郡大津村の、同じ名の千葉山智満寺の、國寶になつてゐる十二面千手観世音菩薩と一本の木から彫られた姉妹像で聖徳太子の御彫刻になつたものだと言はれてゐる。

今は腐朽して、原形をとどめてゐないけれども、こんな言傳へがある。此の像は元は周智郡との境の高い山に安置せられてゐたもので、村人が信仰に不便であるから村の近くへ遷座しようと言ふので、山の細道をはるく脊負ふて村の方へ下つて來た。

村近くなつて來るとどうした譯か、観音様はだんく重くなつて、しまひにはどうしても動かなくなつてしまつた。

村人は色々に評定した結果、あらたかな観音様であるから、この像には生が入つてゐて、山を下るのを嫌つてそれで動かないのだらう、どうかして此の生を抜くより外はないと言ふ事になつた。

そして村人は又評定した結果、これは火に炙つたら生が抜けるだらう、と言ふので澤山の枯木を集めて火を焚いて観音様を火炙りにした。すると不思議にも観音様は元の通り軽くなつて樂々と脊負ふ事が出來て、山を下り今の處に安置された。現今毎年八月九日にはお祭りをす



る。今でも火炙りをした山をシヨイ山と言つてゐる。(小澤苦枝)

九〇

○ (榛原郡川崎町)

遠州川崎の勝侯に、藤澤といふ所がある。この藤澤の村は後と前に山があつてその間に田もあり人家もある。だん／＼その平地が狭くなつて兩方の山が一緒に合した山の麓をいんぎようだいらと云ふ。こゝにもといんぎようさまがいんぎよう寺を建て、居たのだが、武田信玄に寺を焼かれて相州に逃げてゆき、其所で又二番目のいんぎよう寺を建てた。(いんぎよう寺と云ふのは土地の人がなまつたもので遊行寺と云ふのださうだ。)そして藤澤をとつて相州の土地にその名前をつけ、又近邊の土地にも遠州の地名をつけて川崎、横須賀、大磯(遠州では字は同じでおいそと讀む)など、つけたと云ふ。今でも焼かれた遊行寺の後に焼米が出るといふ。その焼米はせんじてのむと風邪薬になるといふ。(大石とき)

○ 多 門 天

(小笠郡比木村)

小笠山小笠神社の西方に多門天の祠がある。傳へによると、徳川氏の始めに淺羽の庄芝の河村手島の男に小太夫といふ者があつて、小さい時から好んで笛を吹いた。此の男が年十五の時

の正月十五日、小笠山に上つて笛を吹き其の儘行方不明になつてしまつた。その母は悲哀に堪へず嘆いてゐたが、一夕の夢に小太夫がみえて、吾は小笠山多門天となると告げた。それから後家僕が薪をとり山に入つて樹の下で眠り、さめて懷中物があるかと思つてと見ると布片があつた。そこで歸つて家人に之を示した。それは明かに小太夫の以前着た所の衣の袖であつた。

其後家人は病氣の時には往々夢で薬を教へられ靈驗があつたと云ふ。それから後祠を建て、多門天とし之を祀つたと云ふ事である。(萩原みな)

○

(周智郡三倉村)

榮泉寺の開山と、周智郡森町の大洞院の開山とは兄弟だつたといふ。或時大洞院の開山が諸國を巡路した時、或村に差かゝつた。すると小さい子供達が、砂や土を固めて人形らしい物をこしらへ、神様だといつて、周圍に花をあげたり土の團子を上げたりしてゐた。開山は子供達の一生懸命作つた物だからと思つて、子供達に向つて「その神様を小父さんにくれないか」といふと子供は快くそれをくれた。和尚は神として荷の中に入れて、又他國へと移て行つた。巡路してゆく坊さんの事ですから、いゝ宿に泊る事も出来ず。又宿でも泊めてもくれない。

故に野に寝たり、山に寝たり、或は人家の軒端に寝ては日々を過していつた。或日の事、人



の軒端に寝て居ると、其の家の主人が来て、大へん悪罵し、刀を振つて切りかゝつた。開山は兩斷されたと思つたが不思議にも、體にはなんの障もなかつた。そして又旅を續けて行つた。ある所で荷物を出さうとした拍子に、あの土人形も出て来た、がそれは頭から眞二つに別れて居た。それは和尚が人の軒下へ寝て兩斷されたと思つた時、この土人形が身代りになつてくれたのであつた。

それから始つたものだらう。今大洞院は身代りの神として、出征する軍人等のよく參詣するお寺である。(鈴木とし)

○ 呼ばり堂

(田方郡西豆村)

下村の北端、舊道に沿うて、昔、呼ばり堂といふ堂があつた。此堂に住した僧、盜難を恐れて小判を床下に埋めてゐたが、やがて病死した。後、床下の小判は主を慕うて夜々里人に聞えるやうに呼んだと云ふ。現在は石碑二基の存するのみ。内の一基は廻國六十六ヶ所の供養塔、一は住僧の塔であるが、いつの頃からか、これを「せきの婆さん」と呼んで、咳に苦しむ人々は竹筒を手向けて至快を祈る風を生じた。(山田茂子)

○

(沼津市)

駿東郡鷹根村の赤野觀音のお堂は、左甚五郎の建てたもので、大變巧妙に出来て居て何處からこはしてよいか分らないで、こはす事が出来ないと言ふ。(野田美津江)

○ 備前さんのお堂

(富士郡田子浦村)

今私達の村内の新濱といふ所に行くと、すぐ目につく所に小さなお堂がある。それを土地の人達は備前さんと呼んで居る。昔備前の國の人が親船で駿河灣へ来て、今の潤川に入るのを、間違へて富士川に入つた。しかし富士川は人が知る様に、非常な急流なので船は忽ちかぶつて(ひつくりかへつて)しまつた。そして乗合せた中の七十餘人は溺死し、十三人ばかりの人はからうじて助かつたが、其の人達は今の新濱に死んだ人達の靈を弔ふ爲に石塔を立てた。かうして何年かたつた後何も知らぬ村人達は、この石をくだいてあちらこちらと運んでしまつた。しかし最近になつてこの濱にあまり悪い病氣がはやるので、しらべた結果、この石があちこちに埋つて居るのがいけないと言ふので、今度小さいお堂を建て、きれいに祀つたのである。

(望月貞子)



## ○ 沓ノ谷釋迦堂

(安倍郡千代田村沓ノ谷)

この釋迦堂の創立は百四五十年前と云はれて、丈四尺有餘の釋迦の坐つた木像が安置してある。明治十七年頃暴風で崩れてしまつたので、其木像を一時、長源院に預けた。處が釋迦堂の横手に山田清工門と云ふ農家があつて代々眼病を患つてゐたが、その犂鐵藏の、或夜の夢に釋迦佛が現れて、若し自分を祈念してくれるならば、その眼病を直してやらうと仰せられた。理在の御堂はその時建立せられたのだと云ふ。現今あちこちから眼病の爲に參詣する人があると云ふ。(青木きみ、伊良むめ、原川美江)

## ○ 川邊の駒形さま

(静岡市川邊)

御神体は宇治川の先陣で名高い名馬摺墨の馬蹄石であると云ふ。安倍郡柘澤の五呂左衛門といふ人の孫に聖一國師といふ人があつて、この馬蹄石を持つて諸國を巡つて歩いた。そして安倍川のほとりに來て暫く此處に暮してゐたが、馬蹄石をこの土地の人にくれて又出掛けた。この馬蹄石を今の處に祀つて駒形さんと名付けた。祭日は九月十七、八、九日の三日間である。

(川口富美子)

## ○ 釋迦堂鐘について

(小笠郡相草村大字赤土小字大下)

今から三百年程前釋迦堂の堂守をしてゐる上念と云ふ僧があつた、鐘を作らうと思つて托鉢をして金をため、鐘を鑄る當日に鐵の溶けた中へ日頃貯へた小判を投入して作つたのが、今の釋迦堂鐘である。後雨乞の爲小笠山に背負ひ上げたが、すべて鐘に破れ目を作つたので森町で鐘を直したと云はれて居る。鳴りのよいことは近村一で、他の鐘が鳴つて居る時に鳴らすとすべての鐘の音を吸収して此の鐘の音しか聞えないと云ふ。紐も三百年此かたすつと同じものであると云ふ。昔から云傳へによつて紐は取換へる事は出来ぬとされてゐる。悪くなると麻と布でつぎたして行くのである。又此紐はせんじてのむと夏病みをせぬと云つて紐を貫ひに來る人がある。堂守の僧は夏などになると鐘を盥のかはりにして湯水を浴びたと云ひ傳へられてゐる。釋迦堂は尙今に存し墓場となつてゐるが十二年目毎にお開張がある。今年はお開張年に當つてゐたので三月に行はれた。鐘は小笠郡相草村赤土丸井戸、赤堀定藏氏方に仕舞つてある。

(齊能壽子)



## ○ 本間堂の由來

(小笠郡南山村高橋)

俗にお墓様又は醫者墓様と云ふ。今から八十年許り前、北國の醫者本間謙齋と云ふ者が、修業に出て諸國を巡り歩き、本郡に來て新野村の或醫者の内に居た。後他所へ出掛けて病氣になつた。(其病氣は癩病らしい)それで再び新野村へ歸されて、そこで死んだ。今から七十二年前である。爲に新野村では野山に葬つた。死ぬ時遺言に、「自分は醫者であるから世間の病氣を癒してやる、そして世人を救はう」と云つたさうだ。後、堂が建てられて(五六年以前に建てられた)本間堂と云ひ、不思議に御利益があるので信仰する者が年々殖えてゐる。開帳日でも百人以上の参拜人は絶えない。

又此の人が死んだ時、墓石の代りに村人が一人の松の木を植えた。餘程大きくなつて居たその松を、或人が薪にする積りで切つた。すると其の切口からは血が流れ出た。そして切つた人はすぐ病氣になつて死んだので、村人が恐れて、その松は其儘残してある。(齊能壽子)

## ○ 輪くゞりさんの大銀杏

(富士郡大宮町)

輪くゞりさんは子育ての神さんと云はれる。其の前に大銀杏がある。此の木は幹の所々から乳房の形をしたものが吊下つてゐる。又根本から三間位上に洞穴がある。この洞穴は縦一尺横六寸位で其の中に左甚五郎の作と謂はれる人物像が穴一杯に嵌めてある。この像は裸体で著しく肥満して顔が大きく目は金にて輝き、齒も同様に金で耳は長く垂れ下つてゐる。附近の人は之をマルシテンサンと云ふ。

隣のお爺さんのうる覚えには、或夕方、一人の鬚を長く胸に垂れ總金齒の年寄が來て「梯子をちよつくら貸してくれ」と云ふので貸すと、何時歸つたのか判らない間に居なくなつてしまつた。多分この人がこのマルシテンサンを入れて行つたのだらうと云ふ。

此のマルシテンサンは幹の生長の爲めに押されるので段々平べつたくなつて來る。それで毎年祭りの時、少し宛幹の内側を剝つて保護してゐる。(羽柴富貴子)

(賀茂郡中川村)

昔、藤井と云ふ家の前の島に井戸があつて、そこに夕顔の棚がこしらへてあつたが、障子山



と云ふ人が、戦の時こゝに隠れて、見つかつて、逃げたと云ふので、その藤井と云ふ家では今でも瓜類を作らない。そして十年前まではそこに旗を立てたと云ふ。(土屋みどり)

穴

○ 頼朝公の隠れた穴

(沼津市)

香貫山の東部にあたる部分に頼朝公の隠れたと云ふ穴がある。後向になつて穴に入り、體を叩くとボン／＼音がする。(岡林よしゑ)

四、塚と墓

1 塚

○ 早乙女塚

(駿東郡清水村)

清水村湯川區の徳倉橋に差し掛らうとする處の道路の東側に小さい塚がある。これを早乙女塚と云ふ。昔、この地の所有者であつた某が田値の際、まだ植え終らぬ中に夕方になつて仕舞つた。若しこの仕事が成らなければ、其後各家の日程が全部きまつてゐるから自分の處が最後にならなければならない。其家の主婦は大變に心配して、いらだつて呟いた。すると西の山に没しやうとした太陽は再び昇つて赫々として輝いたので、やうやく豫定の面積だけを植え終へた。植え終へると突然主婦は卒倒して、こときれて仕舞つた。爲にこゝに塚を築いて置いたといふ。(山本よしゑ)

○ 雌鹿塚、雄鹿塚

(駿東郡浮島村)



昔、浮島沼の中に大きな島があつて其島に二匹の雌雄の鹿が住ん居た。或晩海が大變荒れて海水が沼に入り、とう／＼其島が二つに割れてしまひ、東側の島に雄、西側の島に雌と別れ別れになつた。一匹宛になつて其儘この二匹の鹿が死んだので、それを村の人達があはれんで塚を作つてやつたといふ。(原井美智子)

## ○七 塚

(田方郡伊東町)

原畑と云ふ處にあつて物見塚とも云ふ。此處は伊東城の趾であり、寶物が隠されてあると云はれ、堀ることを禁じられてゐる。(稻葉よし江)

## ○經 塚

(田方郡西豆村小下田)

經卷を納めてあると云ふ塚で、一は下村、山田倉太郎氏の所有地下の澤の畑の畔にある。周圍約十五米、高さ二米である。

一は大木山佐藤寶氏の所有地で、通稱雀石と呼ぶ地にある。現今その附近を經塚と呼ぶに至る。周圍約二十米、高さ三米、昔から女人禁制の地とされてゐる。(山田茂子)

## ○經 塚

(沼津市)

香貫山中にある塚で、經が入つてゐると思はれてゐたが、いざ堀出して見ると古い甕があつたと云ふ。(岡林よしゑ)

## ○九 十 塚

(沼津市)

狩野川の堤中に所々にあるさうだがはつきりは解らない、これは甲駿豆相の人達の古戦場で其等に關係した戦死者の首を埋めてあるといはれてゐる。之を堀ると崇りがあるといふ。其の崇りは、皆家の主な人が死ぬ事である。(岡林よしゑ)

## ○首 塚

(沼津市)

千本松原の中にあり、昔こゝで戦があつた時、戦死した人達の白骨を祀つたのだと云ひ、夜そこを通るとよく白馬にまたがつた首のない武士がかけて行くのを見る等と云はれて居る。頭痛がする時に不思議によくきくと云つてお線香が絶えた事なくけぶつて居る。

(百地嘉代子)



## ○ 首 塚

(沼津市)

千本松原のすつと西部にお首さんといふ所がある、之は碑が建てられ、首から上の病氣ならばどんな病氣でも治ると云はれてゐる。

天正年中に北條氏政と武田勝頼とが戦つた時に、兵士の首を埋めた所であるといはれてゐる。(岡林よしゑ)

## ○ 工 藤 塚

(富士郡大宮町)

浅間神社の西裏にある。昔近所の人がこの塚の物を掘り出した處が、其人は氣違ひになつて仕舞つて「我は工藤祐經である。この塚の物を掘り出した者は元の所にやらないと打殺しちまふぞ」と云つたさうだ、それから工藤塚と云ふやうになつた。(羽柴富貴子)

## ○

(富士郡田子浦村)

私達の村内の前田新田といふ所へ行くと、海岸の砂山の所に「春日大明神」「大正六年四月建之」と書いた大きな碑がある。

之はずつと昔も春日さんを祭つて居たが明治の末頃津浪の際に流されてしまひ、その後村人達はそんな事は忘れてしまつて居た。ところがそれ以後、此の濱では少しも漁がないので易者に聞いて見ると、昔の春日さんの碑が細かく碎けてあちらこちらにうまつて居るのを「さんば」(川を砂利等運んで通る船)の竿に毎日の様につゝかれるので怒つたのだ、と聞いて、又今の碑を立て、祭る様になつたと言ふ。(望月貞子)

## ○ 宇波那理塚

(静岡市)

北安東から柳新田に行く所の路傍にある。イハナリ様と普通に云ふ。附近を岩成と名づけ、路傍一間ばかり隔てた所に方三尺程の地に小祠があり婦人病の神様であると。

今川氏の頃、此處に居たある人の本妻と妾とが、嫉妬によつて戦つた跡であるといふ。古昔後妻打<sup>ウハナリ</sup>と言つて、夫が妻を離縁し直ちに後妻を迎へた時、先妻は親族と共に後妻の家を襲ふ習があつたと云ふ。だから或は後妻打に斃れた者の爲に造られた塚なのかも知れない。

又今は、今川家の女の人が、月經が重くて死んだ所だから婦人病の神様としてある、とも云はれてゐる。(松田千鶴)



○ 櫻 塚

(静岡市)

能野神社の東に一坪の地に小祠を建て、櫻の古木がある。

里の人は、ワンバコ様といふ。明治三十年練兵場を設ける時に作つた。祠は北安東の西谷仁氏の庭内の稻荷様に合祠したものである。昔、お膳やお椀が不足の時、此の祠に借用の願をかける、翌朝必ず所要の數だけ取揃へてくれたと。(松田千鶴)

○ 吉 塚

(静岡市)

北安東柳新田と麻機村との接する所にある。樹木が植ゑて有つたが近頃取り除かれてしまつた。

姑があつて、嫁を酷使し嫁一人に命じて、此所の田の植ゑ付けをさせた。嫁は命に従つて植ゑ終ると。死んでしまつた。そこで此の塚が出来た。

此の田を耕す者は必ず家内に死者を出す。

(松田千鶴)

○ 子塚靈神供養塔

(榛原郡相良町)

昔ある高貴な人が戦争に敗けて、其の人の娘が敵に追はれて子塚の大きな松の木の下にかくれた。其時自分の子供が泣いたので遂にかまきり殺された。或人が可哀さうに思つて母子を松の木の下へ葬つて、さゝやかな墓を立てた。それが今日残る子塚靈神供養塔であると云ふ。

今の松の木は彼の松より二代目の松の木であるといふ。(天井敏恵)

○ 小 塚 靈 神

(榛原郡相良町)

戦國時代終り頃、村より一人の娘が二人の子供を引き連れて林の中へ逃げ込んだ。間もなく二三人の強盗が通りかかつた。その時、どうしたものか連れてゐた子供の娘の方が泣いたので早速かばつて泣かせない様にした。

が強盗は一齊に林の中へ入つて娘を見出したので、遂にかまつて娘も子供も共に殺された。其の後誰言ふとなくこの事が傳はり娘の体をいけて其の上に石碑を立つて其の石碑に小塚靈神と記した。是を小塚様と云ふ。

この石碑の右に木を植ゑたが枯れてしまつた。之を火にくべると祟りがあると傳へて居る。



ある双生兒の兄弟があつたが不幸な事に一方は片輪者であつたので、小塚様に御参りしてゐた。が、片輪者の事として毎日々々御参りが續かないので、片輪でない方が代つて小塚様へお参を續けてゐたのだ。すると近所の人々が「あなたはどこへお参りに行くのですか」ときいたので正直に「小塚様」と云つた。すると近所の人々は片輪者がなほつたのだと感違ひして早速「小塚様」と云ふ日を作つてその日が来ると板店（露天店）まで出た。其の後片輪者はなほつたのでなくて片輪でない人がお参りするのだといふ事が分つたので、今ではお参りする人がなく雨ざらし日ざらしとなつて一本の枯木を友として立つて居る。が、時々松明でも上げるのか前は眞黒くなつてゐる。其他お花を上げてある事もないではないが、人通りの少い中に淋しげに木を友として眠つてゐる。

○ 千 人 塚

（榛原郡白羽村）

白羽村宇小杉原に、方約四間高さ一丈位の、千人塚と稱する所がある。その上に、周り約四尺程の松があつて椀貸せ松といふ。食に窮するものが祈つて此所に來て見れば常に椀（食物）があつたといふので、この名があるとのこと。又この松を切れば血を出すといつて、村人はおそれ手を觸るゝものもなかつたが、明治二十年の頃之を切つて畑となし、今は其の跡さへも

なくなつた。

この松を切つた人は當時相當の資産家であつたが、今は全く零落して家屋敷も留めず、一家は盡く死せるあり、病めるあり、全く離散してしまつた。これこそ松のたゞりではないかといはれてゐる。又、その時人夫として働いた（直接松を切りたふさうとした）人は、枝打ちに上つた所、過つて墜落して腸を出して死んでといふ。（松井せい）

○ 猫 塚

（榛原郡御前崎村）

御前崎に遍照院といふ寺があつた。或日の事此の寺の住僧が海邊を通つた所、一匹の子猫が大勢の荒くれ漁師にせめさいなまれてゐた。理由をたづねると、この野良猫が、取つたばかりの魚をさらつたとのことであつた。氣の毒に思つた和尚は、この猫を漁師達から買ひ取つて寺につれかへり、養つてゐた。さうしてゐる中に子猫も大きくなり、和尚の高義を忘れずによくなつて片時もその傍を離れることなく、ついにはその言葉をさへ聞き分ける程になつた。かうして益々寵愛してゐる中に十年の春秋を経た。或日此の寺の勝手男が縁側でうたゝねして居ると、猫も亦側に居て庭を眺めて居た。その時日頃來なれた隣の猫が來て、伊勢詣りを勧めた。寺の猫はしばらく考へて居たが、やがて彼の猫に向つて、此の間から主人の身の上にか



いつた大事があるから暫くも留守をあけたくないといつて猶何やらさゝやき合つて別れた。寺男は夢の間にこの様を見て奇異な思をしたが、心にいぶかりつゝも、その日は暮れた。

夜も丑滿と覺しき頃、天井の方にけたゝましい音が聞えたので、まだねむらなかつた寺男が早速住持を呼び起し、手燭をともして行つて見たが、夜中ではあり、高い天井の上なので仕方なく夜を明かした。尙不思議なことには、四五日前から此の寺に来て宿つてゐる雲水坊主があつたが、此の騒ぎにも起きてこないので行つて覗いて見るとその姿が見えなかつた。

さて夜が明けたので再び本堂に行つて見ると天井から夥しい生血が流れ出て居た。仔細は分らないけれどもまづ近所の人にも知らせ、燈をともして天井を調べて見ると、彼の猫は朱に染つて倒れて居り、傍に隣の猫も疵を受けて息絶えつゝになつてゐた。又三四尺を隔てた所に二尺ばかりの古ねずみの、毛は針の様になつたのが、彼の旅僧の衣を纏つて、之も血にそまつて倒れて居た。これは古ねづみが旅僧に化けて来て住持を食はうとしたのを飼猫が其の難をすくつたのである。隣の猫も助太刀に來たのである。これを見て非常に感じ且つ悲しんだ和尚は、猫を寺の傍に厚く葬り、塚を築いて回向した。又彼のねづみは人々が寄り集つて棒で打ち殺し海に捨て様としてかついで行つた所が、オダガヤとキンスとの間に來ると急に重くなつて動かなくなつたので皆其儘にしてかへつた。然るにその夜、その鼠が和尚の夢に現れて、若し自分

を祀つてくれたら永く此の地の漁業の守りとなるといつたので、早速和尚はこのことを村人に告げ、鼠を擔ひかへつて猫のほとりに埋めて法事をした。

此の後、この塚に祈つて漁に出ると果して大漁があつたといふ。又近頃まで鯖尾の松といつて塚のしるしに植ゑた松があつて、枝葉も茂り航海者の目標となつて居たが、三十年程前に朽ちて臥れ、今は其の松もなくなつて、義猫の塚のみ畑の中に木のしるしを残して淋しく存するのみである。(松井せい)

### ○ ジョウサイ塚

(棒原郡地頭方村)

地頭方字蒲ヶ原(谷)の畑中にある。圓形で高さ數尺あり、雜草が繁茂してゐる。昔ジョウサイと云ふ六部が此處に來て、「我は此處で佛になるのであるから埋めてくれよ」と云つて生きながら土中に埋められた。村人は憐んで、同所の北方の谷間から水を汲んで來て竹の樋を地中に通じ交る水を入れてやると、七日許りは地中から鉦の音が聞えたといふ。其の泉を今でもジョウサイ井戸といひ、どんな旱魃にも水のかれる事がない。直徑は二間餘で畑よりは一間も高くて圓形である。(萩原みな)



## ○ 一 音 塚

(榛原郡中川根村上長尾)

智満寺何代かの和尚に一音と云ふ人があつた。其の和尚の住職時代に、寺の門前の家から出た火が十數戸を焼いた。

其の火事の爲大伽藍のお寺も灰燼に歸してしましたが、非常な困難をして漸くにして寺の再建をした。そして其の和尚が定命盡きて死ぬ時に、村人に對して「私は火事の爲めに非常な苦勞をした。火事は恐ろしいものであると言ふ事をしみじみ感じたから、私を村中見える一番高い所へ葬つて下さい。さうすれば私の墓の見える限り、火事の起らない様にしてやる。」と遺言をした。村人は遺言どほりお寺の傍の村中よく見える高い所に葬つた。

それから百數年を経て今日に至るが、其の村には火事が起らない。村人はこれを徳として數年前、立派な碑を建て、一音塚と名付けた。(小澤吉枝)

## ○ ホ ン ド 様

(小笠郡比木村)

五百年ばかり前、比木村字梶ヶ谷に國藏コクザウといふ家があつて老夫婦住んでゐたが、この夫婦に

子供が無かつたので、大いに悲觀して、盆の十六日に白装束で山に登り、村人に夫婦共に生埋めにして貰つた。鉦が止んだら埋めてくれと云つて二人は穴に入った。七日七夜念佛のかねが鳴り續けてゐたと云ふ。そして鉦が聞えなくなつたので村人はこの二人を埋めた。そして男は男の人の腰から下の病を治し、女は女の腰から下の病を治すと言つたさうである。

之を祀つて、今でも盆の十六日は賑ひ、特に女の拜する者が多い。國藏といふ家では貰ひ子が後をついで今に及んでゐる。(本多みち)

## ○ 千 人 塚

(小笠郡土方村)

土方村下土方の北部にあつて、天正九年高天神の落城の時に、首級七百餘を集めて埋めた所と云ふ。(野ヶ山さん、青野久子)

## ○ 首 塚

(小笠郡土方村)

土方村の平塚といふ處に首塚といつて一本の松が立ち、夜は青い幽霊火が出ると騒がれた處がある。昔此處は斷頭場であつたと云ふ。此松にさはる事を忌んで誰も手を付ける者がない。

(野ヶ山さん、青野久子)



○業因塚

(小笠郡佐東村)

佐東村中方にある。聞く所によると、昔一人の武士が何處からともなく現れ、この川の堤に座して一心に修業し、風雨の日も一日も休む事がなかつた。爲に、とうとう砂や木の葉に埋められてしまった。その當時附近の木を伐ると、埋つた武士の靈が怒つていろいろな災をした。そこで僧を頼んで供養し、堂を建て、祀つたと云ふ事である。(青野久子)

○生命塚

(小笠郡横須賀町)

横須賀町沖之須の西方に大濱といふ處があり、そこに生命塚といつて一つの石が立つて居る。疱瘡が流行して來た時、その塚の周圍にある石を拾つて來て祭るとその病に患らないと云はれてゐる。その廻りの石は皆赤い小石許りと云ふ事である。(野ヶ山ぎん 青野久子)

○十九首

(小笠郡掛川町)

徳川時代に、今の十九首(掛川町十九首區)のあたりで戦争があり、首を十九取つた。その首は十九首の成田山の西にある小さな塚の中にいけてあるといふ。その塚に手をつけるとたゞ

ると言はれて、誰も手をつけない。

首を十九いけてあるので十九首と言ふのだと。

今ではたいいの人が十九し、ようと言ふ。でも字としては十九し、ゆと讀むのが本當だらう。

(土屋櫻)

○蛇塚

(磐田郡菩提村)

此の村の南にある。或年大いなる山火事があつて、一匹の蛇が焼け死んだ。それから數年経つた。或日、蛇がある人の夢枕に立つて祀つてくれと云つた。それから原へ蛇塚を作り、よく祀つてやると、色々な頼み事を聞いてくれて、信仰する人も多くなつた。(鈴木さし)

○雅兒塚

(引佐郡三ヶ日町)

鳳來山(三遠國境赤石支脈の一高峰、扇山とも書く。鳳來山とは、三河の鳳來山に對して此の名ありと云ふ)に幡教寺なる天臺の巨刹があつた。(今の眞言宗大福寺は此の寺を移せるものなり)開基は、教待和尚とて、當時の名僧知識であり、其の大徳を慕ひ教を乞ひ、弟子となるものが非常に多かつた。或日、若冠にして、剃髮せざりし一人の弟子、暴風雨の間に、天狗



の爲に浚はれ行衛を失つた。一山の僧、導ね求めたけれどその甲斐がなかつた。が、其の後數日を経て、寺より數丁の頂に死屍を發見した。依てこゝに塔一基を建て、弔ひ、人呼んで雅兒塚と言ふ。今尙山頂に存する寶篋塔がこれであると傳へられる。(堀川てる子)

○ 矢 塚

(引佐郡三ヶ日町只木)

只木は、大江山の酒吞童子を退治して有名なる源頼光の家來、卜部の季武の居住地であるといふことであるが、今に畑中に三畝歩ばかりに古い石垣の跡があり、これがその屋敷跡であるといふことである。東西三間、南北一間餘の塚がある。これは矢塚と云ひ、昔から此塚に上ると瘡をふるふと云ふので、里人は近よらない。六郎季武墳墓であると云ふので、一には季武塚と云はれて居る。(山本ふみ)

○ 琉 球 塚

(濱松市)

平田西見寺に在り、寶永七年琉球聘使が江戸へ行く途中濱松驛に宿し、病にかゝつて死んだので西見寺に葬つた。それを琉球塚といふ。(河原やす子)

○ 開 山 塚

(濱松市)

砂山新豊院境内に在る。新豊院は普濟寺末で普濟寺五世華藏が開き後康正元年此所に入定した。其所を開山塚といふ。( )

○ 戒 壇 塚

(濱松市)

鴨江寺仁王門の西にある。昔此の寺は、天臺宗であつて、戒壇を起したので山法師これを聞いてとがめた。然し、寺の方が聞入れないのでとう／＼軍が始まつた。そしてついに鴨江寺が負けて了つた。そして戒壇の品々を取り堀りうづめたのがこの塚だと言ふ。(河原やす子)

○ 戒 壇 塚

(濱松市)

鴨江の觀音様より西へ二丁程いつた裁判所の裏にある塚である。之は源頼光が鴨江の觀音様の戒壇を起さうとして、京にその許を請はうとしたが、比叡山の僧達が之をこぼんで防げたので頼光は怒つて噴死した。そこで村人は、頼光とその器具とを共にうめてしまった。それから戒壇塚と世の人が言ふ様になつたといふ。(金原せつ)



○ 御 臺 塚

(濱 松 市)

今の八幡町に在る。昔永祿十一年飯尾豊前守乘龍の後室、引馬の城に歸られた。家康より後藤太郎左衛門、松下與衛門を遣はして「城を明け渡したなら、扶持し參らせ家の方もすべてよいやうに計つてやる」と言つたが後室は之を聞き入れなかつた。

極月の末の四日の夜鹽市口より切出で、戦つたけれど、家康方は數多の軍勢でとう／＼二三の丸も攻め破られ味方の者は残り少なくなつて了つた。後室も侍女も残らず一つ所で討死して了つた。その討死の場所を御臺塚といふ。(河原やす子)

○ 狐 塚

(濱 松 市)

寺島の畑の中にある塚なり。(河原やす子)

○ 大名塚と馬塚

(濱 松 市)

濱松犀ヶ崖の北に二つの塚がならんでゐる。一方を大名塚、他を馬塚と云ふ。此の塚の土をとると病氣にかゝつたり、色々の災難があるとて百姓は恐れて今では誰も手をつけぬ。そして

この邊の畑を大名塚の畑と呼んでゐる。(本多みち)

○ 十 三 塚

(濱名郡伊佐見村)

古人見區字十三塚は東西に十三の塚が並んで居て、これに直角に六個の塚がある。十三、六ツ塚と云ふ。昔十三人の武士と六人の追つて來た武士とが此の土地で戦つた。十三人をたふして後、逃れんとしたけれども、後には(三方原)敵があり、前は一たいの湖水、逃げるに道なくて、敵をたふした上は望はないと云つて自害したと云ふ。以來地名となつた。此塚は崇りがあつて、人が死ぬ、傳染病を病む等、又この塚を壊して一家死滅し或は主なる人(長男)が死す等の崇りを受けることがあつて、後世大いに怖れた。今は十三塚の東部のものだけ二個と、六塚の南端の最大なるものが一個残るだけで、六塚の残つてゐる最大なる塚の上に方泉坊と云ふ小さな祠がある。紺屋と云ふ家だけこの方泉坊を祀る。昔この一家が死滅せんとした事があつたと云ふ話だ。(野島のぶ、野田はつゑ)

○ 護 摩 壇

(志太郡青島町)

志太郡青島町内の瀬戸新屋字天ヶ谷、水上字島越、南新屋字曲り山、池廻り、山廻り等七ヶ



所に護摩壇があつたとの事である。徑三四間饅頭形に築かれたのだが、今は大方畑に開墾せられ、其の形を残すものは僅か一箇所であるといふがそれさへも其の形ははつきりとしてゐないといふ事である。

其の護摩壇の由来といふのはかうであると。

昔水上村といつて東は南新屋西は烏帽子山瀬戸新屋六地藏のあたり、周程二十六町餘りはいつも夏になると大井川の水が溢れて一面の太洋となりわづらはされた。しかもこの所は木町から東光寺へ出る最も大切な道であつて、旅人は皆惱まされたがどうする事も出来なかつた。所が諸國を行脚されてゐた一人の僧侶が、こゝに来て其の水をひかせて旅人を通させようとされて護摩をたかれたので、これによつて水はたちまちのうちにひいてしまつた。その爲に前にのべた七ヶ所の護摩壇が設けられたのであると。

又これと同じことで他の傳説がある。

昔この地方が夏になると一面池になつてしまつた。其の池の中には毒蛇が住んでゐて其の地方の人々をなやましたので里の人は困つてゐた。所が宇陀上人がこの地方にまはつて來られたときに、之を聞いてどうかしてその毒蛇を退治したいものだと思はれ、其の末に前の七ヶ

所の山上即池の廻りとなる所に壇を築き不動尊の像を安置し護摩をたいて佛に祈り其の池の水をすつかり干あげてしまつたのである。所が其の毒蛇は悪鬼に化して藤枝の鬼岩寺にとんで行つたといふ。そこで水干不動と名づけて萬福寺を此處に建て奉安した。前の七つの護摩壇は宇陀上人の護摩をたかれた所であると。(杉原ふみ)

## 2 墓

○ (沼津市下香貫)

沼津市下香貫奈良橋某の家には、古い墓があつて次の様な話がある。年代は不詳であるが、或高貴な女人のお方が今の沼津市外静浦村馬込の濱に流れ流れて着いた。その地の人々が米を差上げると、そのお方は「之がコマゴメか」と仰せられ、以來馬込の地名が起つたと云はれる。

處が當時奈良橋家の祖先が此の土地の名主をしてゐたので其のお方は奈良橋家の寄寓者となつた。此の方は只人でないと云ふ事を知つた一統の者、村人は大層尊敬してゐた。處がある日小豆の莢で目をついて失明された。其の後あかめ芋を食して病篤くなり、惜まれつゝたうく世を去られた。今ある墓は此の方のものと云はれる。



家人の言傳へによれば奈良橋家ではあかめ芋を食はない、又その墓所を開かないといふ事になつてゐる。尙この墓を五輪さんと云ひ往時は濠をめぐらし、その濠は七十年程前までは殘存してゐたとの事である。(岡林よしゑ)

○ 蓮光寺前のゴゼ

(沼津市)

天正頃の話であるが、松平家の侍婢に會津某があつた。これが急に盲目になつたので、非常に不自由を感じると同時に、自分と同様な境遇にある者を救つてやりたいと思ひたち、かねて辨へて居た處の三味線を教へようと決心して、松平公が後の暮しに不自由な様にと與へて呉れた屋敷に、子供の盲を集めて養成した。ゴゼとは、今は極く少ないが、三味を手にして國々を巡る女の人のことである。

會津侍婢の墓は眞樂寺にある。天正十一年正月二十日に歿した。(岡林よしゑ)

○ 護良親王の墓

(庵原郡高部村)

元弘三年、楠木正成が、後醍醐天皇を守護して、駿河路に行幸し給ふ、と聞いた其の臣の渡邊右衛門尉勇は、大内村まで御跡を慕つて來たのに、帝及楠公は既に何れへか立除き給ひし後

だつたので、遂に同村に止つて、其後能島村を開拓して茲に移り住んで居た。この頃、逆賊足利直義家臣淵部伊賀守に命じ、相州鎌倉に於て、畏れ多くも大塔宮を害し奉る。

能島でこれ聞いた渡邊右衛門尉勇は、其の所爲惡みても亦餘ありとて大いに憤り、鎌倉に馳向はうと思つて、駿河國庵原郡鈴木島、逢始川まで來た時に、向ふから一人の婦人が、非常に愁傷の態にて、急ぎ來るのに遇つた。服装がこの邊の人達とは違ふので、勇は不思議に思つて其のわけをたづねると、婦人は落涙して、自分は大塔の宮の奥方なる事、宮の首を奉守して逃げ行く途中である事などをつげる。勇はこれをきいて東行を止め、宮の奥方、南の御方と共に、お首を奉守して能島に歸る途中、高橋村に於て、文右衛門等と落合つたので、こゝを逢南所と名付けた。現今はこれがなまつて里人は「ヤナンジョー」といふ。

而して、南のお方、勇、文右衛門等が相談して、泪と共に宮のお首を大内村の内裏山に納め奉る。今も尙五輪の陵墓がある。南の方は宮のお首を守りて共にこゝに住んでゐられたけれども、遂にこゝでなくなられた。

親王のお墓地は現今、深澤氏の所有せる地であつて、同氏は年來この發掘に力めてゐるけれども、途中まで掘ると異様な物音生じ、めまひがして、何如にしてもこれを掘出す事が出來得ないと。



又菊の御紋章のついた位碑とか、刀鏡等が地中にうもれゐるを發見し之を採掘したと云ふ。

(大木あき)

○ 野 郎 の 墓

(安倍郡服織村)

薬科川と安倍川との落合ふ所の川原芝の間を野郎島と云ふ。昔、歌舞伎に妓女を入れない規則があつて年の少い男の人を見張りさせた。これを野郎といふ。その頃男をもて遊ぶ事が多かつたので、妓女を入れないで野郎を集めて度々歌舞伎を興行したが一時男色の事から争ひが起きて野郎を殺した。その墓が此處にある。それからこのあたりで歌舞伎が絶えたと云ふ。

(石上美代子)

○ 尼 ヶ 島

(志太郡青島町)

大字稻川に尼ヶ島といつて、桓武天皇の皇后宮のお墓がある、と云はれる處がある。昔は石碑の傍に方一間許りの宮があつて、總髮婦人の木像が納めてあり、「白山様」といつて毎年三月祭典が行はれてゐたと云ふ事である。ところが明治十七年暴風雨の際倒壊して御神休を何處かへ紛失して、今は只宮跡の礎石のみ残り、其傍に石で作つた一小祠が建てられてある。墓石

は昔からのまゝだと云ふ。墓面には「桓武天皇后之墓所」と刻してあるといふ事である。これについて傳説には、昔、此處に住んで居たところの者は森岡廣右衛門外僅かに五六人であつた。平安朝の頃のこと、桓武天皇の皇后様が、故あつて東國にお下りなされた時暴風雨のために志太郡の南の方の海岸に漂着された。丁度其時廣右衛門は其地に行つて居たので、皇后様の爲に大變働き、お助けしたとの事である。

後幾年かして皇后様は遠江國豊田郡上野に於て崩ぜられたのである。廣右衛門はこれを悲しみ奉り、その頭髮を請い受けて自分の住んで居る地へお納めしたのであつた。

これによつて尼ヶ島の名が起つたと云ふ。(杉原ふみ)

○ 川 原 の 墓

(榛原郡萩間村白井)

よくわからないが文政の頃の出来事だといふ事である。

白井の榛地淺次郎氏の隣家の屋敷は、さゝやかな寺、とは名ばかりの、毎日托鉢をしなければ生活の出来ない程の貧乏寺だつたさうである。その寺の隣には今は田圃になつて居るが、一人の木挽が住んで居た。その木挽の家もほんの其の日暮しの貧乏家で、十二三になる男の子とたつた二人暮しであつた。



或日その木挽は、子供を一人留守居させて金谷の方へ仕事に行つた。子供は大變おとなしい子であつたが、幾日経つても父が歸つて来ないし、腹はへつて来るし、もうとても我慢が出来なくなつて、とう／＼隣の寺へ御飯盗みに入つた。

すると運悪くその和尚さんが托鉢から歸つて来たので逃げ出さうとする、子供は見つかつてしまつたのである。

その翌日和尚さんも金谷の方へ托鉢に行つて、丁度木挽に會つたので昨日の事を話すと、その木挽は非常に驚いて直様自分の家へ飛んで歸つて来た。

すると子供は父の大切な道具をいぢつて居たので、尙更腹をたてゝがみ／＼どなつた。子供は驚いて逃げ出した。すると後を追つて行つて落合橋の處で漸く追付いたので橋から力まかせにつき落した。川には幸ひ水がなかつたので子供は復逃げ出さうとした。木挽は今度は川へ下りて行つて其處の石を矢鱈に投げつけて可愛想にその子供を叩き殺してしまつた。

其の時悲鳴を聞いて駆付けた人達もどうする事も出来なかつた。

子供を見ると血まみれになつてもう氣息奄々として居た。

その形相は物凄く、集まつて居た人達を恐しい恨みの眼で睨みつけて居た。そして死んで行つた。

それから二三日たつて、病人でもないのころりと死んだ人が二人もあつた。占つて貰ふと子供を助けてやらなかつた祟りだと云はれた。

又その橋の邊には、毎夜々々男の子の泣聲が、何時も同じ時刻に聞えるといふ噂が立つたので、皆恐しがつて其の河原へ一つの墓を建て、其の子を供養してやつた。

それ以來其の様な事もなくなつたさうである。墓は今も其のまゝ残つて居て誰が上るか、花や線香がいつも絶えた事はないと言はれて居る。(原木すづ)

### ○ 比丘尼墓

(榛原郡萩間村東萩間)

昔智光院に僧と比丘尼の夫婦が居つた。

どうした事か其の僧が發狂して暴れ出したので、村人は非常に困つて遂に山へ誘ひ出して殺してしまつた。

處が比丘尼がその事を知つて大いに憤慨し、お上に訴へ様としたので僧を殺した人達は驚いて又其の比丘尼を捕へて生き埋めにした。比丘尼は「七代たゝるからさう思へ」と言つたといふことであるが、それ以來その人々の家に何かたゞりがあるので、参照權現様を建て、祀つたのである。



之が比丘尼墓といふのである。(原木すづ)

○のんべさま

(磐田郡敷地村)

袋井の南の方に馬伏塚といふお城のあとがある。

今から三百五十年ばかり前、天正二年六月今川氏の軍勢が攻めよせた。このお城を守つてゐた大將は職田氏の一族で、野邊越後守當信といつた。敵は多勢で遂に當信は矢に當つて戦死した。つゞいて長男當公も十五歳で花々しく戦死した。當信の夫人明子は残る二人の子供と共に兵士に守られ城中にあつたが、食糧攻めにあひ、家來のすゝめにより僅かな家來をつれ子供と共に逃げ出した。當信と當公との髪の毛の入つた箱を持つて。

次の日の朝、或さびしい村の小さなお寺の前に足をひきすりながら一行は到着した。敷地村城林庵の前である。

寺の中からは朝のおつとめで木魚の音がポク／＼と聞えた。

其の時静かな朝風におくられて人馬の音がきこえてきた。

奥方は家來のとめるのもきかず、子供と家來を急がせて尾張に落ちさせた、そして自分ばかりなれたを取つて立ち上り、敵兵と戦つて討死してしまつた。

妙林庵は今の學校のある所にあつた。

奥方の腰かけた石は、今のお宮の鳥居の前にある。野邊當信のお墓は永安寺にある。お墓の中に形のかはつた墓石が三つある。これが當信公と奥方と長男のお墓。

永安寺の本堂の右の方の高い所にのんべさま(野邊様)のお位牌がある。次男は後に野邊越後守當久となつて本能寺で信長と共に討死した。

奥方のお持ちになつた薙刀は永安寺の寶物となつてゐる。(兼松弘子)





## 五、崇と怨靈妖怪

一一八

### 1 崇

○

(賀茂郡中川村)

障子山と云ふ山があるが、そこに、障子山と云ふ人が戦の時隠れたと云はれる穴があつた。現在は埋まつてしまつた。そこに白い旗が立つて居るのを見た人は、三年の中に死んで仕舞ふと云はれてゐる。今でもその山は難山と云はれ、木は大きくなつたが買ふ人がなく、その山を切つた家には災難があり、若し家にない場合には、その木を積んだ船や何かに悪いことがあると云はれてゐる。(土屋みどり)

### ○ 岡山のみかん松の話

(田方郡伊東町)

岡山のあさひとか言ふ所に、大きい、密柑の木が一本あつたつてさ。

「その木へ觸ると、祟りがあつて、觸つた人が病む。」と皆が言つてゐた。其處はもや(たき木)が澤山あり、皆とりに行きたい所だつたけれど、恐しくて行く人があまり多くなかつた。或日、一人の少年が、そのみかんの木のみかんをとつて食べた。家へ歸るとその子は病氣になつて、死にさうになつた。お母さんは心配して、いろ／＼たづね、たう／＼みかんをたべた事が知れてしまつた。そこで早速朝日の山守の山口某にたのんで、わび状を山にそなへた。わび状をあげるとその子の病氣は忽ちなほつた。



わび状

その山の、みかんの木には、天狗がゐたさうな。

何がわび誓だ お主は天狗

淨の池では、お湯のいけではありやせない。(伊東音頭より)

(尾崎敏子)

○

(志太郡大富村)



昔お弘法様が諸國を巡り歩かれた。或時、一軒の家に寄つて水を貰はうとしたが、其家の人はみな慾深だつたから嘘をついて追返した。お弘法様は仕方なく次の家に行つた。此の家には顔の醜い、けれ共大變親切な下女が居た。お弘法様の言ふ事を聞いて直ぐお水を上げた。お弘法様は大層およろこびなされて、其下女に一枚の雑巾を與へ、「毎朝その雑巾で顔をふきなさい」と言はれた。下女がその通りにすると、不思議や、日増に顔が綺麗になつて來た。それと反對に水を與へてくれなかつた慾深い人は、話する毎に口から蝦蟇が飛び出した。これはあまり慾深なためその罰としてお弘法様がさうなされたのだと云ふ。(鈴木美代)

○ (小笠郡三濱村)

昔ある處にお坊様が托鉢に來た。其家のおかみさんが機を織つてゐたが、下るのが世話だつたので「お通りなさい」と云つて斷つた。仕方なく坊様は歸つて行つたが、門口の所で一つの帯を拾つて、これはお前の家の物ではないかと言つた。すると慾の深いお母さんは、これは私の子の帯ですと云つて取りに行つた。すると其帯は蛇になつて首に巻きついたと云ふ。

(松下きん)

○ (小笠郡三濱村)

昔或女の人が機を織つてゐると、お坊様が來た。機から下りて色々ともてなしてやつたら大變に喜んで、縦糸さへかければ横糸は幾らでも出てくるといふくだ(箴)を呉れたさうである。

(松下きん)

○ (小笠郡三濱村)

小笠郡の三澤と云ふ所に、お坊様が托鉢に來た。或家で栗をお盆にのせて出した。お坊様は大變喜び「良くかうしてくれた。その代りにこの栗の木に、一年に二回ならしてやらう」と言つた。その爲、今でも三澤には、一年に二回なる栗の木があると云ふ。その坊様は弘法大師であつたと云ふ。(松下きん)

○ 餅搗をせぬ家 ✓

(磐田郡天龍村天龍)

昔或家で、餅搗きをして居た時乞食が來た。しかし忙しかつた爲何も呉れてやらなかつた。すると乞食は、いちはやく自分の小指を食ひ切り、臼の中に投げ入れた。けれど餅つきをして



わた人はそれを知らず、続けて搗いてゐた。が、搗けば搗く程、餅は血によつてか赤くなる。それから後は何時搗いても赤くなるので家では搗かないといふことである。(鎌田まつゐ)

## 2 病 餅 搗き 田

### ○ や み 田

(富士郡富士根村)

一部落の田に必ず一つ二つはある。この田には石で作つた小さな祠のやうなものが祀つてあるからすぐにわかる。この田を作つたり、或は作らないまでも作ると約束したりしても、死ぬか、或は非常に重い病氣にその一家がなやまされる、と云ふので非常にきはれて居る。

二ヶ月程前にも、やみ田を作ると云ふ約束をした人が、亡くなつたので、これは確にやみ田のたゞりであると村の人々は一層これをきらつて居る。(小長谷律子)

### ○

(富士郡富岡村淀師)

私共の近所に「やみ田」と云ふ田がある。この田を作れば必ず其家の主人か誰かゞきつと病氣になる不思議な田である。

年代人物もわからないが、昔、殿様がそこに、深い池のやうな牢を造へて、罪人(極く些細なる罪、又は罪なき人等までも)を入れて生殺にした處だと云ふが、確なことはわからない。

(川島綾子)

### ○

(駿東郡清水村)

伏見と新宿の境から南下する道と、八幡から来る路との出會はうとする地にある田を、病み田と云ふ。此處を持つ者は必ず病氣になると云ふので、さう呼ばれて居る、この事を知らない或人が之を求めて宅地にしたが間もなく大病にかゝつて危く一命をとられようとした。處がこれを聞いた。頑固一点張の村人が笑つて自分の所有にしたがこれも同様、以前非常に健康だつた人が大病人となつて、この田を持つてゐる間病み續けた。此田は昔から此の不思議な現象を續けて來たのださうだ。

昔、この田の前を流れる堀に首が流れて來た。それを充分な供養も施さずに此處に埋めたのださうで、其靈のする業だといふ。この首のお祀りすることによつて、難を避け得ると云ふ事を聞いた人が、之を行ふとそのたゞりが無くなつた。(山本よしゑ)



## ○ 万 法 師

(榛原郡萩間村)

丸尾原へ上る御相談坂の上り口に一寸した橋がある。其の手前から左へはいると遠州七不思議の一なる子生石がある。

この橋を越して右手の谷へはいる道があつて、それを少し行つた所に一ヶ所誰も作るのを忌む田がある。其の田を作ると家内の者に病人が出来るとか怪我人の出来るとか、何かしら禍があると云ふのである。従つてこの田は、恐れを知らぬ者から者へと渡り渡つて、作り手が轉々たる有様である。この田の爲に家内の者殆ど病人となり、生死の程も分らぬ位に苦しんだ或家もある。人々はかゝる事を見又は聞きして益々恐を強めた次第である。

これに就いて古老は語る。

西萩間宇原平に一人の法師があつた。人よんで萬法師といふ。

已の所有する土地を見廻り眺むるを以て無上の娛みとし、従つて彼がその所有地に對する執着心は随分旺なるものであつた。

其土地といふのは例の田の事である。

處が法師病を得て命遂に旦夕に逼つた。其の時遺言して曰く

「俺の死体は、俺の地所のよく見える所へ埋めてくれ」

よつて其の田の西側なる小高い山の麓へしかも田の方を向けて埋めたさうだ。

それ程に思つた田の事であるから何のゆかりもない人に手をつけられるのは非常に無念なことで、此一念が残つて今に至るも禍するのだと。現在は小さな祠が建つてをりお詣りする者も相當あると見えて幟等も絶えず二三本は立つてゐる。

又其の祠の側の木を切れば其の人は必ず怪我するとも云はれてゐる。(原木すづ)

## 3 怨 靈、妖 怪

## ○ どんどん焼と白坊主

(富士郡芝富村)

長貫では以前から正月にどんどん焼をやつてゐない。それは昔、どんどん焼をしてゐると白鳥山から白坊主が「ほーい〜」としきりに呼ぶので、氣味悪くなつてやめてしまつた。その次の年に又どんどん焼をはじめると同じ様に白坊主が呼ぶので、それ以來この行事は取止めてしまふ事にした。(佐野あき)



## ○ 蚊 と ん ぼ

(静岡市)

夏の夜の蚊とんぼは、往年岩井屋と云ふ蕎麥屋で自害した、臨濟寺の稚兒、由井正雪の亡念であると云ふ。これは静岡以外に居ない虫だといふ。(彦根あい)

○

(周智郡三倉村)

三倉村に柳屋といふ農家がある。近年主人仙藏さんは死んで、今、孫さんが家をやつて居る。

その仙藏さんのお父さんやお母さんは仙藏さんが七つの時死んでしまった。間もなく、或夏の夕方、その家の裏の井戸に水を汲みにいつた近處のおかみさんがみつけたのであるが、その井戸の側の南天の木の蔭から、白装束の婦人が出て、柳屋へどんどん入つて行き、佛壇の前で消えた。「幼い子供を残して死んだそのお母さんが子供の様子を見に來ただらうと云はれる。(鈴木とし)

## ○ 白 羽 火

(磐田郡掛塚町)

明治初年に大變不思議な火が、掛塚白羽の或家から出て大變その近傍の人達を驚かした。それは何でも、最初にはポーツと大きな火が現れるのだが、その火がだん／＼に二つ四つと云ふやうに分れて、その家を取まいて、丁度魂がまよつたやうに、うろ／＼して、しばらくすると皆ふわり／＼と上り途中へ行く／＼と消えてなくなるのだといふ。そんな事が毎夜／＼繰返されたので、人々の度膽を抜いたのも無理もない。父の話によると、私の祖母もそれを見た一人ださうだ。その不思議な火の事を、人々は白羽火と云つて居る。その由來はかうだ。

昔白羽に或金持があつて、その家に一人の子守が雇はれてゐた。その子守が或日の事、主人の子を負うて遊んでゐたが、井戸の中へ落ちてしまつた。それから大騒ぎで子供を出したが、もうその時はことされてゐた。そこでその主人は怒り、子守に「どうしてもこの子を生き還せ」と云ふ。子守は出来ない主人の命令に、親の所へ行つて詫びて貰ふやうにした。さて子守の親が来て、頭を地にすり付けてお詫びしても主人はどうしてもきかない。そこでその親も怒つたあまり、子守を、子供の死んだ井戸へ投げ込み、子守に向つて「性があらば七代たゝれ」と云つた。そしてその子守が死んだ夜からその井戸から、例の火が出たのだといふ。それからその家の人達は死に絶へてしまつたが、その家の跡は、今日では某氏の屋敷になつて居る。

(鈴木きよ)



## ○ 八十松火

(濱名郡神久呂村神ヶ谷)

神久呂村神ヶ谷には昔から八十松なる怪火が出現して人を驚かしてゐる。而も今もつて時に現はれると云はれてゐる。

神ヶ谷神田原の水神様のお池から源を發して、神ヶ谷の東の谷を南流して入野村早土の總氏神様と片葉の葦で有名な一本松の間に出て、それから堀留に通ずる運河と佐鳴湖に通ずる川と合流して、濱名湖に注いでゐる清流がある。これを同地では只「川」と呼んでゐる。神ヶ谷本村の南方の田中に「お休み場」といふ處がある。その東方は高臺地で墓地となつてゐる。この間をその清流が流れてゐる故、墓地に通ずる橋を中橋ナカンバシとよんでゐる。土地の人の恐れてゐるその八十松火は此の川の下の方から現れて、以前はこの中橋迄であつたが、現今ではすつと上方まで上つて來ると云ふ。數十年前當地の島村果といふ者が、若い元氣にまかせて其の正体を見届けんものとある夕方お休み場まで出掛けた。當時其處には四人抱へ位の大松が一本あつたのでその大木の根に身をひそめて、怪火の出現を待つてゐたが仲々出ないので歸らうとして、ふと下手の方を見ると、彼方から小さな白い火が動いて來るのが見えた。某は俄かに元氣が出て、「おのれ、正体を見届けて村人を驚かさん」と息を殺して待つてゐた。怪火は川岸を次第

に上に來た。中橋附近に來るや不意に方向を轉じてお休み場の方に眞一文字にとんで來て某との距離約二三間まで來るや、又突然に逆戻りをして下手の方へ走つた。元氣者の島村某もその火が近づいた瞬間には流石に驚き恐れたと見えて、堅く目を閉ぢて急に總身がぞつと冷たくなつた。やがて目を開いた時には附近には火影も見えず、遙か下手の方に走り去つた時であつたから、やつと蘇生の思ひで急ぎ逃げ歸つたと云ふ。現今の古老の間にもその八十松火を見たものが多いと云ふ。この八十松火について次の様な語が残つてゐる。

昔八十松といふ小僧が主人の金を持つて某地に使し、此の川の近傍で遺失したので、小僧は大いに驚き思案にくれた結果遂に主人にその由を正直に物語り、平身低頭以てその罪を謝した。それをきいて主人は大いに怒り叱責したので、小僧は無念遣る方なくて遂に自殺した。その怨靈が夜な夜なこの川の附近に現れて先に失つた金子を探し求めるのである。(本多みち)

## ○ 安松火

(濱名郡芳川村)

今から百二十年程前に、芳川村宇安松に平野と云ふ浪人が住んで居た。その浪人は一人の下男と數人の家來をおいて居た。或夏の夜平野浪人は下男を連れて外出した歸途に、餘り暑かつたので、道ばたの瓜を盗んで食べた。浪人は下男に向つて、この事を決して他言してはならぬ



ぞと厳しく言付けた。そして家に歸つて来たが、平野浪人はその事が氣に掛つてならぬ。何とも氣掛りでならないので遂に其下男を殺して竈の中に其死体を投げ込んでしまった。そして下男の里の母親を呼びよせた。母親はそれを見て非常に悲しがり、又怒つた。「一体お前はどんな事をしてこんなに殺されたのか」と云つて、金火箸でぐいと頭を突き刺し、芳川に持つて行つて、「若し悪い事をして殺されたなら下に流れよ、悪くもなくて殺されたものなら上に流れよ」と云つてどぶんと水に投込んだ。すると頭はぼつかり浮いて、すんすん川上に上つて行つた。母親は非常に怒り悲しみ、「それだけの魂があるならばきつと仇を取れ」と云つて歸つた。それから、毎夜毎夜、鹽程もある大きな火の玉が、ころころと安松の村中を轉り廻つた末、その平野浪人の家へ上つてきて、くるくる廻つて消えるのだつた。村人はそら又出たと云つて棒や双物を持つて追ひまはしたが、ちつともつかまさらへつかまらなかつた。何時も後になり前になりしてころころ轉がつた。

村人はそれから仕方なく祠を作つて、それを祀つた。それが現在も祀つてゐる、じょうど様だと云ふ。その平野家は間もなく瘵れて跡かたもなくなつた。そのじょうど様の宮は餘り大きくはないが、大木が茂りあつてゐて、見るからに寒けのしさうな處である。今でもその社に雨漏りがする様になると、火の玉が出ると云はれてゐる。又このお祭りに、花火や餘興をやらな

いと、安松に悪病が流行すると云つて、村人は毎年花火やら餘興をやると云ふ。(金原せつ)

○ (濱松市)

昔或濱邊の一部落に、大津波が來るとの噂が立つた。併し多くの人々は之を信じなかつた。唯老人はかういつた事をよく信じてゐたので、若者の理窟を排して山へ避難した。若者達は「何そんな事があるものか」と言つて逃げようとしなかつた。所が或晩果して、大津波が來た。そして居残つた者は皆大海原へ運び出されて了つた。

數年は過つた。白い骨が幾つもの波打際に打寄せられた。何の供養もされないで。所がそれから毎夜、海岸でうめき聲がする。これを見届けたものはないが何所からともなく「咽喉が渴いた、水を呉れ」といふ聲が聞えて來る。それで村人達は遂に先に無慚の死を遂げた人々の靈が迷つてゐるのである事に氣附いて、經をあげて貰つたら、其の翌日からは全く聲が無かつたと云ふ。(渡邊はな)

○ (濱松市)

或六部が途中で日が暮れて、宿とても無く途方に暮れて、とぼくと歩いてゐた。ふと見る



と少し行つた山の麓に古ぼけた山寺がある。そこで其所へ泊めて貰ふ事にして、其の門前まで辿り着いたがどうしても、門が開かなかつた。仕方なく一夜を門の屋根の下で過す事にした。すると眞夜中頃其所の門の向ふ側から「ミヨオンミヨオン」と言ふ妙な聲がする。六部はぶる／＼ツとして隙間から、向ふを見ると丁度墓場がある。そしてその中のまだ埋めた許りらしいもれ上つた土の中から、一人の瘦せこけた死人が立つて動き始めると、何所からか赤鬼と青鬼が出て来て、やがてその人をぼり／＼／＼と食べ始めた。六部は餘りの凄さにそのまゝ門に嚙り附いて一夜を明した。そして夜が明けると早速和尚を起して、昨夜の一部始終を話した。和尚も不思議でならなかつた。二人で互に考へてゐる所へ、一人の女が駈け込んで来て「和尚さま／＼昨日埋めて頂いた死人に、着物を着せて上げるのを忘れしました。着物を差上げないと鬼がとつて食ふと云ひますので早速持つて参りました。」と云つた。そこで始めて解つて早速お経を上げて貰ひ着物も佛前に捧げたので、其の夜から鬼も死人も出なかつたさうである。(渡邊はな)

## 六、石 の 話

石

### ○ 大 岩

(賀茂郡中川小杉原字オッコシ)

此の石の附近に瀧があり、木が茂り合つて晝もじめ／＼と一種の臭を發する。此處にある大岩(疊四疊位の大さ)へ毎夜ほろ／＼鍋が天から下ると云はれ、夜分道行く人をこはがらせてゐる。(佐藤久恵)

○

(賀茂郡白濱村)

白濱村板所の野中と云ふところにその石にふれると、おこりをふるふと云ふ石がある。如何なる原因かわからぬ。現在ではそばへ寄る人もなくその近所は荒地となつてゐる。(石原住江)



○ 神 船

(賀茂郡白濱村)

白濱村長田の濱に長く海につき出てゐる岩で、昔事代主命及びその妃伊古奈姫が船で来て、この海岸で上陸し、その船は後波の爲にひつくりかへつて岩となつたものだといふ。如何にも丁度船をふせた様に中は空になつてゐて、波が寄せるとゆれると云ふ。

こゝに横に深い穴がある。これは隣村の稻生村河内までも續いてゐると云はれてゐる。

(石原住江)

○ 鉦 鼓 石

(田方郡伊東町岡)

佛光寺の東一町ばかりの小川に架けた、一枚石の橋で、裏面に龍の彫り物があり、石で叩くと鉦鼓の響がするといふ不思議な石である。(三枝菊江)

○ 頼朝の足跡

(田方郡西豆村)

中村にある。岩の上に足跡がつけられてゐる。頼朝公がこの地に来て敵に追はれて逃げる時この岩を踏んだと云ふ。そして今も此處へ草履を供へる風が残つてゐる。

(山田茂子)

○ 頼朝のまたぎ石

(田方郡土肥村)

南によつた海岸に頼朝のまたぎ石と呼ぶ石があつて大きな足跡の様な凹みがついてゐる。源頼朝が富士山の頂上からこの石までまたいだといはれてゐる。(鈴木康子)

○ 頼朝の腰掛石

(田方郡三島町)

三島大社の東側の處で木立の茂つて居る中に丁度腰掛のやうな石がある。この石は昔頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に居た頃、源家再興の爲、三島明神に丑の刻参りをした。其時に休まれた石であると云ふ。(五味松子)

○ 城山の棒石

(田方郡田中村小室)

城山、俗に棒石山といふ。百二十米の山上から眞直下に六角の棒石が縦に重つて自然に出てくる。これについて昔から言傳へがある。この城山は三方崖で、一方が山續きになつてそこから漸く登られる様に昔はなつてゐた。そこでここに城を立てようとしたのが頼朝だ。この城山の頂上に材木をどん／＼運んだ。ところが城を立てない中にここを他の人に渡さなければなら



なくなつた。そこで頼朝はこの材木を頂山からすべりおとさして「石になれ石になれ！」と叫んだ。すると不思議や忽ち石に變つた。これがこの棒石だと。

今より二十年前位から、この棒石が東京に盛んに出る様になつた。今まで山腹から切出してゐたが、それでは間に合はないので、山上の土をとりつけて上からも切出すことになつた。頂上のは、土をとりつけてみると棒石が横に並んでゐた。頂上の方は横になつてゐて崖の方は縦になつてゐる。これが頼朝が横になつてゐた材木を蹴落して石にした證據だと。(山口とみ)

○ 山宮様の手洗石

(沼津市)

山宮大明神の境内に大きな岩がある。之は奉幣使が遣はせられた時、手洗ひに際して烏帽子を掛けられた處で、烏帽子掛石等ともいはれる。

この山宮様には大變古い壺が六つある。古鏡が蓋になつて、銅針金で綴じてある。其中には檜扇があると云はれてゐる。(岡林よしゑ)

○ 伺ひ石

(沼津市)

沼津市上香貫殿前に道祖神があり、いつも參詣者が絶えない。信者に「伺ひを立て、貰ふ」

と其の御石が非常に恐いものであることを知る。こちらから申上げる事が御考へにあつて居る時には持ち上げると軽くポコツと上るが、然らざる時は容易に上らず、全然上らない時もある。(岡林よしゑ)

○ 子持石

(沼津市)

沼津市出口西部を流れる子持川と云ふ川がある。其傍に子持石がある。昔六部の一人が妊娠中であつたが、其石に腰掛けて樂々と出産したといふ處から此名がある。(岡林よしゑ)

○ 鉾立石

(富士郡大宮町)

淺間神社樓門前の中央にある石を鉾立石と云ふ。毎年四月の始の申の日に淺間神社より山宮へ渡御される時、鉾を立てる石である。(羽柴富貴子)

○ かんく堂の石

(富士郡傳法村)

道傍に、今にも毀れさうになつてゐたかんく堂と云ふ祠があつた。このかんく堂に彼岸の中日にお参りするとどんな病でも癒つてしまつたといふ。この堂を信仰措く能はなかつた村



人達は、どうかこのかん／＼堂を建てなほして立派なお堂にしてさし上げたいと考へてゐた。色々準備していよ／＼その仕事に取りかゝる事になつた……。

かん／＼堂の周囲の地面を堀りかへして地直ししようとして、大勢の雇人を使つて土地を堀つては平にしてゐた。

所が……不思議や、かん／＼堂のすぐ裏手の小高い所から濱石の小さいすべ／＼した石が、一つ堀り出され次に一つ次に二つと……遂に一萬何千と云ふ數が出された。而も、それがたゞの石なら捨ててもするが……その石の各々に經文の字とも思はれるものが、一つに一字づゝ書かれてあつた。

村人達は驚いて、さつそく附近の寺の住職を呼び集めてしらべさせた所、村人達の想像に違はず皆經文の中にある字であつた。

この一萬何千と云ふ石はそのかん／＼堂に今なほ存してゐるとか。(町田つや)

### ○蛙石

(富士郡大宮町羽衣町)

昔或人が夏の夜涼んでゐると、急に天から青い光を放つた物が落ちて來た。びつ／＼して暫くうつ伏せになつてゐた。それからおつ／＼かなびつ／＼くら、それを見ると、蛙の様な形をした石があ

つた。それでそれを蛙石さんと云つて今でも傳はつてゐる。

この石にお参りをして傍を流れる水で眼を洗ふと良くなるさうである。(羽柴富貴子)

### ○蛙石

(富士郡芝富村)

羽鮒山中の逆さ柳のある古池から一丁許り下つた處に、ひき蛙の様な形の石がある。村人達は日照りが續くと、蛇籠を作つて此の石の處まで練り歩き、蛇籠は池に納め、その石を幾度も叩きながら雨乞ひをしたといふ。形の上から、又、蛙は雨を呼ぶ所から面白い石だが、現在は試みられない。(佐野あき)

### ○馬蹄石

(庵原郡高部村)

牛ヶ谷梶原山の頂にあつて、石面に名馬摺墨の蹄跡があると云はれてゐたが、現在は風雨にさらされて見えない。(大木あき)

### ○平石

(庵原郡高部村)

梶原景時、國侍に追はれて、夕日無山の奥深く逃げて行く時に、追ひ來る敵を如何ともする



すべがなく、人馬諸共に麓を向き、山を下ると見せて而も逆に馬を馳せ、遂に、敵をあざむいて山深く逃げ込んだと云はれてゐる。此の時此の場所に平たい大きな石があつた。景時は何心なく此の石に槍を突くと、景時の力が強かつたのか、槍をついた跡が後々迄も残つてゐたといふ。(大木あき)

## ○ 牛 石

(庵原郡高部村)

大内牛ヶ谷の桃林寺を一町計り過ぎた所にある。たゞ普通の石だが牛の形に似てゐるのでいふ。昔石屋がこれを見て「いゝ石だな」と獨語をいひながら、カチーンと一のみ入れた所が血潮がさつとほとばしつて、石屋の顔を紅にそめたので、石屋は驚いて逃げて行つてしまつた。後の祟りがおそろしいといつて、石でお宮を作り、牛石として祀つたといふ。そのお宮も残つてゐる。(大木あき)

## ○ 牛 見 石

(安倍郡千代田村)

北沼上の道白上人の建てた七堂の跡の西南の方にある大石である。上人の使つてゐた牛(社と寺の話参照)が使に出た時に、歸つて來るかどうかを見る爲に其の石の上に上つたから牛見

石と云ふ。(青木きみ、伊良むめ、(原川美江))

## ○ 旗 かけ 石

(志太郡東益津村)

東益津村の山の麓に大きな石が二つ三つある。之は旗かけ石と云つて、徳川家康が甲斐の武田信玄と戦つた時、一時此所によつた所と云はれてゐる。今ではお注連繩を張つてある。

(神尾すゞ)

## ○ 大興寺の子生れ石

(榛原郡萩間村西萩間)

西萩間龍門山大興寺より北に一小丘を越ゆる事數町、そこに澤川が西から東へと流れてゐる。此の右岸に岸壁あり高さ丈餘、壁面に點々として瘤狀の突起がある。

其の直径一尺前後、突起の高さは三四分乃至五六寸。全形は殆ど繭の形をなすもの、或は一方の球は大きく一方は稍小さく恰も瓢の如く美しき形を爲せるもの等がある。而もこれが壁面に一端を現はしてから漸次全形を露出して終には河底に墜落するのである。

言傳へに、この石は大興寺の住職が死するのときを同じくして落つると。故に之を以てその墓石としてゐる。



石は其の僧の徳の厚薄によつて大小の別が自然に備はるといふ。今大興寺の墓地に、應永年中の大徹和尚から爾來二十五世、悉くこの石を以て墓標としてあるのを見ることが出来る。

(原木すず)

(補) 昔、大興寺に學徳すぐれた名僧がゐた。處が其和尚が病寢におそはれて明日をも知らぬ身となつた。皆憂色に包まれて枕邊に集つて居ると、或日小僧がその枕邊に飛込んで来て「和尚さま、大變です石が落ちさうです」と言ふ。和尚は、「ああ、さうか、ではお前にやらう」と言つた。するとこの後は和尚の病は薄紙をはぐ様に日一日と快方に向つて行つた。それに引きかへ、石を貰ひ受けた小僧は目が窪み頬はこけて顔は青ざめて行き、石を貰ひ受けてから三ヶ月目にたうとう亡くなつてしまつた。昔から、和尚が死ぬ度に石が一つづつ落ちたものだが、今墓地に並べてある多くの瓢箪石の中にたつた一つの形の悪いのがある。これがその時の石だつたと言ふ。(萩原みな)

### ○ 八幡山の石

(榛原郡上川根村)

昔、八幡神社のあつた所で、今は帝室林野局出張所の屋敷になつてゐる。その敷地の中に大きな石が二つあつて、どうにも目障りで仕方がない。そこで某所長の時代にその石を埋めたいと思つて人夫を探したが恐ろしがつてやるものがない。やうやう引受けたと思つても故障を申

し出て決行しない。仕方がないのでその時の小使の老人が「わしがやりませう。」と云つて程よい所に石のは入るほどの穴を堀つた。ところが一つの穴が大低出来上る頃に、俄にその大石が穴にころげこんだため、中に居た小使の老人は無残にもその下敷になつた。


悲鳴をきいてかけつけた人達がやうやう救ひ出したが、間もなく死んでしまつた。

現在の小使(死んだ老人の息子)の話によると、穴を石の近くに堀り過ぎたので石が轉げたのではなく、石は外にあつた時のまゝの形で上部を少しばかり土の上に出してゐる。その石の附近に官舎を建てる時、仕事を請負つた親方連中でその後間もなく病氣になつた人が多い等と云つて恐れてゐる。

その老人の兄弟で後にやはり小使をしてゐた老人も、罷めて間もなく八幡山中で縊死を遂げたので、それとも何かの因縁があるかの様に云ふ人もある。(天尾富美子)

### ○ 青塔の五輪石

(周智郡熊切村)

熊切村の山中、青塔山にある。普通の人では見つかからない。山の中に半疊位の平らな所に五輪石  一丈八寸位——が六つある。これは、昔或士族がこの山へ入つて行方不明になつた。これが後世祟つたので、村の人がつくつてあげた物だといふ。もしそれを、旅



人等が持つて行つてどこかへすて、おいても、明朝は必ず元の場所に歸つてゐるといふ。又それが、自身で、真中や端にと位置を代へるといふ。或時はその五リン塔が話をしてゐる様に聞える、と、炭焼をする人や、木挽をする人が話した。(鈴木とし)

○ 歌 岩

(磐田郡敷地村)

敷地牛ヶ鼻に獅子ヶ鼻公園あり、こゝに歌岩(この公園は岩で出来てゐる)といはれる岩がある。往昔弘法大師巡り來り、錫の先を以て歌を彫り付けた岩であると云ひ傳へられる。歌は次の通りである。

世をうしの花見車に法の道ひかれてこゝに廻りきにけり

古は獅子ヶ鼻の山頂南面の岩窟、數十尺の懸崖にあつたが、安政年間大地震の爲に崩れ、今は崖下に横たはつてゐる。そのまゝ雨曠しにしてあるので風化して僅かに其の倂を存するのみである。

傍に衣掛の松がある。

○ み こ 岩

(磐田郡山香村)

福澤にみこ岩といふ岩がある。昔戦争があつて敵の武士が攻めて來た時、一人の神子はその岩かげに隠れてからみこ岩といふ様になつた。

又その時武士が馬に水をくれた處を馬水と云ふ。武士達が福澤から城西村の方へ行く途中、峠で馬の鐵沓がとれたので、鐵沓を打つた處をくつ打ち場と云ふ。(本多みち)

○ 仁 王 岩

(磐田郡山香村)

昔、勝様といふ人が西渡を治めてゐた。その勝様がお金を使ひ過して一段位を下げられた時、西渡で勝様の次の位の人は御室といふ人で、戸口では仁夫といふ人であつた。この事件で戸口では色々相談する爲に、仁夫といふ人が岩の上につつ、法螺の貝を吹き戸口中の人々を集めた。それからその岩を、仁夫(仁王)岩といふとか。(本多みち)

(その勝様が鼠小僧次郎吉に枕元の刀を取つてみよと言つたら、その夜、知らぬ間に刀をとつたと云ふ)

(本多みち)



附 ○金 燈 籠

昔、金井戸ヶ谷(敷地村敷地にあり)の峠さ、それから六町許り南の方と二所に金燈籠といつて大きな金の燈籠が立て、あつて毎夜あかりをつけた。それは、昔は天龍川が今と異ひずつと廣くて敷地の西山のすぐ向ふから西の方へ一面に海の様になつて居たので川を越すのがなか／＼難儀で暗い夜など馴れた船頭でも方角をとりちがへ、船を淺瀬へ乗上たり深い淵へ沈めたりする事がたび／＼あつた。それで川のどこからでもよく見える所へあかりをつけて渡船の目あてにして暗い夜でも川越が出来るやうにした。今でもその金燈籠は残つてゐるさうである。(乗松弘子)

七、地藏、道祖神の話

1 地 藏

○ 手なし地藏

(田方郡三島町)

頼朝が三島大社にお参りに来る時の事、今の手無の處を通ると、一人の美しい女が出てきて跡をつけた。頼朝はそしらぬ顔をして歩いて行つた。それから毎日々々その女の人がついて来たが、何時も頼朝はそんな人にかまはずに居た。ところが或時その人が、頼朝をよびとめて何かと話をしかけた。頼朝は、日頃から人の後をつけて歩いたりしてうるさく思つて居たのでその片腕を斬つてしまつた。すると片腕を斬られた女は手の無いお地藏様となつてしまつた。この時頼朝が刀の血を洗つた川を血川と云ふ。(五味松子)

○ 西町の地藏様

(榛原郡川崎町)



川崎町西町の地藏堂に大きな石の地藏様がある。この地藏様が、今から三十六七年前に、どうしたわけか丸山に埋められて終つた。さうするとその翌年頃から疫病がはやり出して西町中を襲つた。それは熱病であつたが、不思議なことには隣接してゐる字仲町や鹿島などには一人も此患者が出ないで、獨り西町の者のみ殆ど門毎に患者を出し、髪の毛が抜けて終つたり、ひどいことになるで死んで終つた。大變なものだつたさうだ。ところが或夜、或人の夢枕に立つてお地藏様が申されるに、「私を丸山から掘出して祀つて呉れ、ば、熱病はたちまち癒つて終ふだらう」と。早速堀出して今の地藏堂に祀ると、不思議にもさしもはびこつてゐた町内の熱病がばた／＼何處かへ行つて了つたさうである。(海邊春子)

## ○ 椀かせ地藏

(榛原郡川崎町)

細江字矢ノ口にある。昔は側に一老松の洞の出来たものがあつた。膳椀等に不足する者は此の地藏尊に詣で、入用な程を申述べて來ると、翌日其の入用の數程が地藏尊の前に持出されてあつたと云ふ。使用後は又地藏尊の前に持つて行つて返すのが例であつた。故に往古は椀貸地藏とよんでゐたが、或時借りて返さない者があつた爲にその後は貸し出さないとの事である。今は立派な堂も出来、堂前には寛文十年銘の金鼓一口が掛けてある。(萩原みな)

(小笠郡三濱村)

三濱村に有難い地藏様がある。この地藏様の近くの人が、東京に行つてゐたが病で死んだ。此の死んだ知らせの來ない前に地藏様が逆様に立つてゐて知らせたと云ふ。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

どこかの人が人殺しをした。そして焼場の地藏様に頼むのに「おれが人を殺したがどうか人に言はないやうにしてくれ」と。すると地藏様が「おれは言はんでわれ言ふな」と言つた。その人は早速ふれてまはつた。「焼場の地藏様が口をきいたぞ。おれが人を殺したことを言はないやうにしてくれと言ふと、おれは言はんで言ふなと言つた」と。それで其の人の人殺しがすぐわかつてしまつた。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

小供が死ぬと賽の河原に行つて、毎日大勢で石を積んでは遊ぶのだが、そこに鬼が來てくづしてしまふ。すると小供は、つらいと言つて地藏様の袖にたぐりつくつくと云ふ。(松下きん)



(小笠郡三濱村)

今切と云ふ所に地藏様を信仰して居た男の人があつた。その人が「おれの顔が赤くなつたら此所らは泥の海になるから、それを合圖に逃げよ」と地藏様が言つた」と皆に話した。青年達が面白がつて、地藏様の顔を繪具でぬつた。此の人が其の次に参りに行くと、地藏様が眞赤な顔になつて居るので、早速立退いた。そして間も無くその邊は泥の海になつてしまつたと云ふ。

(松下きん)

(磐田郡山香村)

久根鑛山へ行く道ばた(不動澤のすぐ此方)にお地藏様がある。その地藏様は盲の人を祀つたのであつて、目の悪い人がお参りすると、直ぐ癒るといふ。

この地藏様を祀つた由來は、さう古い事ではないと云ふ。落井に一軒の農家があつて、或日道へ麥を干して置いた。そこへ盲人が通りかゝつて、その麥を踏んでしまつた。其の家の人は怒つてその盲人を追つて行つたが、盲目の事だから、遂に左側の崖へ轉がり落ちて死んで了つた。それでその落ちた處へ地藏様を祀つたのだと云ふ。(本多みち)

## ○ 黒 地 藏

(濱 松 市)

昔、曳馬野に、勘右衛門といふ百姓があつた。非常に信仰の深い人であつたが、或日城主様の案内役となつて野口村を通りかゝつた。すると「勘右衛門勘右衛門」と呼ぶ聲が聞える。勘右衛門は振向いたが呼んだ者はない。空耳であるのかと耳をかたむけた時「勘右衛門勘右衛門」といふ聲が又聞えた。「はい」と思はず返事して、道端の稻の根本を見ると、其所から光が射して居る。不思議に思つて城主の許を得て、其所を掘ると、意外にも眞黒い地藏尊が出て來た。日頃信仰の厚い勘右衛門は胸ををどらせながら抱き上げた。何かの深い因縁を感じては、今更ちつとしてゐられず、直に暇を願つて我が家へ歸り壘に供養をした。その夜のこと、地藏尊が夢枕にお立ちになつて、「萬福寺の境内に祀つて貰ひたひ」と望まれた。夜が明ると、勘右衛門は早速住持を訪ねて其の安置を頼み、程なく立派な地藏堂を建てることが出來た。そして勘右衛門の信仰は日一日と深まつて行つた。

それから一年たつた秋の夕暮、勘右衛門にはとんだ心配事が出來た。彼はその日、侍屋敷の前を通つた時、見知らぬ武士に呼び止められた。「折入つて頼みたい事がある。人に知られたくない事だから七日後の夕方、其の方一人で池川の堤へ來てもらひたい」とその武士はいふ。



勘右衛門はうつかり武士と約束してしまつた。然し考へれば考へる程疑はしくもなり、恐しくもなつて来る。若しや試斬りをするのではあるまいか。が後の難儀を思ふと約束も破れない。我なき後を思つては、老父母の悲しみ、妻子の歎きしみ、自分の業が恐しくなつた。ふと暗い心に光がさした。「さうだお地藏様にお願ひしてみよう」彼は急いで野口村にいつて地藏堂に駆け込んだ。さうして地藏尊に我身の無事をお頼みした。

約束の夕方は来た。勘右衛門は最後のいのりをすまして、心安く夕闇迫る池川の堤に向つた。今は生もなく死もなき朗らかな顔に微笑さへた、へて、生ひ茂る尾花を拂ひ、進んで行つた。つと現れた覆面の武士が其の前に来た。「百姓よく参つた。そちの命が所望ぢや」勘右衛門は悪びれず、ピツタリと止つて星あかりに武士の顔を見つめたが、たゞ地藏尊の優しい姿のみが眼に浮んでゐた。「えい」と電光一閃、勘右衛門はどうと倒れた。「よく切れる刀だ」と呟いて武士の姿が消えた。

暁を上げる鐘に勘右衛門はふと我にかへつて、風にゆれる尾花を見上げた。

「あゝこゝは昨夜の堤だ。死んだ筈の自分だが」大聲で叫んではね起きた。「傷がない傷がない」さては、と彼は一散に地藏堂にかけ戻つた。合掌して思はず「あつ」とよろめいた。地藏尊の右肩から左脇にかけて、生々しい刀傷が見えるではないか。しかも鮮血までも流れて居

る。「おゝ、お身代りにお立ち下さつたのだ」勘右衛門は歡喜と感謝に涙の止めようもなかつた。

その萬福寺といふのは今の濱松市野口町にある。(金原せつ)

### ○ おこり地藏

(濱名郡伊佐見村)

古人見區の十三塚の近くにおこり地藏がある。この地藏に障ると瘡を病む。瘡を病んでゐる人はこの地藏を繩で縛ると瘡が落ちる。さうして後繩を解き茄子を供へて祭る。この地の人盆の十四日に精靈詣と云つて朝早くこの地藏に詣でると云ふ。(野島のぶ、野田はつる)

(引佐郡三ヶ日町)

三ヶ日金剛寺前に薬師井戸といふのがあつて、其西方に施餓鬼田といふ寺田がある。或年大變な日旱が続いて、田植が非常に後れて仕舞つたので寺百姓は非常にあせつて居た。が、やがて雨が大降りに降つたので早速田植をしようと田に行つて見ると見事に一夜の中に田植が出来てゐた。何と調べても植ゑた人がない。不思議に思つて居たが、その年の開張の時に見ると、本尊の地藏様の足に泥がついてゐたので、人々、はお地藏様がお田植をしてくれたと云つていよ



いよ信仰する様になつたと云ふ。(山本ふみ)

2 道祖神

○ 岐神

(田方郡伊東町)

伊東町の十字路又は三叉路の片隅には大低男女体の石像が並んでゐる。これが岐神、又其の名を道祖神といふ。子供の神で特に子供の病氣平癒を祈願する神となつて居る。祈願する時、子供は手に長い棒片を持つて此神を圍んで圓陣を作り、一齊に聲を張上げて「セーエのカミサン、〇〇ちゃんの病氣が快くなるやうに」と唄ひながら、岐神の頭を打つ。(三枝菊江)

○

(沼津市)

上香貫殿ノ前の道祖神のお宮に、長さ一尺、太さ(直径)三寸位の石がある。何か伺ひを立て、それがかなへば石は軽く上るが、もしそれがかなはない事だと中々重くてどうしても動かないと云ふ。(野田美津江)

附

○ 火屋の土手

(静岡市)

安倍川の橋から通ずる所の土手で、今一番土手とも云つてゐるのを、昔火矢の土手と云つた。その名前の起りは、昔そこに火屋(火葬場のこと)があつたさうでその名稱がついたと云ふ。ついでこの間まで魚町のお寺にあつた火屋のばあさんが、昔この土手に祀つてあつて、子供が死んで「賽の川原」で石を積んで楽しく遊んで居るのをきつい顔して見て居らつしやる。それで私達が小さい時は火屋の婆さんが來ると云つて威かされたものだつた。(川口富美子)



## 八、屋敷の話

## ○ 伊東氏の館趾

(田方郡伊東町)

親祐の墓から北の方廣さ約八町ばかりの間は伊東氏の館趾である。今は畑となつて原畑と云つてゐるが、その四方に四つの小丘がある。何れも廣さ五六坪で、其名を物見塚、榎木塚、子神塚、堂の上塚と云ふ。

その物見塚に聳ゆる亭々たる老松を物見松と云ふ。(三枝菊江)

## ○ くつ屋敷

(駿東郡浮島村)

浮島村石川の伊藤源右衛門と云ふ人の先祖が、源頼朝の富士の巻狩りの時に馬のくつを作つて上げたので、其の賞として屋敷を貰つた。それが今のくつ屋敷ださうである。(原井美智子)

## ○ 亡魂屋敷

(富士郡田子浦村)

昔、今の五軒屋に吉兵衛さんといふ人があつた。其の頃はまだ行燈を用ひたので、夜になつて薄暗い中に親子が圍爐裡を圍んで居ると、納戸の方でチャカ／＼しながら亡魂が出て來た。子供達が泣きさけぶと「俺は亡魂だから泣かなくてもよい。」等といふ。側へ行くとすつと消えてしまひ、又離れると姿を表はした。こんな事が毎晩続いたので遂に其の吉兵衛さんの事を亡魂吉兵衛とよぶ様になつたといふ。もう其の家もなくなり、其のすつと遠い子孫だけがまだ五軒屋に暮して居ると云ふ。(望月貞子)

## ○ 金澤長者

(富士郡芝富村)

砂ヶ原の金澤と呼ばれる所に、長者の屋敷庭園跡がある。此の長者の妻は日明上人の叔母に當る方といはれ、長者の建てた寺(妙樂寺の前身)に上人も足跡をとゞめられ、その開山となつてゐる。

長者は水をとるのに、芝川を越えた向ふの岩から落つる清水を、赤銅の桶でとり、庭園も熔岩の奇形、枝振り良き木々等を取り集めて、數奇をこらしたものだつたといふ。

或時百人の入足を使つて工事中、もう少し目が出てゐてくれたなら工事が済むんだがなアと言ふ時に、ふと長者が思ひ付いた様に黄金まばゆき扇でお日様を呼びもとさうとするように手



前の方にあふいだ。すると不思議や太陽が三尺許り後へかへつたので、「それ」と許り工事は進んだが、それ以来さしもの誇りを持つ長者も段々と没落の浮目を見る事となつたと。今から百年許り前の事だといふ。(佐野あき)

### ○ 幽 霊 屋 敷

(靜岡市)

今はもう、こはしてしまつてないが、一昔程前の事である。

安東練兵場の西の入口に近いところに、大きながらんとした二階家が建つた。初めの中は住む人もあつたらうが、後私が晝間その家の前で見たものは、いつも貸家の紙札のみだつた。そしてそんなに永い年月が経つたわけでもないのに、すっかり斜にかたむいて、全く危つかしい様子だつた。

晝間は近所の子供のよい遊び場になつて居た。泥靴のまゝ子供達が、兵隊ごつをして居ても怒る人さへなかつた。が不思議なことには、夜になると、何やらとき／＼物音がすると云ふのである。私達は、この無氣味に傾いた、眞暗な家を、ばけ物屋敷と呼んで居た。

ところが或日のこと、演習をして居た兵隊さんが、この家の便所にはいつた。すると驚いたことには、その便所の中に、泥棒がはいつて居た。早速つかまへられて終つたが、その家の中

には、いろ／＼の建具や障子は、あと方なく、すっかり板がむき出しになつて居たといふ。

つまり、この泥棒が毎晩々々、少しづつ運んで行つたのだ。夜中にもれて来た物音は、多分この運び出す音だつたのだらう。その家の跡は、今は空地になつてゐる。(長倉歌子)

### ○ ぞう屋敷

(志太郡焼津町八楠)

牛田橋に向つて左の土手を登つて行くと、一町餘りして左手に下るだら／＼道がある。此道を下りて行くと、濕つた草ぼう／＼たる中に苔むす墓が二三十並んで居る、薄暗い屋敷がある。之は昔八楠の牛田のみの墓場であつたが、整理に當り、役場から八楠は一所にかためよと云はれ、多くを南八楠或は北八楠に移した後で、今は捨て墓になつて居るのだ。何だか不氣味な、晝間でも通るのが怖しく感ぜられる。(神尾すゞ)

### ○ お化屋敷

(濱松市八幡町)

これは、昔濱松の田町や肴町に家の少なかつた頃、早馬の横町にあつた。その家には一つの古井戸があつて、狐を退治してはこの井戸に投込んで居たので、その家に住んだ人は死に絶えてしまつた。それで其處をお化屋敷と呼んでゐる。(金原せつ)



○ 沖の瀬御殿

一七〇  
(引佐郡三ヶ日町)

津々崎の南海岸より數丁の間を沖の瀬と稱し、淺瀬が続いてゐるが、その尖端に宏大なる建築物跡とも見える石垣が方町餘の間海底に残されてゐる。郷の人は沖の瀬の御殿と稱へてゐる。昔々或大名の御姫様が病氣保養の爲風光絶佳の猪鼻の湖岸に宏壯な邸宅を營み侍女を相手に、風の夕、雪の朝、思ひのまゝの生活をして居た所と云ふ。美しい女達の住家として、定めし面白いエピソードもあつた事であらうが、語り傳へる人もない。此の御殿跡には、美しい魚類が多いと云ふ。定めしお姫様の魂魄でもあらう。(堀川てる子)

○ たゝり屋敷

(引佐郡三ヶ日町)

鶴代の札木の附近に祟り屋敷と言ふ屋敷がある。昔此の屋敷に住んで居つた某と言ふ相當裕福な老爺があつた。或年の師走の夕方に、行きくれた二人連の六部さんが報謝の宿を求めたけれど、在郷の事だと云ふので、一人丈此の家へ泊めて貰つて、他の一人は他の家に泊めて貰ふことになつた。朝になつて他の家に泊つた六部が、  
「さあ出掛けませうな。」と札木のこの家に誘ひに行つた處が、主の親爺が

「私の家へ泊つた六部さんは先刻一足先にお立ちになつた。」と云ふ。戸口に懸けた同行二人と記された笠は正しく連の笠であるが、不思議な事であると首をひねり乍ら、同行二人がこゝで一人旅となつて出發してしまつた。聞けば、先の六部は大變小判を持つて居つたと言ふ事である。それからと云ふものは、流石樂であつた其の家も、だん／＼微祿して土藏も屋敷も人手に渡して、西國巡禮の旅にのぼつて仕舞つた。多分知らぬ他國で並木の肥になつた事であらうそれからと云ふものは、此の屋敷へ何の關係のない誰が住んでもどうも榮えぬと言ふ事だ。

(堀川てる子)



## 九、地名の由來

## ○ころ柿山

(賀茂郡下河津村)

ころ柿山には名前の如く大きなコロ柿がある。これは幾百年たつたか判らない位の木であるが、此の木には今でも、女の人は一寸でも手を付けられない。それは春、秋に此の木に柿がたくさんなり、村では女も男も皆これを取りに行つた。男は早速木に上り自由に柿を採つた。女は下から落してくれ〜とせがんでゐた。ところがふとした拍子に女の子が木にさはると、突然木は女の子を、くるつとまきこんでしまつた。そして、木の上に乗つて居た男の子供は皆木から落ちてしまつた。今でも女の子が木にさはると、まくからと言つて、そばに近づけない。

(村越ちい)

## ○田子島

(賀茂郡田子村)

田子の港外十餘町の海上に、二つの岩島がある。男島と女島である。女島は大空洞があり、

舟を入れることが出来るので、田子の奇勝として名高い。

昔、田子と隣村の安良里とでこの島を争つた。田子は田子の島だと言ひ、安良里は安良里の島だと主張した。そして、てんでに綱をつけて、自分の村の方へ引き合つた。そして田子が勝つた。島は田子の沖へ引き寄せられて、水久に田子の島となつたと云ふ。

田子の田子島安良里でしよぶく、

しよぶく安良里は無理なとこ。

といふ俚諺が今もこの地に残つてゐる。子、井たまふ)

## ○船隠し

(賀茂郡田子村)

北條氏が田子を要港として、出入の船舶を嚴重に取調べしめるために、天正元年(二二三三年)田子城ヶ平城主山本信濃守常任(田子、梨本等百三十五貫の領主)に法度狀を與へた。而して山本信濃守は大田子海岸にある小灣に軍船を隠し、合之浦と田子との間にある小高き岡(現在の高見)にある見張所と協力して附近航行の船舶を取調べた。この時以來、その大田子海岸にある船を隠したその小灣を、舟隠しと呼ぶやうになつたと傳へられる。

(森千枝子、藤井たまふ)



○ 尊ツシ

嶼シマ

(賀茂郡田子村)

尊島は港口の南側にある。三島、山字形をなす。事代主尊が往昔この島で釣をなされた。よつて事代主尊の尊の字をとつて尊の島と呼ぶと傳へられる。(森千枝子、藤井たまゑ)

○ 瓶 山

(田方郡伊東町)

「あさひさす夕日かゞやくその山に、こがね千杯、朱千ばい。」東林寺の古い紙に書いてあつた。この不思議な歌は、古老が一人、知つてゐるきりだつた。村が困つた時、「あさひさす、夕日かゞやく山」を堀る様に、言ひ傳へられてゐたのだつた。中古、村が困つて、朝日さす、夕日かゞやく山を、探して、瓶山を堀つたが、高さ一尺五寸位の大きな瓶が出て來た。

だが何も入つてゐなかつた。その瓶のふたには、とても美しい平石が伏せてあつた。それで今、その瓶は東林寺にをさめられ、瓶山の山上に天王さんをまつてあるんだとさ。

朝日さす、陽のさし方は——小。

比べると

夕陽かゞやく——同——大。

どうしても、あの山らしいといふ。きつとまだ別の所を堀れば黄金が出て來るだらう。

伊東よいとこ瓶山見れば、朝日てるく夕日はなびく。

誰が置いたか若葉の下に、こがね千ばい朱千杯。——伊東節——(尾崎敏子)

○ 猫 越

(田方郡上狩野村)

上狩野村に猫越といふ地名がある。昔或旅商人が、雨降りの日に此の村に來り、宿に泊つて床につくと、夜中に大きな聲が聞えるので驚いて飛び起きて見ると、一匹の大猫が敷板の上で踊つて居り、それを取圍んで多くの子猫が輪を作つてゐた。

かうして商人は熟睡も出來ない中に夜も明けたので下田へ向つた。その途中の山道に猫の足跡が澤山ついてゐたので、それから此處を猫越といふやうになつた。(本多みち)

○ 山 武 士 峠

(田方郡西豆村)

小峰の南方宇久須村との境界に近い峠の名であつて、昔山武士が戦を交へた所と傳へられ